

るものでないことも明らかである。しかし多くの人には、どうせ俺はこんな性格なのだ、とも言ふし、また、自分はこんな性格になつてしまつたとも言ふのである。

この二様のことばには興味ふかい内容がふくまれてゐる。といふのは、前者は性格を先天的のものとして宿命的に考へてゐるし、後者は、環境が人間の性格を變へてしまつたといふ風に解釋されてゐるからである。

つまり、前者にとつては性格は生れ具はつたもの、變らないもの、といふ風に考へられてゐるのに反し、後者は、性格は境遇によつて變りうるもの、動くもの、といふ風に考へられてゐるわけである。しかし、いづれも一方的な解釋に終つてゐることは争ひ難くおもはれる。なぜならば、先天的なもの、宿命的なものとして運命づけられてゐるときには、彼はその性格が環境とふれあふことによつて生ずる人生的な面をわすれてゐるか、さもなければ氣づかずにあるからである。すると性格と運命との闘争は、つまり、運命をきりひらくといふ自發的な努力は意味を喪つてしまふわけになる。

また、自分はこんな性格になつてしまつたといつて、環境が人間の性格を變へるものだと主張

する側の場合は、性格はかはりうる、といふ面だけがとりあげられて、外側のおよぼす影響だけを問題にして、外側の力にむかつて闘ふ自分の内側の意志や努力は見落されてゐる。これは性格と運命といふものの關係が、一方的にとりあげられた場合にでてくる結論である。して見ると、もともとこんな性格なのだといふ言葉も、こんな性格になつてしまつたといふ言葉も、生きる過程できづかれてきた人間の側面であることに疑ひはない。だがそれだけでは、人生内容として現實的ななんらの解決もあたへられないであらう。なぜならば、そこには人間の努力がなにひとつ現實との觸れあひの面でたゞかはれてゐないのだから。

したがつて、もともとこんな性格だと言つて人生をあきらめたり、こんな性格になつてしまつたと言つて、不幸な境遇を環境になすりつけてゐる間は、現實としてはなんらの解決もあたへられるものでない。つまりそこでは、人間の主體が問題なのだ。おのれの意志や努力によつて、先天的であるものを克服し、また環境からの悪しき力をも内側の努力によつて變革する。人間の生活にたいする能動性とは、要するに、人間自身の主體的行爲をいふのである。だから性格と運命のたゞかひは、宿命としてではなく、生活の飛躍として考へられねばならぬのではあるまいか。

ながい年代にわたつて、運命といふ言葉が人生に大きな力をもつてきたのは、人間がおのれに力にたのみ得ないで、環境に従順であつたところから生じたのであらう。してみると、多くの小説に映つた女性たちの滅びの人生とは、生きる意志弱きがゆるゆるの諦めではなかつたか。

明治期の小説に描かれた女性に比較して、「律子と瑞枝」の主人公律子は、生活にたいする自信といひ、人生や戀愛にたいする自覺といひ、明治年代の女性に見られない確固とした意志をもつ女ではあるが、經濟的に獨立することが困難なところから、識らず知らず環境に負かされてゆく。女の自活がなぜ困難であるかを考へ、つぎのやうに彼女は語つてゐる。「腕力があれば土方にもなれるけれど、あたし達では駄目だし、あたし達の持つてゐる才能なら、男の方が餘計もつてゐるに違ひない」と。

この言葉は、女自身の傳統的弱點を告白してゐるばかりでなく、當時の經濟關係が、女性の勞働力をそれほど必要としない段階にあつたことをもの語つてゐる。そして、「せつばつまつた場合に、女がお金を得る道は、からだを提供する以外に何もない」といふ告白を考へあはせれば、當時の女性たちにあたへられた生活面の狭さが如實にうかがはれるではないか。しかも、その自覺

や認識において、過去のどの作品にも容易にみいだしがたいほど思慮ふかく行動する律子が、それを告白してゐるのである。

かうした決意にまでかの女をみちびいた経路には、たえず不安定だつた當時の庶民生活と、俸給生活者の弱い心理が語られてゐる。しかも、歐洲戰亂の餘得でいちぢるしく財界の賑はつた大正六七年の好況時代においてさうだつたのを考へると、女の不幸といふものが暗示ふかく思はれるではないか。

4。

大正期の中葉は、一夜成金の輩出した好況時代として特徴的であるばかりでなく、國民思想の變遷のはなはだしかつた年代としてまた意味ふかい一時期でもあつた。五六年の頃兆候を示した急進思想が、二三年後には大旋風のごとく當時の知識人を捲きこんで、いはゆる思想混亂の時代を現出したのである。世界大戰によつて招來された左翼思想などが、模倣的にわが國土をも襲つ

て國民のあひだに陰鬱な思想的悩みや軋轢を生んだのもこの時期である。

思潮の動きからいつても、明治期のそれとは著るしい懸隔が示されてゐる。前者が舊時代の道徳や意識からの離脱に苦しんだのに比べて、後者は、社會的な立場から人間生活と生活の條件とを探らうとしてゐる。思想的にも經濟的にも、とにかく慌だしい空氣の充滿した時代であることは事實であらう。

直接には、男の手によつて装ひを變へてゆく社會生活ではあつても、激動する生活の波間には、やはり、女の生活が浮標のごとく漂つてゐる。緊迫した社會生活の波浪に揉まれながら夭折する若く美しい浮標の一つに、「眞珠夫人」の瑠璃子がある。

「記憶のよい讀者は、去年の二科會に展覽された「眞珠夫人」と題した肖像畫が、秋の季節シキを通じての傑作として、美術批評家達の讚辭を浴びたことを記憶してゐるだらう。それは、清麗高雅、眞珠のごとき美貌をもつた若き夫人の立姿であつた。而も、この肖像畫の成功は、その顔に巧みに現された自覺した近代的女性に特有な、理智的な、精神的な表情の輝きであると云はれてゐた」と作者も附記してゐるやうに、「眞珠夫人」の瑠璃子は、聰明並びなき美しき女性である。しかし、

このやうに理智と天稟とにめぐまれたかの女が、なぜに、その生涯を通じて忘れることのできなかつた戀人をもすて、また自分の誇りをもすて、親と子ほども年のちがふ男のもとに嫁びていかなばならなかつたか。ここにかの女の性格的な破綻があつたのである。

瑠璃子は、たんに教養ある女性といふだけでなく、女の誇りにたいしてもつよい自覺と信條とをもつてゐる。このことは未亡人になつてからの彼女の行動にあらはれてゐるばかりでなく、莊田勝平に嫁びていくときの動機にもうかがはれるし、結婚生活のなかにも露骨に示されてゐる。

莊田勝平は、いふところの一夜成金である。機微に鋭いかれば、歐洲動亂がはじまるや、早速才覺をめぐらして巧みに遊ぎまはり、一躍して千萬銀を積みあげる。つひ、三四年まへまで、微々たる一貿易商であつた彼は、金ができるにしたがつて、自分の世界がだん／＼擴がつてゆくのを感ずる。いままでは「其處にゐるか」とも聲をかけてくれなかつた人々が、何時のまにか、自分の周圍に集まつて来る。近づきたいと思つてゐた一流の實業家や政治家たちが、いつのまにか、自分とおなじ食卓につき、自分を招待したり、されたりするやうになる。その他、かれの金力が物をいふところはいたるところにあつた。緑酒紅燈の巷でも、かれは自分の金の力が萬能で

あるのを知つた。かれは、すべてが金の力だと思つた。金の力さへあれば、どんなことでも不可能ではないと考へた。彼にとつて、金力は唯一の信仰であつた。

だが、たまたま園遊會を催したとき、招待者のなかに自分を罵倒する人間がゐた。しかも、それが自分の子供にもひとしい學生服の男と若い娘である。彼は、信仰を踏みにぢられた憤りと口惜しさに顛へながら、金の力が人間にとつてどれほど怖ろしいものであるかを知らしめてやらうと決意する。若い男とは杉野直也であり、娘は、女主人公の瑠璃子である。

勝平は、その青年が自分の邸へ出入りする松野子爵の息子であることがわかると、早速杉野を介して、瑠璃子を妻に欲しいと申込むが、かの女の父から言下にことわられ、仕方なくこんどは瑠璃子の父の借用證文を一手に蒐めようと畫策する。貴族院の鬪將として知られた唐澤男爵は、そのながい政治生活ですつかり財を失ひ、抵當にはいつてゐる邸で、つつましく瑠璃子と暮してゐたのだが、莊田から手厳しい借金の催促をうけて、ますます苦境におちいる。だが莊田は借金の催促だけではあきたらず、唐澤がかつて法相の椅子を占めてゐたころ、秘書官として仕へた木下某を使つて軸物の鑑定をもとめさせる。唐澤は、木下ごときが「夏珪」の眞物を持つてゐるは

すがないと思ひ、見もせず持つて歸つたが、いと勸めるが、たつて懇望するので置いてゆかせぬ。彼が歸つたあと、それとなく軸物を見ると、贋物どころか夏珪のものなかでも逸品とおもはれる畫幅である。苦境におちいつてゐた矢先のこととて、ふらふらと金に代へる氣になり、瑠璃子の眼を盗んで持出す。だが莊田から告訴されるにおよんで、はじめて謀られたことを知り、憤りと自責から自殺を企てるが、瑠璃子にさへぎられて未遂にをはる。

自分ら親子にたいする莊田の悪どい報復手段に堪へかね、かの女は自分からすすんで莊田の妻になることを承諾する。瑠璃子の申出をきいて老男爵はなかばは驚き、なかばは怒りもしたが、かの女ははじめの決意をどうしても翻へさうとはしない。

「親の難儀を救ふために子が犠牲になる。親の難儀を救ふために、娘が身賣をする。そんな道徳は、古い昔の、封建時代の道徳ではないか。お前が、そんな馬鹿なことを考へる。聰明なお前が、そんな馬鹿なことを考へる。お父様を救はうとして、お前があんな豚のやうな男に身を委す。考へるだけでも汚らしいことだ！ お前を犠牲にして、自分の難儀を助からうなどと、そんなさもないことを考へる父だと思ふのか。」

老男爵はさう言つて難詰するが、かの女は、お父様の身代りになるといふやうな消極的な動機からではないといふ。自分は法律の網を潜るばかりでなく、法律を道具につかつて善人を陥れようとする悪魔を、法律にかはつて罰してやるのだといふ。一家がうけた迫害に復讐するだけでなく、社会のために、人間全體のために、法律が罰しえない悪魔を罰してやらうと思ふのだといふ。すると父は、お前の動機はそれでもいい。だがあの男と結婚することがどうしてあの男を罰することになるのだ。どうして一家がうけた迫害を復讐することになるのだ、といふ。かの女は冷やかにこたへた。

「結婚は手段です。あの男に對する刑罰と復讐とが、それに續くのです」

かくてかの女は、父の止めるのも聞き容れず莊田と結婚するのである。

莊田との結婚が新聞に報道されると、第二の小森幸子事件として、喧しい紛議が騒然と起つた。小森幸子事件といふのは、大正のはじめに、時の宮内大臣中田伯が、還曆をすぎた老體で、まだ二十をすぎたばかりの處女と——爵位と權勢にあこがれる虚榮の女と婚約したために、一世の烈しい指弾と抗議とを招いた事件である。

莊田勝平は、當時の中田伯よりは若かつたにはちがひないが、年のひらきは、やはり争へなかつた。したがつて世情は、さまざまな物議を生んで、ある新聞のごときは、華族の墮落だと結論してゐた。だが瑠璃子は、取沙汰が激しければはげしいだけ、決意の臍をかためるのである。

彼女は、かうして莊田と結婚生活にはいつたが、はたして刑罰と復讐とをそれにつづけておこなつたであらうか。かの女は、まづ勝平から肌と黒髪とを守らうとした。結婚生活において、女の肉體にふれ得ない男の苦痛がどれほど大きいかは、想像に難くない。彼は悶え苦しむにちがひない。自分のものになつたと思ふ女から一さいを拒まれることが、男にとつてこのうへもない侮辱であることを憤るにちがひない。つきには、勝平の息子で、二十三になる白痴と特別親しく交るのだろうか。不満にいらだつてゐる彼は、かならず嫉妬を燃やし、憎惡の齒ぎしりをつのらせるにちがひない。かうした苦痛を経ることによつて、彼は、やがて精神的に破滅するだらう。

瑠璃子は、焦らずにそれをした。彼女の企ては豫定どほりに勝平を苦しめた。ことに、白痴の倅と親しくされることは、勝平にとつて我慢がならなかつた。彼は口實をもうけて瑠璃子を別荘に誘つた。

あらしの強い夜である。はじめて親しいことばをかけられた勝平は、酒の力をかりてかの女を征服しようとするが、不意の鬨入者のために妨げられ、かへつて命をうしなふ結果となる。勝平を死にみちびいたものは、二人のあとを追つてきた、白痴の倅勝彦である。勝平の死は、瑠璃子の生活を轉換させた。形式だけの結婚生活ではあつたが、やはり、結婚の形式のなかに、妻としての形式もおのづから定められてゐて、かの女の意志にもある種の制限が加へられてゐたのは事實だが、夫の死とともにその形式は消滅した。

彼女は、自分から求めてさまざまな男に接近していつた。戀愛を享樂しようと思へた。男たちもまた、美貌と才能とにめぐまれた瑠璃子の周囲にむらがり集まつてきた。かうして、かの女の放態な生活がはじまるのだが、たまたま、かの女に失戀した青木といふ學生の死にからまつて、渥美といふ正義感のつよい男がかの女の面前にあらはれ、不倫の行狀や行爲を難詰する。すると彼女は、女が社會からうけてゐる道德律の不當さを、つぎのやうに憤つて言ふのである。

「女性が男性を弄ぶとあなたがた男性は、直ぐ妖婦だとか毒婦だとか、あらん限りの悪名を浴びせかける。貴方などは、眼のいろを變へてまで叱責なさうとする。が、御覽なさい！ 世間の

男性がどんなに、女性を弄んでゐるかを。女性が男性を弄ぶにいたしましたところで、それは男性の浮動し易い心を、弄ぶに過ぎないぢやありませんか。男性が女性を弄ぶ場合は、心も肉體も、名譽も節操も蹂躪しつくすぢやありませんか。眼にこそ見えませんが、この世界には、男性に弄ばされた女性の生きた惨たらしい死骸が、幾つ轉がつてゐるか分りません——」彼女はさらにつづける。「人が虎を殺すと狩獵といひ、紳士的な高尚な娛樂としながら、虎がたま／＼人を殺すと、強暴とか残酷とかあらゆる悪名を負はせるのは、人間の得手勝手です。我儘です。丁度それとおなじやうに、男性が女性を弄ぶことを當然な普通なことになら、社會的にも妾だとか藝妓だとか、娼婦だとか女優だとか、弄ぶための特殊な女性をつくりながら、反對に偶々一人か二人の女性が男性を弄ぶと、妖婦だとか毒婦だとか、あらゆる悪名を負はせやうとする。それは男性の得手勝手です。我儘です。妾はさうした男性の我儘に、一身を賭して反抗してやらうと思つてゐます——」

かうして彼女は、男のつくつた道德と倫理に、その若き肉體と感情とを賭けてたたかふとしたのであるが、不幸にも、失戀した男の手にかかつて仆れる。

以上は、「眞珠夫人」の梗概であるが、ここで見るやうに、瑠璃子といふ女性の相貌には、たしかに前代の小説に見ることのできない強い女の自覺が示されてゐる。たとへば、自分の行動にたいする責任を、あくまでも自分で負はふとする點において、男との對等感において、戀愛感情において、また女の立場や生活が、社會的には如何なる状態におかれてゐるかを思慮ぶかく省察してゐる點において、たしかに、稀有な認識に立つて人生と生活を考へようとする女性の一人であつたことは事實である。

いふまでもなく彼女は、めぐまれた環境に育ち、めぐまれた趣味と教養とを身につけることのできた女性である。この點では、當時の女性が知りうる最高の學問と知識を備へた女性だといふことができる。だからして、結婚や性道徳にたいする判断にも、庶民生活のなかに育つた女性の倫理とはちがつた自覺が、つまり教養からくる自覺が、おのづから具はつてゐたことは事實であ

らう。しかし、一面からいへば、このたかい教養や學識は、かへつてかの女を破滅にみちびく結果ともなつてゐることは興味がある。なぜならば、だいいちにかの女は、金の力を輕蔑する。金といふものの現實的な力がどんなものであるかを念頭にもしてゐない。これは園遊會に招かれたとき、戀人とかはす會話にもはつきりうかがへる。

「妾來なければよかつたわ。でも、お父様が一緒に行かう／＼云つてお勧めになるものですから」

「僕も妹のお伴で來たのですが、かう混雜しちや厭ですわね。それにこの庭だつて、都下の名園ださうですけども、ちつともよくないぢやありませんか。少しも自然な素直な所がありません。いやにコセ／＼してゐて、人工的な小細工が多すぎるぢやありませんか。殊にあの四阿の建て方なんか厭ですわね」

「お金さへかければいいと思つてゐるのでせうか」

「どうせさうでせう。成金といつたやうな連中は、金額といふ事より外には、何にも趣味がないのでせう。凡ての事を金の物差で計らうとする。金さへかければ、何でもいいのだと考へる。

今日の園遊會なんか、一人宛百圓とかを入れるとか何とか云つてゐるさうですが、あの俗悪な趣向を御覽なさい」

「全くですわ。成金とか何とかよく新聞などに、彼等の豪華な生活を謳歌してゐるやうですが、金で贏ちうる彼等の生活は、どんなに單純で平凡でせう。金が出来ると、女色を漁る、自動車を買ふ、家を新築する、分りもしない骨董を買ふ。それきりですね。中に、よつほど心掛のいい男が寄附をする。物質上の生活などは、いくら金をかけても、直ぐ盡きると思ひます。」

つまり彼女には、金銭でかたちづくる生活が賤しくおもはれたのである。人間の営みにとつてもつとも美しいもの、あるひは豊かなものは精神生活であつて、金銭は、むしろ人間を單純にしたり平凡にしたり、あるひは墮落させるのが關の山に思はれたのである。彼女には、物質の力よりも、高雅な人格や精神だけが人間生活を築くものでなければならぬとかがへられた。したがつて、金銭の人間におよぼす悪い面だけが、ここでは問題にされてゐて、反對に、金銭を媒介としていとなまれる經濟生活や社會生活といふものの本體は、ふかく追求されはしなかつたのである。

かうした考へかたは、ユーヂットにならうとする結婚の動機にも明瞭にあらはれてゐる。ユーヂットとは、昔猶太のベトウリヤといふ都市が、ホロフェルネスといふ恐ろしい敵の猛將に圍まれたとき、美しい少女が、ベトウリヤ第一の美しい少女が、侍女をたつた一人連れたきりで、羅衣をまとつた美しい姿を虎のやうなホロフェルネスの陣營に運び、容色に魅せられた敵將を、圍中でたつた一突きに刺しころした話の主人公なのである。ベトウリヤの破壊と虐殺とを救ふために、おのれの貞操を犠牲にして闘つた美しい少女こそ、ほかでもないユーヂットだつたのである。

牝獅子の乳で育つた野蠻人の猛將を、細いかひなで刺し殺した猶太の少女の美しい姿が、彼女には忘れがたく思はれてゐたのであらう。要するに、瑠璃子がかうした美しい人生の世界を、自分で築きたかつたのである。つまり、この人生や社會を、抽象的に割りきることが美しく思はれたのである。だからこそ、金銭の生活はあまり卑賤に考へられたのだ。なぜかなら、金は、あまりにも現實的な力をもつものであつたから。そしてこの觀念を育てあげたものが、めぐまれた環境であり、めぐまれた教養や趣味なのであつた。

彼女は、肉體を守ることと結婚生活を回避したと思つた。戀愛を享樂することと、男性を醜弄

したと考へた。自由に振舞つて生きること、人生に徹したと思つた。しかし、息をひきとる瞬間に呼びつづけた戀人直也と添へなかつたといふ點では、女としての人生を貫けなかつた脱落者の一人ではなかつたか。また、本能的に生きることすらできなかつたといふ點では、かの女の觀念は、かの女にとつて、まことに不幸な毒素でもあつたわけである。かくて、もつとも自覺したと思はれる聰明な一人の女性瑠璃子は、女の眞實の途に生きることでもできずして敗れるのである。おほくの女のために、女の不幸な立場のために、男のつくつた道德と社會惡とを破らうとして、敢然と立ち向つたかの女ではあるが、かうした女の意志にふり向かうともせずには現實は狂はしく翻轉をつづけ、その荒い波がしらのなかに、女の魂と肉體とを没し去るのである。一夜成金の輩出した時代の悲劇として、教養ある女性のたどつた生涯が、ここでは痛ましい時代性格として反映されてゐる。

Ⅱ 生活の慧知と悦び

1.

「眞珠夫人」の瑠璃子が、小説のうへで仆された時期に前後して、「青鞥」の後身ともいふべき「新婦人協會」が、平塚明子や市川房枝らの手によつて起された。

「原始太陽は女性であつた」といふ勇敢な闘ひの叫びを宣言して、人間的な目ざめに奮ひ立つたかつての女性たちは、家庭をもち、愛兒を得て、世智辛い實生活の波をくぐるうちに、いつか解放といふ言葉も使はなくなり、かぼそい聲で母性の保護を訴へる始末であつたが、十年の歳月をへだてたこの大正八年には、「新婦人協會」の名のもとに、やうやく復活の運びにいたつた有様である。

しかし、復活はしたけれども、新婦人協會の手で獲得した權利といへば、治安警察法第五條の、

「女子は政談集會に會同し、其發起者たることを得ず」といふ條文の修正を可能ならしめたくらゐのものであつて、花柳病にたいする結婚制限や、母體の擁護のための拒婚運動などは、仰々しい請願理由書を作成して運動したにもかかはらず、つひに議會（第四十二、三の兩議會）を通過することも出來ずに立消えとなつてしまつた。

もつとも、この他にも、女子大學や女高師の教授などを中心にした「世帯の會」といふやうな、生活改善を目的とした運動はあるにはあつたが、世人の關心をあつめるやうな成果を、なにひとつ殘さずに存在をうしなつた。

このやうに、一部知識人のあひだには、女の生活と立場とが社會問題として重要視されはじめたことは事實である。しかし、かうした風潮は、當時の女性一般の生活心理とはひどくかけ離れてゐた。といふのは、この種の運動が、たんに、一部知識層の女性たちへのみ必要な問題であつて、肝腎の、働くことなしには生活といふものを口にする必要のない一般の女性たちには、直接必要と思はれない性質の問題だつたからである。したがつてこれらの婦人運動は、眞に庶民生活の幸福と擁護のための運動となることは出來ずして、わづかに、それを口にしなければ寂し

くてやりきれぬ人達の趣向を満足させたに過ぎなかつたとも言へる。

このことは、庶民生活を描いたいくつかの小説に登場する女主人公たちの心理に徴しても、はつきりうなづける事柄だと思はれる。たとへば徳田秋聲の「あらくれ」に描かれるお島といふ女性などの場合がさうである。

彼女は、生活に負けない女である。自分から男を棄てても平氣で獨立のできるしつかりした氣魄の持主である。

七つのときに養親として貰はれてゆき、養親から入婿の話のできる年頃まで、商賣の紙漉を手傳つたり、野良にも出たりして不自由なく育てられたお島は、作男としてその家にながく働いてゐる養父の甥にあたる作太郎といふ薄野呂の男を婿に選ぶらしい親の意嚮を耳にすると、養家の身代など目もくれずに、きつぱりことわらうと考へる。だが養父母は、執拗に彼女を説いて作太郎をすゝめる。お島はそのたびに、實家へ歸つては不貞腐れて幾晩も泊つてくるのであるが、たまたま養母の知合の醫者に年頃の弟があつて、それならばどうかといふ話ができたときには、はじめてほつとした氣持で返事をするのである。

しかし、いよいよ婚禮の夜になつて、夫となる花婿が、自分の知つてゐる町醫者の弟でないことがわかると、かの女は、前後も考へずに家を飛出す。肩すかしを食はされた養家の親たちは、お島の實家へなどとなく出かけて連れもどさうとするが、かの女は従はうとはしなかつた。

作のところへ歸るくらゐなら、死んだがましと考へてゐたお島は、ふたたび甘言に誘はれはしなかつたが、翌年の春になつて、ある罐詰屋へ嫁入ることになると、「天性の反抗心から、傍で強ひつけやうとしてゐるやうなこの縁談について、結婚を目のまへに控へてゐる多くの女のやうに、素直な満足と喜びにやはらぎ浸ることはできなかつた」と作者も書いてゐるとほり、かの女の氣質は、間男をもつことを恥ともしないやうな養母のかたはらで、物事を素直によるこんだり悲しんだりすることの出来ない女として育てられてゐたのである。

これは終生を通じて、いつも、かの女を危険から救つてゐる強靱な性格でもあつた。かの女は、はじめに嫁づいた罐詰屋の鶴さんと別れ話もちあがつたときにも、けつして悲んだり歎きはしなかつた。

唯みあひこそすれ、夫婦は夫婦だと信じこんでゐるお島の姉は、甲斐々々しく立働くかの女を

眺めて「能く思ひきれた」と感心する。しかし、お島は笑つて言ふのである。

「藝者や女郎ぢやあるまいし、いつ迄くよくよしてゐたつて仕方がないでせう。私はあんなへなくした男は大嫌ひです——」

かうして彼女は、一年足らずの鶴さんとの夫婦暮しに嘗めさせられた、甘いとも苦いとも解らないやうな苦しい生活のいさごさから脱れて、どこまで弾むかしのやうな體を、荒い仕事をするので楽しませてゐるのである。だが子供のないお島は、まもなく獨り暮らしをしてゐる伯母の許へからだを預け、裁縫の手助けなどして暮してゐたが、たまたまその家へ出入りする小野田といふ若い裁縫師と親しくなつたことから、はじめに自分自身の心と力を打籠めてはたらけるやうな仕事にとりつかうと思ひたつのである。

それは、ちやうどその頃はじまつた外國との戦争（歐洲戦争）が、いろいろの仕事を提供してゐる最中だつたからでもあるが、一つには、自分の仕事に思ふさま働いてみたい——盲動と屈従を強ひられてきたこれまでの境界から脱けるためにも、自分自身の力でできる仕事を、思ふさま仕遂げてみたいと考へたのである。

小野田の持つてくる仕事は、寒さを目先にした戦地にゐる軍人の防寒外套のたぐひや帽子であつた。かの女は、精一杯のはたらきをした。

「平氣で日に二圓ばかりの働きをするお島の帯のあひだの財布のなかには、いつも、自分の指先から産出した金がさくさくしてゐた」と作者も書いてゐるやうに、かの女は疲れと倦むことを忘れてはたらいいた。

しかし、それだけの働きで満足できなかったかの女は、ときどき納品にゆく被服廠の役員に、洋服屋になつてはとすすめられてその氣になり、資本を苦面して小野田と洋服屋をはじめめる。ミンや裁板を据ゑつけて職人もさがし、小僧なども集つて店は出したが、結果は思はしくなかつた。二人は轉々と住居をかへた。あるときは上海に渡らうともしたし、また郷里の土地を分けてもらつて、それを金に替へやうとも考へた。だがどれも思はしくなく、東京へ舞ひもどつて店を出したが、結果はおなじであつた。しかし、かの女はひるますに店をつづけた。

間借をしながら支へてゆく商賣の重みが、太くもない彼女の兩腕へどつかりのしかかり、耐へることの困難さが日々につのつた。だがたまたま小野田の思ひつきで手をそめた諸學校の制服が、

豫想をこえた成績を得るやうになりはじめて、状態は一轉した。間借を引拂つて店もあたらしく構へ、工場には職人の數がにはかに殖えてきた。

白い夏の女唐服に、水色のリボンを巻いた帽子を冠つて、かの女は、いたるところへサンプルを持つて廻つた。小野田や職人たちがまだぐつすり睡つてゐるうちに、床を離れ、化粧をし、手ばしこくコルセットをはめたり、やうやく着なれたベチオトを着けたりした。洋服がすっかり體にくつついて、ぼちや／＼した肉を締めつけられるやうなのが、彼女は氣持よかつた。ちいさいしなやかな足に踵のたかい靴をはくと、はづむやうに手足は軽くなり、とても入つてゆけさうもない場所へも、何の羞恥も臆劫さも感ずることなしに、自由に飛びこんでゆくことができた。朝おきると、だるい體がちぎにかうした軽快な服装を要求し、一朝でも、洋服で出てゆかない日があると、一日中氣分の悪い思ひがはなれなかつた。倦むことを忘れてはたらいいた。はたらくこと、そのことが彼女には生活の喜びでさへあつたのである。

かうしてかの女は、小野田と生活の地盤をきづくのであるが、自分からなにか一つ積極的に動かうとしない小野田の據りかかり根性に、いつか興味をうしなひ、いつそ別れて獨立しようかとも

考へる。

これは「あらくれ」の素描であるが、このやうに、一本立ちになつて事の運べる女性にとつて、小野田のやうな男は、眞の協力者としての役割をはたすことは困難であるばかりでなく、かへつて、邪魔な存在であつたかも知れない。彼女は、學問はなかつたが、生活に自信をもつてゐた。生き抜かうとする意欲の旺盛な點で、考へたことをどしどし實行してゆくといふ點で、かの女は、いつときも逡巡しない女である。生活にたいする思考感情の健康な女である。

2.

「眞珠夫人」に描かれる瑠璃子が、教養と理智と鋭敏な性格とにめぐまれた女性であると言へるならば、彼女は、働くものの知慧にみちびかれながら、誠意と眞率な人間性として生活をつらぬいた女性だとも言ひうる。また、かういふ女性であつたからこそ、養父母の押しつけた結婚や、女を圍ふ自墮落な懽詰屋や、他人に頼ることなしには生きられさうもない小野田のやうな男を、人

生の協力者としてながめることができなかつたのであらう。

環境からいつても、けつして彼女は、順調な途をたどつたとはいへない。養女としての生活、結婚の敗れから、轉々とうつりかかはる受難の境涯。これらは、いづれも女の生きようとする意志を挫くに都合のいい條件ばかりである。生活の安定を得るために、男から男へ移つていつた女は昔からかぞへきれない。だがおのれの力を信賴してみづからの信念によつて生き抜かうと努力した女性はまれである。「律子と瑞枝」に描かれる律子も、たしかに眞剣な態度で生活にたちむかつてはゐる。だが、どんづまりの境遇に直面したとき、「せつばつまつた場合に女がお金を得る途は、からだを提供する以外に何もない」といつて、自分の弱點を自分から、女の弱さとして諦めてゐるのにくらべれば、お島ははるかに、生活の努力にひたむきであり、運命の自主的な開拓者である。

おなじ混亂の時代に生きた女性として、「眞珠夫人」の瑠璃子と「あらくれ」のお島とを比較すると、そこには、一定の生活層に生きた女性の相貌がうかがはれる。ともに、自分の信條にしたがつて生きた女性ではあるが、この二つの女性像には、するどくことなれる側面が附着してゐて

たんに性格のちがひといふには、あまりにも意味が過剰してゐるやうに思はれる。なぜならば、前者は教養や學識の點ですぐれてゐるにもかゝはらず、現實とのたたかひで敗れてゐるのに反し、後者は、特別の學問や才能がないにもかゝはらず、生活そのものに負けないだけでなく、女としての人生の眞實にもうちかつてゐる。

たしかに、瑠璃子も人生を諦めてはゐなかつた。心をいつはつて結婚したときも、未亡人となつてからの空白な生活をおくるときも、運命的に自分の人生を考へるやうなことはしなかつた。が、たつた一つの希ひとして、その若い肉體と魂とを賭けてたゞかはうとした男性への抗議が、うしなつた自分の生命の悦びや誇りにも代へ得るほど、現實的に果し得られたであらうか。けつして果されはしなかつたのである。ひとりの男性の感情をもてあそぶことはできたかも知れないが、男の道徳や既成觀念には傷一つあたへることはできなかつたのである。してみると、あたつたとおもつた弾は、おもつただけで相手を仆してはゐなかつたのだ。彼女が眞實とかがへておこなつた道は、結果としては、このやうな觀念の遊戯に過ぎなかつたのである。

お島はどうか。彼女は、觀念的に自分の人生や生活を設計しようとしなかつた。自分のおかれ

てゐる境遇をはつきりと知つてゐた。そして、その境遇にながつた世界だけを誤りなく生きやうとつとめた。質素な望みではあつたが、しかし、それは生活に深く根をおろしたもののみのものつ、信條であつた。かの女は、自分の生活が、空想や飛躍にみたされたものでないことを知つてゐた。知つてゐればこそ、働くことによつて、運命と人生とを探りあてようとしたのである。

とくべつの教養や學問をもたなかつた彼女は、人生を具體的に體驗することによつて、事物にたいする判断や評價の能力をきたへることができた。それは必然的に、彼女の觀念を現實的なものにし、その思考感情をも、ふとく逞しいものに仕上げた。環境の條件と、彼女自身のもつた相した諸條件とがまじり合ふことによつて、お島の間像はできあがるのであるが、瑠璃子との相異は、やはり、たんに生活能力の點だけでなく、かうした思考感情にもいちぢるしい不一致があつたのである。この二つの女性像にあらはれてゐる相異は、第一次歐洲戰爭當時の、日本の知識層と庶民階層に生きた女性の相貌として、興味ある對照を示してゐる。

もちろん、この二つの女性像にあらはれた生活態度や心理傾向をもつて、この時期の女の生態を代表させることはできないが、とにかくある生活層に生きた女性たちの特色をつたへてゐるこ

とは事實であらう。いふまでもなくこの時期は、歐洲戰亂の影響から國內機構にもはげしい變化が見えてゐた、世相はあわただしく動き、人心も頹敗へと下降してゐた。一般的に好況時代といはれてゐるが、思想的に心理的に混亂した時代だったのである。

3.

かうした風潮を物語るやうに、享樂機關にはかにふえ、カフェーや踊り場がいたるところに出来、酌婦ならざる女給が、重役やサラリーマンを相手にするやうになつた。男たちのかうした頹廢的な氣分は、女の世界にも反映し、お島とはちがつた型の女たちが、巷にとつさり登場して来た。永井荷風の「つゆのあとさき」に描かれる君江などは、かうした女性の一面をもつともよく傳へてゐる女である。

彼女は、氣のすすまない縁談を振りきつて上京し、小學校の友だちで、いまでは人の妾になつてゐる京子といふ藝者あがりの女のもとに寄寓するが、京子の旦那が會社の金を費消したことか

ら検事局へ送られることになり、その結果京子は、藝者をしてゐる時分のお馴染を家にひつ張つてきたり、待合に誘つたりして暮すやうになるが、ひとつ家に寝起きする君江も、京子が楽しんでゐるさうした生活へひきこまれてゆき、はては藝者にまでならうと考へる。だが、藝者になるためには鑑札がいる。鑑札は實家へ問合はせたらうでなければ警察から交付されない。せんかたなく、彼女は女給になる。

京子と別れて下宿すまゐるをするやうになつて、君江の生活は、いつそう深刻に墮落してゆく。郷里へ金を送る必要もない彼女は、別段小遣ひといつてゐるわけでもなく、ただ衣類に身のまはりの品だけだが、それは店の収入で間にあふ。したがつて彼女は、とく別、男から金を貰はうとも考へなかつた。氣のおもむくままに身を委せてゆけばよかつたのである。

彼女の周圍には、いろいろな種類の男が、つきつきと接近して来た。かの女は、ちかづいてくる男が、年寄であらうと、醜い男であらうと、その時の氣分に應じて考慮しなかつた。ある時は藝術家と、ある時は會社員と、またある時は得體のしれぬ老人とも出かけた。

「お前のおかげでおれもいろ／＼な事を經驗するよ。六十になつて、ベンチで女を待ち合はすな

んで、實に我ながら意想外だ」

連れ立つた男からそんな風に述べられても、かの女は、特別感動もしなかつた。荒んだ生活であることを反省もしなかつたし、深入つてゆく自分を、危険とも考へなかつたのである。まったく自己放心の世界である。かうしたかの女の生活態度は、京子の家へよく出入りした昔馴染の男と會つたとき交す會話などに、もつともよくあらはれてゐる。

「諏訪町の二階では實にいろいろな事をしたね。兎に角お前と京子とは實にいい相棒だよ。僕は晝間眞面目な仕事をしてゐる最中でも、ふいと妙な事を考へだすと、すぐにお前のことを思ひ出す。それから京子の事を思ひ出して、夢でも見てゐるやうな心持になるんだ」

「それでも京子さんに較べれば、わたしのの方がまだ健全だわねえ」

「どつちとも云へない。お前の方が見かけが素人らしく見えるだけ罪が深いよ。カフェーへ行つてから別に變つたのも出来ないかね」

「銀座はあんまり評判になるから、さう思ふやうにはやれないわ。そこへ行くと藝者の方が大ぴらで、面倒くさくなくつていいわ。」

ここにうかがへるやうに、君江の生活態度には、反省もなければ抑制もない。あるものは、ただ、生きるといふことを享樂の手段とかんがへるやうな、痺れた腦細胞の機能だけである。

ここには、廣津和郎の「女給」といふ小説に描かれる千代子といふ女主人公のとき、生活の苦しきもなければ、人生的悩みもない。また、男のためならば墮落することも厭はない「愛すればこそ」の澄子のやうな、男にたいするひたむきな愛情すら君江はもち合はしてはゐなかつた。まことに、頹廢の氣分と傾ききつた心理だけが、彼女の生活の本體でもあつたのである。これこそ、世相の變轉に自己意識を呑みこまれ、環境に屈服してた人間のすがたである。

有島武郎の、「或る女」^{*}にあらはれる葉子は、それとは氣づかぬながら經濟的據りどころをもとめ、もともとめて男から男へとうつつてゆく。

近松秋江の、「黒髪」の女主人公お園は、死ぬほど惚れられた男の愛情をも、金錢で推し量つてゐる。ソラの諸作に描かれる暗黒面の女たちも、一樣に金錢の虜になつてゐる。金錢の價値と魅

力は、バルザックの描いたグランデ爺さんによつて、あまりに明確に描かれてはゐるけれど、女が経済生活の面でえらぶ金錢のみちは、それぞれの不幸と弱點とをもつてゐる點で意味ふかくか
んがへられる。しかし、君江のばあひはちがつてゐる。

* 「或る女」は、有島武郎の傑作の一つである。

「或る女」の才氣煥發な美貌の葉子は、封建的なふるい觀念を蹴つて、奔放に思ふままに戀愛に突進しゆく女性として描かれる。しかし、次第に加はる肉體の衰へのために、男への激しい嫉妬を感じ、みづから孤獨なさびしきを味ひ、過去の奔放さを後悔するが如く描かれてゐる。

彼女は、舊い觀念からの脱走を、たゞ男との愛情の自由のなかに求め、愛情を生理的な解放の一面に集中させてゐるが如くにみえる。そして、男の隸屬から脱れようとしながら、その基礎となる経済的な獨立は少しも考へず、愛する男から扶養されることによつて、結局、より墮落した形で縛られてゆくことを感じねばならなくなる。

舊い觀念を脱出するに、全生活の改造をはからなかつたこと、たんに、男との愛情の受けわたしにのみ、自由を楽しんだ果は、結局、求めた自由から逆に縛られるはめとなつた。彼女の如く、解放の全生活的努力にきづかず、いかにおほくの女性が、肉體の放恣な愛の浪費に倒れて行つたことであらう。

現代にこのやうなタイプが、教訓として蘇生する要もないのであらうか。

君江は、男との交渉に、物質的な目算もなければ、愛情の計量さへかんがへない。わづかに残されてゐるものは、肉慾の生活を樂しまうとする性本能の欲求だけである。ここに彼女の生活態度の特徴はみいだせるのであるが、しかしかうした女の類廢は、かならずしも君江に限られてはゐなかつた。かの女の周圍に多くの男があつてくると同様、隣りの女にも、爛れた生活を追ひもとめる男たちが寄生した。これはその後にもつづいた享樂面の常道ではあるけれど、とくに、するどい傾斜を示してゐた當時の一般風潮として、見のがしがたい心理傾向とも思はれる。

ここに、彼女たちの類廢の社會的根據は見出せるのであるが、しかし、かうした大勢にさからふこともできずして、女の悦びと誇りを、ただ男とのいきさつの間にだけその解決をもとめて行かねばならなかつたのは、彼女らの不幸の最大原因でもあつた。

だが数すくない女性の幾人かは、女を陥れる黒い魔の手に立ちむかつて生きようとした。とさされた世界から脱れるために、奮いしきたりから解き放たれるために、女の成長をはばんでゐる悪しき関係や習俗の掟に、か細い腕の女たちは、身を挺して闘はうと努力した。

藤森成吉の「何が彼女をさうさせたか」に描かれるすみ子は、この意味の数少ない女性の一人であることに疑ひはない。

この少女のたどつた成長の徑路は、不幸な女たちがその生涯で負はされたとおなじ、暗い流轉の連続である。

病夫を棄てて駈落ちする女の娘として育てられたかの女は、土くさい百姓女の娘とは思はれぬほど利潑な、うつくしい少女であつた。だが父をうしなつて、飲んだくれの叔父の手へひき取られると間もなく、子供芝居の役者に賣られ、食ひものにするとしか考へない叔父の弗箱として舞臺をふむのである。

子供芝居にでる役者の大方は、富裕な親をもつた子供がおもで、すみ子とは逆に、金をもちだして藝を習ふ側の人たちであつた。だがうつくしく生れついたかの女は、役むきはいつもよく、

客の人気も圖抜けてゐた。しかし、かの女の評判を親身になつてよろこんでくれる者はなく、かへつて周囲からはねたまれ、「田舎者」であることが蔑視と反感を買つた。そんな事情も知らずに、叔父は、たびたび出むいては、お部屋（座長）から金をせびつた。はては衝突した。

ふたたび、叔父の手へ戻つたすみ子は、いくばくかの金でまた人手にわたされ、物貰ひの手先になつて門附をする身となる。たまたま拘留されたとき、警官から國へ歸ることをすゝめられ、かの女もその氣になるが、親方の手が廻つてゐて、警察を出るとすぐつかまへられ、ふたたび門附をして歩かなければならなかつた。お探ね者だつた親方が、騙りの現行を押へられて警察へ引かれてから、よるべのないすみ子は、養育院へ收容された。かの女にとつて、ここは安全な住家であつた。ここへ收容される人々は、よるべのない老人や行倒れの人たちであつた。かの女とおなじ境遇で世をわたつてきた者たちばかりである。

收容されてまだ一週間と経たないうち、身元調べの係りをしてゐる原といふ男から、小間使に行かぬかとすゝめられる。

「普通なら、まだ入つて来て一週間も経たないやうな者を、いくら何だつてそとへ出すわけにや

あ行かないが、お前なら可愛らしいし、はしつこいし、それに氣だてもやさしいし、どんな處へ出したつて大丈夫だからつて、僕が大いに主張したんだ。こんな處とは較べものにならないほど暮しもいいし、第一、お前がこれから世の中へ出て一人前になる爲めに、どんなにいい手がかりになるかわからないと思ふんだが、どうだね、一つ行つてみる氣はないか」

こんな風にすゝめられて小間使に行く氣になる。

市の參事會員で、養育院とも關係のふかい秋山家へ雇はれることになつて、すみ子は、上流家庭の内情を知らされる。

自分とおなじ年恰好の娘が、小學校の行きかへりを車で通ふことや、禮儀をひと一倍おもんずる奥方の氣質や、收賄の嫌疑のかかる主人のことや、魚はかならず骨を抜いて食膳へつけるこの家の習慣など、かつて経験したことのないことばかりを見せつけられる。收容者のたれからも評判のよかつた原さんは、「こんな處とは較べものにならぬほどいいところだ」といつてすゝめてくれた。どこがいいのであらう。かの女は、考へざるを得なかつた。

いいと思ふ主人たちさへ、收賄の嫌疑にかかつたり、固苦しい見榮や體面のために、伸び伸び

成長することもできない娘さへゐるではないか。そして家族を除いたほかの者は、卑屈な盲従と、鼠のやうな猾さで生きてゐる。

すみ子は、これが世間でいふいいところかと思つた。そして、かうした環境に不感症になつた人間を、世間では辛抱者といふにちがひない。これが、十三の少女の後頭部に意識された世間であつた。かの女は、たまらない憤りを感じた。

食事のときであつた。なにか一口まくしたてねば納まらない奥方が、女中たちと一緒に膳へ向つてゐる勝手元へ顔を出した。そのときすみ子は、醬油さしをとつて香の物へかけようとしてゐた。

秀子 おすみ、お前、香の物へむらさきを掛けちやいけないよ。麩けの爲めに、うちぢや召使ひには一切そらいふ事はさせない定めになつてるんだからね。

(すみ子びつくりして醬油注しを戻す。)

秀子 おせい、お前からよく云つて置かなくちや駄目ぢやないか。一體そんな處へむらさき注

しを置いて、きつとお前達は始終コソコソ掛けてるんだらう。おすみ、お前知らなかつたから無理アないが、これからいろいろおせい達に聞いてお置き。

すみ子 (唇を噛んで) はい。

秀子 云ふ事さへよく聞きア、この後どんなにでも引き立ててやるからね。今までお前は不しあはせな目にばツかり遭つてきたそうだけれど、これからはほんとにしあはせになれるよ。どう？ 昨日来たばツかりでも、もう随分しあはせな気がするだらう。

(すみ子俯向いたまゝ黙つてゐる。)

秀子 食べ物だつて、養育院なんかとは較べ物になるまい。そんな海苔や御魚なんぞ、あそこにあたんぢや、食べやうつたつて食べられないだらう。

(すみ子相變らず無言)

秀子 養育院の御飯なんて、普通の人間ぢや一口だつて食べられつこないや。くさくてまづくて……一體お魚なんて、匂ひでも嗅ぐときがあるかい？

(すみ子慄へる。)

秀子 目刺しの一疋でも附く事があるの？ ないだらう——どうして返事をしないの？ はづかしいのかい？

すみ子 (突然皿をあげて) 奥さま。お魚ぐらい始終食べてゐます。こんな残り物なんぞ、みんな犬にやつてゐます。

(云ふなり魚の皿を取つて土間へ投げつける。皿、板の間の端へ當つて、けたたましい音を立ててこわ

れ飛ぶ。)

秀子 (見る見る蒼白く血の氣を失ひ、額へ青筋を立て) おすみ！ 何て眞似を主人へ向つてするんです！

すみ子 (秀子の顔を睨みあげて) 子供だと思つて、あんまり馬鹿にしないでくださいませ。

かうして、ふたたび養育院へ戻されるのであるが、その後、三年のあひだ院の附屬小學校で學んで、琵琶の師匠のところへ女中に出る。だがそこでもまた、男の暴力が彼女を待つてゐた。

妻に先立たれた師匠は、やうやく成熟したすみ子の美しさに惹かれ、それとなく思ひつづけて

わたが、たまたま、かの女の子芝居の時分の昔馴染がたづねてきたことから嫉妬し、酒の力をかりて籠落しようとするがはたせず、かへつて飛出されてしまふ。師匠の家を出たかの女は、昔馴染の新太郎と連立つてさまよひあるき、揚句のはてに心中するが助けられる。

二人は別々になり、すみ子は、天使園といふキリスト教の婦人收容所にいれられる。ここでもまた、神の名によつて、神聖な義務をはたさうとする偽善者たちの悪徳を見せつけられる。

すみ子が收容されて間もなく、おかくといふ三十年配の婦人が、いよいよ明日日出所するがなにか言傳つたはないかとたづねる。それは、すみ子の情死前後の事情を知つてゐるところから、相手の男に思ふことがあつたら言ひつたへてやらうといふ親切である。かの女は、もう新太郎のことは思ひ切つてゐるといふ。なつかしいことはなつかしいけれど、氣の弱い男ゆゑ、なまじ情にほだされたことを今になつて告げようものなら、かへつて死をはやめる結果にならぬとも限らない。やつぱり諦めます、と辭退する。だがおかくは、自分の経験から割だして、いろいろに愛人への思ひやりを説くのである。

いちどは斷つたすみ子も、かさねて勧められるとその氣になり、あわただしい思ひで手紙を書

く。だがあいにく、その手紙をおかくが懐ろへ入れやうとするところを、主任の矢澤うめ子に見つかる。矢澤はなに喰はぬ顔で支度はできたかといふ。おかくはほつとしながら手廻りの荷を持つて後へしたがふと、矢澤は立ちどまつて、何を入れたの、とたづねる。何か手紙みたいなものを入れたね。おかくは、せんかたなく取りだす。

うめ子 (封を破つて黙讀してから) これ、すみ子から頼まれたの？

おかく はい奥さま。

うめ子 そう云ふ事は、ここでは固く禁じてある事を知りませんか？

おかく (絶對絶命的に) よく知つてをります……でも、無理矢理すみちゃんから頼まれたもんですから、つい可哀想になつて――

うめ子 人が可哀想なら神さまの掟はどうなつても構まはないんですか？ 折角立派に今日で

やうつて云ふのに、そんな罪を犯しては困るぢやありませんか。

おかく 奥さま、どうぞ、今日だけは御見逃し下さい。わたし、奥さまのお力で今日こゝを出

られるのを、どんなに神さまに感謝してゐるか知れません。それを、こんな真似をして、……まづたく悪魔に魅入られたんでございます。でも、奥様の御言葉で心から悔ひ改めて、悪魔は追ひ出してやりました。どうぞお信じ下さい。

うめ子 (それに答へず) きつと、すみ子に推しつけられたんですね。

おかく はい。

かうしておかくは、別に咎められずに出所する。おかくの出所した翌日は、日曜説教の日である。うめ子は、手紙の一件をきびしくすみ子に訊問した。すみ子は悔ひあらためることを誓つて詫び入るが、天主園の主任はなかなか聞き容れず、神さまへのあがなひの爲めにも、もういちど大勢の前で證を立てるといふ。それだけは是非赦して下さいといつて憫れみ乞ふのだが、矢澤はなほもきき容れぬのである。參會者がどやどや入つてくる。お祈りがはじまる。讚美歌が終るとうめ子が説教臺に立つた。

うめ子 これから日曜の説教をいたします (間をおいて) その前に、一寸時間を頂きまして姉妹の一人に證をさせます。これは普通の順序では御座いませぬ。が、今日お話して見たい聖書の中の言葉が、その姉妹の事に大へん深い関係がございますので、さきに證をして貰つた方が餘計わかつて頂けるだらうと思つて、臨時に變へたのでございます。どうぞ御承知下さ
う。

(老人達の方へ向つて一寸頭をさげる)

うめ子 (大びらに呼ぶ) では、すみ子さん。

(全衆一齊にすみ子の上に視線を集める)

うめ子 ここへ來て證をして下さい。

(すみ子痙攣的に身體を慄はせて俯む。傍の者、低く「すみちゃん」と言ひながら膝でからだをつつく。)

うめ子 (重ねて) さつき約束したやうに、みんなの前で證して下さい。

(すみ子相變らず黙つて動かない)

うめ子 (咎めるやうに) すみ子さん。

すみ子 (眞蒼になつた顔をあげて) あたし、約束なんかしません。

うめ子 (意外さうに) だつて——

すみ子 (首を振つて) いゝえ。

(うめ子怒り氣味になり睨む。すみ子見つめ返す。會衆緊張して来る。)

うめ子 ようござんす。あなたがどうしても恥かしくつて言へなければ、わたしが代つてあげませう。(會衆の方へ向き直つて) 皆さん!

すみ子 (突然起きあがつて、半ばうめ子に向つて、半ばは會衆へ向つて、咽ぶやうに叫ぶ) 愛だなんて——神さまが、愛だなんてみんなうそです!

(みんな驚愕してかの女を見る)

すみ子 あたしがあんなにお詫びしたのに、許さないで、どこまでも苦しめて恥をかかせやうなんて、そんな神さまなら決して愛ぢやありません。神さまが愛なら、あたしもう夙に許して貰つてる筈です!

(皆唸る。)

うめ子 (肝癪を起して) お黙りなさい。すみ子さん。

すみ子 いゝえ申します。神さまは愛でも何でもありません。そんな神さまなんか、ない方がアツと増しです。あたし、今までほんとに神さまを信じやうと思つてゐました。でも、もう信じません。天使園なんてうそです。何もかも大うそです!

かくて彼女は、信仰に生きる人たちの生活にも、自分を安住させてくれる世界の無いことを悟るのである。

子にたいして負ふべき責任を自覺してくれなかつた母、子供である自分を忘れたやうに男と家を出ていつた母、かうした母をもつた子供として育つたすみ子は、おほくの子供がうけたとおなじ愛情すらかけられずに、呑んでくれの叔父から人の手に、そして、やがてひとり力で荒い生活の波を漕ぎ抜けやうとして「社會」に出るのだが、そこに待ちかまへてゐた人間の世界は、あまりにも虚偽と欺瞞にみだされた世界であつた。人間としてのよろこびや誇りは、すくなくとも

女としてたどつた彼女の十六年の生涯にはみいだせなかつた。彼女は、しみじみとそれを知つた。説教のあつた夜である。夜陰に乗じて放火する。かの女は、うれしさうに燃えさかる火焰を眺めた。天使園は焼けた。彼女も捕へられた。

西鶴の描いた「戀草からげし八百屋物語」のお七は、戀しい男に逢はうとして放火する。田山花袋の「重右衛門の最後」に出てくる得體の知れぬ少女も、はかない最後を遂げる重右衛門の怨みを晴らさうとして、村全體に火を放つ。すみ子は、このいづれでもなかつた。

5.

まことに、彼女をしてそこに導いた徑路には、この世のあらゆる女たちがさいなまされたと同様の、誤られた道徳や因襲や環境の拍車があつたのである。萬葉以後、明治の初期へかけておほくの小説に描かれた女主人公たちの生活は、一様に、「七去の罪」にさからはぬことと、三從の教へに殉ずることであつた。貞節と夫唱婦從の道徳である。これらは、徳川期に完成された女の美

徳であると同時に、その後の世代に生きる女の道徳をも規定してゐた。このことは、大正をへだてて今日にまでつづく傳統である。

前代の小説に描かれた多くの女性たちと比較するとき、すみ子は、たしかに前進してゐる。女である自分の生活を自覺してゐる點で、人間として、ひとりの人格として女の誇りをもたうと努力してゐる點で、人間を片輪にしてゐる虚偽の生活と偽善行爲とを見ぬいてゐる點で、またそれと闘はうとして、ひよわな魂を勇氣づけながら環境に立ちむかつてゐる點で、前のどの小説にも見られない高さに、おのれの生活を引きあげてゐる。

窪川稻子の「キヤラメル工場から」のひろ子も、すみ子とおなじ年頃の少女である。

仕事のない父親と、兄弟の多い家庭からキヤラメル工場へ通ふひろ子は、一日十八錢の工場労働者である。始業時間のはやいその工場では、ひろ子と同年配の少女たちが、毎朝のごとく、始業に遅れまいとして、三膳はいる胃の腑へ一膳だけいれては駆けつける。遅刻でもすると、一日休まねばならなかつたからである。かの女たちは、一日でも休むことが恐ろしかつた。一日分だけ、肉をそがれるやうに家計が削られた。これは勤勞者の生活に共通すると同時に、かの女らの

小さな脳髓にもしみこんでゐる常識であつた。

水であるかぎり凍つてしまふやうな冬の日であつても、罐洗ひにお湯を使ふこともできず、油を賣ることなど、もちろん、できないこれら少女たちの生活は、「新婦人協會」(平塚明子らの婦人運動)の人達が想像さへしなかつた、女の暗い生活面である。日給制が廢止されて、一罐の賃銀を數へるやうになつた頃から、ひろ子たちは、倍の勞働と努力とを傾けねばならなかつた。震災を過ぎる前後の一般經濟の餘波が、このかぼそいかの女らの兩腕にひし／＼とのしかかつてきたのである。

少女たちは、金にならなくなると、ある者はお酌になり、ある者は女中に鞍替して働きに出た。ひろ子も、郷里の先生から、「誰かから何とか學費を出して貰ふやう工面して、大したこともないのだから、小學校だけは卒業する方がよからう」と書いて來た時分には、キヤラメル工場をやめて、チャンそば屋に住込んでゐた。

彼女は、かうした境遇におかれてゐる自分を、けつして幸福とは思つてゐなかつたが、いつて、すみ子の如く積極的に自分から突き抜けやうとはしなかつた。

おなじ年頃の少女であり、おなじ働く境遇の生活におかれてゐながらも、この二人の少女の成長の過程には、いちぢるしく懸隔が示されてゐる。すみ子が、衝突する生活の矛盾や不調和に憤りをもつて立ちむかつてゐるのに反し、ひろ子は、郷里の先生から、小學校だけは卒業するやうにといつて手紙がきたときも、讀みかけて破り、破いたのを擱んで便所に入り、暗いチャンそば屋の便所の中で、用もたさずに泣きながら讀んでゐる少女である。この少女のすがたこそ、あるひは當時の少女一般のすがたであつたかも知れない。

學校へもろくろくやつて貰へず、家計の一部を分擔されて油断なく働かねばならないこれらの少女たちは、現實として負はされてゐるもろもろの負擔や重荷や、女であることの名によつて傳統的に押しつけられてきた道徳上の勘定書にたいして、やがては目覺め、はつきりした判斷と認識によつて自己を正統に生かす日もあつたにちがひない。

すみ子のやうな少女が、それを物語つてゐると同時に、女の自覺の方向に、あたらしい一つの基礎を示してゐることは興味がある。彼女は、その克服の生活を経て、やがて、片岡鐵兵の「生ける人形」の弘子のやうな女性ともなり、すつと近くへきて、「母系家族」の葵ともなり、あるひ

は、「東京の女性」の節子のやうな女性ともなつて成長するにちがひない。

Ⅲ 解放された犠牲（大正期の省察）

1.

明治から昭和に橋をかけた大正の時代は、わづかに十数年の期間にすぎぬが、わが國民が日露戦捷によつて世界的自覺をうながされ、さらに歐洲大戰によつて、いよいよその自覺に緊張をくはへねばならなかつた時である。しかし、事實は、この時期を普通デモクラシーの時代として、改造、解放の合言葉がさわがしくいひかはされた時代として知られてゐる。したがつて、いつぱんの思想も、女性のモラルも、既成のかこみからときはなたれて、劃期的に放漫なゆるみを帯びた時代である。それは、谷崎潤一郎、その他の唯美主義、耽美派といはれる作家たちによつて特徴的に描かれてゐる。

谷崎潤一郎の描いた女性のおほくは、因襲からはみだすばかりでなく、戀愛を情痴の一面にひ

きおろして人工的な技巧をこらすか、功利的に享樂するすがたとして描かれてゐる。そこには、因襲があらはれてゐるだけでなく、たゞしい愛情の自然ささへあざけられてゐる。愛情が、本能的な面で技巧をこらされ、その技巧的な變態のなかに異常な美がもとめられてゐる。戀愛がもはや美のたゞしい形成につくさず、異常な怪奇の世界に頽廢しゆくすがたをこゝにみる。このやうに怪奇な、背德的な、そして殘虐の情調のなかに美をもとめたのは、オスカー・ワイルドの「サロメ」や、「ドリアングレーの畫像」などである。あるひは、ボードレールの詩である。これらは、すべて、世紀末の個人主義における不安にねざしてゐた。その不安の心理と、肉體的慾望とのしびれゆがんだ合奏のひびきであつた。世紀の不安におそれおののきながら、自己の生存のほかに目標をうしなつた焦躁のあらはれでもあつた。ワイルドのサロメは愛をうけいれられなかつた怨みから、豫言者ヨカナアンの血汐したたる生首に接吻しながら、復讐の快感にひたる。いはば、このやうにして、疲勞し、焦躁する個人主義のあはれた人間の破滅がゑがかれたのである。

また、いつばう、大正期の文學においては、女性もはや、ふるい掟に忍従の美をたゞへるものとしてではなく、因襲の無價値を冷笑し、たからかに、わらひさるすがたとしてゑがきだされてゐる。それは、菊池寛、芥川龍之介の作品のなかに、あたらしい理知のめざめとして、ゑがかれてゐる。

たとへば、「眞珠夫人」の瑠璃子は、因襲の反抗に燃え、それを復讐し、冷笑しようとしてみづからをほろぼしてゆく。理知のせまさ、エゴイズティックな自己優越心の空虚な敗北であつた。芥川の「袈裟と盛遠」における袈裟と盛遠は、たがひのエゴイズムを満足させることのみにとらはれて、愛情の共感にひたりえないさまを、抉りだされてゐる。個人主義にとらはれた愛情の冷酷さと無情なすがたの指摘である。

その他の作品においても、芥川は習俗から解放された女性のエゴイズムが、形式主義を否定して自主的に伸びようとしながら愛情の本質にたどりつきえないすがたをとらへてゐる。いはば、大正期においてせつかくたゞかひとつた女性の自主性が、いかなる悲劇に遭遇しなければならなかつたかを暗示してゐる。

概括的にいへば、明治期の女性は、個人意識のめざめが解放される機縁なきゆゑに苦惱したとすれば、大正期の女性は、解放されたための悲哀を、解放されながら倒れゆく悲劇を演じたといへるだらうか。

また、大正期の文學の特色ともいふべき愛情のもつれは、明治期にはあらはれなかつた男の悲哀のすがたとして描かれてゐる。たとへば、近松秋江の「別れた妻に送る手紙」「疑惑」、その他である。それは、むしろ、男の封建的な、消極的な感情が、新しくめざめた女性にとりのこされ、侮蔑されるかたちであらはれてゐる。それをよりきはだつたすがたで、とらへたのが谷崎潤一郎の「痴人の愛」であらう。こゝでは、女性の世紀末的なデカタンのすがたと、情痴におぼれゆく男の溺愛とが描かれてゐるが、男は、つねに、女性のきまぐれな心のはかりがたさと、技巧的な愛情の功利性になやまされてゐる。いはば、解放された女性の放恣なふるまひが、すでに男性の因襲的、保守的なエゴイズムをあざわらふかにみえる。

もちろん、谷崎、近松の描いた女性は、あたらしいモラルのたゞしい自覺の面ではなく、その自覺のほしいまゝなデカダンの峠をくだるすがたにおいて描かれてゐるが、ともかく、これまで男の自己的な心理に媚びることによつておのれを失つた女性が、反對に、保守的な男性をなやましつゞけるのである。そして、このやうな、解放された女性の放恣な心理と姿態が、男の悲哀をたきつけるありさまは、その後すくなからず、小説のテーマとなりえたのだ。さうして、このやうな頹廢のなかにも、歴史の成長と、ふるい形式の崩壊とがたがひにいれみだれつゝ、さげがたいものとして示されたのである。いはば、自己を時代の前面におしたてて舊觀念をけりつけるのではなく、消極的に自己をふせぐかたちで抵抗したすがたともいへやう。かやうにして、女性の解放が、舊いモラルのくづれゆくすがたとしてほろびゆく反面に、たゞしいモラルの現實的な芽生えも、力づよくそだちつつあつたのである。

大正時代は、劃期的な職業婦人の進出の時代であつたことは前述した。いつぱん、産業界の躍進とともにシヨップガール、事務員の進出、その他喫茶店、カフェーの増加とあひまつて、それらの職場の女性が家庭の経済的な補ひのために、あるひは、獨立への自覺にそふて、都市から、田園から、工場へ、會社へ、デパートや喫茶店に、なだれこんだ。

この時代、はげしい生活の波と、思想の變轉に翻弄されながら、過去の傳統を失ふとともに、おのれの個性の、自發性をもあはせて消失し、船頭のない船のやうに生活のながれにしたがつて、人間的な誇りや、價値のすべてを犠牲にした女性もあつた。しかも動物的に、なんらかの悦樂にふけらうとするあはれむべきすがたは、「つゆのあとさき」の君江に具體化されてゐる。そして、こゝでけつきよく、大正時代の解放の勝利がむなししい自己の喪失のすがたとなりをはつたのであるが、そのやうな頽廢のなかにも、女性の生活力の旺盛さ、それにとりまふ功利心の芽生えは、證明されてゐる。いひかへれば、君江のやうなデカダンは、生活とのたゝかひを、女性のもつとも安易な面からきりひらいたひとつの犠牲であつた。

そのやうな犠牲と敗北は、その職域の消費的な環境からもつよく影響されたであらう。しかし、

堅實な、たゞしい自主性と、理性的なモラルの發芽は、どのやうな環境のなかにもみられたはずであるし、ことに、おほくの産業的な面に泳ぎでたわかい女性たちは、たとへば、「律子と瑞枝」の律子のごとく、人生にたいし、愛情にたいしてふるいモラルに盲目ではありえなかつたはずである。律子も、生活の困難にたわいなく倒れず、たしかな理智の批判と自信をつらぬかうとした。たとひ、彼女は熟さない環境のために、それをつらぬきえなかつたとしても、彼女に發芽した生活の理智は、「あらくれ」のお島のやうな生活力の旺盛な意思とよりあはされて歴史の發展のなかに生きのびたにちがひない。それは、他の女性のなかに統一的にひきつがれ、成熟していつたに相異なる。その結果は、昭和の文學にあらはれる女性の、獨立的なあゆみの逞しさともなり、あるひは、愛情の知的な成長へとひきつがれ、うけわたされてきたのである。

大正期は、なるほど個性解放の犠牲と、悲劇の姿態をも表現しなければならなかつたが、その犠牲は、犠牲のまゝにをはりをつげたのではない。しかも、その犠牲と、頽廢と、悲劇のなかに、彼女らをくるしめた戒めやかこひが、彼女らの涙の抗議によつてしだいに形をうしなひつゝ、無力化されつゝあつたのである。そしてそれとは反對の方向から、積極的な生活への突進が、彼女

らのおぼろだつた自覺の眼をときすまし、おぢけづいてゐた新しいモラルの試みにも、自信をふるはせたのである。おもひあがつた教養の悲劇、さむざむしい功利的知性で、愛情のゆたかさ、うるほひを失ふはじめさを味つたものもすくなくなかつたであらう。しかし、過渡期における發展性とは、かならずそのやうな弱點をつきまとふのである。過渡期における新しさや成長の芽が、つねに、傳統と習俗の凝視からなにか奇抜な化物のやうに、その非人間性を罵られるのも、そのやうな事情ゆゑである。

われわれは、たえず課される歴史の試練をつねに、發展の方向にきりひらかねばならぬ。歴史をかへりみるとは、そのやうな試練を發展にむかつて生きぬく、ひとつの方法の探究である。大正時代の女性の悲劇と、あたらしい成長の萌芽とは、いかに變轉しつゝあつたか、それは、その後の、あるひは、今日の切實な課題でさへある。われわれが、明治、大正といふ時代における女性の演じたあらゆる姿態を、けつして過去のものとして、もはやすべてを克服しをはつたものとして、うけとることができない所以である。今日の女性がどのやうな發展の軌道におのれを託してゐるか。どのやうな軌道を辿つてゐやうとも、それは明治、大正のいづれかの軌道を、その發

展性とともに、退歩性をもひきつき、うけわたされてゐることはうたがふ餘地もない。そしてつとも注目すべきは、女性いつぱんの明治時代の苦惱と發奮よりも、むしろ、大正の、解放されたための類廢のなかに、今日の發展の前驅的な兆候と、教訓的な暗示のかすかすが秘められてゐるのではあるまいか。

附記 三代女性風俗の反映

明治時代の小説に、藝妓や娼妓が男の愛情の對象として美化され、とくに藝妓が、洗練された女性風俗の支配的な位置を占めるものやうにゑがかれたとすれば、大正時代は、女給のあらはれる小説が激増したときである。これは、昭和初期年のダンサーや、喫茶ガール、その後の職業婦人のゑがかれる小説がめだつと同様である。しかし、その描かれかたは、それぞれに特徴があり、明治文學にあらはれる藝妓は、愛情の洗練された表現の傳統をさへるものとして、あらはれるに反し、大正時代の女給はおほく、風俗の弛緩や混迷の一點景としてあらはれた。

昭和時代のダンサーや喫茶ガールが、女給とおなじく、風俗の混亂するすがたのなかに描かれ、ふるい習俗からはぬけだしたが、まだなら、新しいものを身につけず、たゞ、無軌道にさまよふ轉換期の空虚なすがたとして表現された。しかし、職業婦人や、生産に加はる女性のましてきた、昭和の生産的な女性群は、

おほむね、あたらしい理性の芽生えとして、あたらしいモラルと、努力的な向上へのあこがれのなかで實生活とたゞかふすがたでゑがかれたのである。

かやうに、文學の各時代にあらはれた職業にたづさはる女性の風俗的な表現の性格からながめればあひも、婦人の生産、職業への参加が、いかに女性の向上に缺くべからざるものであつたか、そのふるい意識からのめざめ、健康な人生觀の芽ばえといひ、すべて、生産への女性の参加がいろ濃くもたらしたものである。

明治時代、花柳の女性が、モラルの傳統的な繼承者の意味から注目されながら、文學作品に、その美しさをもたへたものは、泉鏡花、永井荷風くらゐのものであらう。

そして、大正期の女給も、實際には、女給氣質といふあたらしいモラルの芽生えがあつたのであり、その發生には、おほくの社會、文化上の問題がふくまれてゐた。

たとへば、彼女らは農民の不況や結婚難から出稼ぎの場を都市の消費面にもとめたのもあれば、いちめんでは、淺薄な自由へのあこがれから、都市文化へのみさかひのない幻想につられておびきだされたものも多くの女給にふくまれてゐたのである。だが、文學作品には、たいてい、そのやうな發生の過程や、新しい氣質として鮮明に描かれたとはいへぬであらう。と、いふより、その消極的、頽廢の場面、家庭愛の敵としてあらはれた。彼女らの新しい生活の認識や、愛情の變化には、それほど眼をとがらした作家がゐないやう

である。

上述のやうな意味で、文學は現實のたゞしい反映でなく、そのかたよつた半面の表象にすぎぬばあひがある。そして、ダンサーや喫茶ガールも、獨立な生活の擔ひ手としてゑがかれず、たいていは、男の愛情のあたらしい對象として風俗史的にのみゑがかれすぎた。いはば、女給やダンサー等の、消費面の職場の女性が、文學のなかで、ひとりの全き社會人間としての存在がとらへられなかつたのだ。

しかし、生産的な面にはあらはれる女性の多くは、ともかく、一個の社會的な人間として、たんに愛情の對象や風俗的な一現象としてではなく、生活のたゞしい建設者として、國家生産力擴充の積極的な擔ひ手としてあらはれた。さうして、かういふ女性の健康なすがたの向上しゆくありさまが、文學的に描かれたといふことは、いつぱんの女性が、男の愛の對象以上の範圍に解放され、その人間的獨立の可能がよりおほく加はり、社會的な過去の偏見がぬぐひされつゝあることを反證してゐる。

第三章 働く慧知と新世代の創造（昭和期）

この章の主要な作品と作者

横光利一「寢園」

山本有三「眞實一路」

徳田秋聲「假裝人物」

中山義秀「美しき園」

野澤ふみ子「煉瓦女工」

石川達三「母系家族」

石坂洋次郎「若い人」

丹羽文雄「東京の女性」

I 愛情の流浪から眞實へ

1.

大正から昭和へうつる過渡期の風潮として、アメリカニズムの氾濫をあげるのは常識である。大正の中葉以後、ことに大震災から昭和の事變以前にかけて、わが國の文化を惡魔的におそふたアメリカニズムの傾向は、心あるものの眉をひそめさせるに充分であつた。國粹主義者が、これを排撃したばかりでなく、西歐的な教養を積んだひとびとさへもこれを侮蔑した。

しかし、交通機關、建築、服裝、その他いつぱんの生活様式にしても、アメリカ的傾向は、當時の頽廢に癡痺しはじめてゐたひとびとを、このうへもなく魅惑したのである。

いつたい、そのやうな魅惑はいかにして生れたであらうか。

第一次歐洲大戰によつて西歐諸國が疲弊した隙をねらつて、たくみに大戰を傍觀したアメリカ

は、獨占的に繁榮しえた。この好運な繁榮によつて、アメリカはしだいに富の蓄積においても、文化の進歩においても、世界の中心的位置を占めるやうになり、西歐文化は、アメリカに轉移しつゝあるかにいはれた。そのやうな世界情勢のもとに、かつては、新開國として、その淺薄さを侮蔑してゐたわが國とのあひだにも交通、貿易の關係がふかめられ、それを契機としてアメリカニズムの歴倒的な侵入があつたのもゆるなき現象ではなかつた。しかも、アメリカの物質文明は、一方に、野犬のやうに飽食した生活の野卑な享樂のために消費され、他方で、大量生産による營利の目標から商品としてうみだされたものであつた。それは、しだいに近代の頹廢を、より悪化するによつて營利化をたくむやうにさへなつた。近代的な速度の快感と、能率的な印象をあへながら、近代人間の、精神の痲痺をより一そう昂進せしめるやうな類のものであつた。

大震災の壊滅のあとをうけて、建築様式や、服飾や、その他生活の全般にわたつて、新しい改造が必要であつたとき、いちやくその空虚におそひきたつたのは、アメリカニズムであつた。「モダン」の形容が、新奇の代名詞となつて巷にあふれ、銀座街頭には、いつかモガ・モボ^{*}の潤歩がはびこり、ジャズの騒音とともにダンス・ホールもひらかれた。ネオン・サインのまたたきと

ともに、大正からひきついでカフェーも社交的な雰圍氣から、情痴の世界へと轉落したかにみえた。

* 昭和初年のアメリカニズムに感染して、新時代の幻覺をかいまみたやうな、淺薄なモダンガールたちもあたらしいモラルの鮮明なたくましい行爲者として、文學的に形象されはしなかつた。と、いふのも、彼女たちが、たんに風俗的に新しいモラルの亞流を表現したが、その全生活をきそから立てなほすこともなく、ふるいモラルへの反撥を、うはづつた會話のなかや、あるひは、映畫的なボオズの表現で示しただけで終つたからだ。つまり彼女たちは、新しい觀念の衝動に身振りをつけただけか、單純に感染して無自覺な流行病患者になつたにすぎなかつた。

また、大正以後繁榮をきはめた映畫は、しだいにアメリカものによつて、わが國の娛樂習慣や生活の思惟にさまざまな混亂をあたへた。このやうな魂なく、秩序のないアメリカニズムの移植と感化は、いきほひ、われわれの精神の傳統や、生活風俗にうれふべき渦紋をゑがいた。「新興藝術派^{*}」といふ名稱のもとにあつまつた、作家たちに描かれた風俗や心理は、この間の消息を特徴的につたへてゐる。

また、武田麟太郎の「銀座八丁」その他の作品のやうに、當時の時代風俗を、銀座と酒場のすがたをかりてとらへようとした記録畫もすくなくない。丹羽文雄も、當時の酒場の女のモラルを、テーマとしたかすかすの小説をゑがいてゐる。

* 「新興藝術派」といふ文學流派は、主としてアメリカナイズされた都市風俗や、都會人の近代的なヒリズムの感情や焦躁を描いた。そして、この派および、その周圍から、モダニズム運動なる言葉が生まれ、近代都市生活のアメリカニズムをあたらしい現象として、小市民の頹廢した風景を描いた。昭和初年のアメリカニズム横行時代に描かれた小説の、新しい装ひの女性たちは、モラルの喪失が新時代的に扮飾されて、ふるい貞操觀に反撥するがごとく誇張された。たいていは、その餘波をうけて、官能や、生理的な愛情の解放ならぬ放埒のなかに溺れるか、あるひは、苛立たしい家庭主義への反撥だけで、新時代の幻想にひたらうとした。

反抗や、抵抗を新しい充實の方向にみちびきえなかつたための、安易な轉落の風俗が主として描かれた。このやうな頹廢の一面しか眺めえなかつたのは、當時の文學の眼の曇りでもあつただらう。現實では、すでにこの時代、女性の生産部面への多量な進出があり、今日の逞しい女性の堅實な精神の芽生えもあつたわけである。しかし、消費面にのみ眼を奪はれた當時の文學はそれには氣づかず、轉

落の一面にだけに、とらへられたのである。

總じて、昭和初年の小説にあらはれた女性には、プロ文學を別として、モラルの解體に痴呆を演ずるか、職場生活のなかに培はれた知慧で、独自の出發をはじめるかであつた。あるひは、はげしい時代の變轉のひびきに自己意識を麻痺されながら、時代のながれゆくまゝに漂流しゆくものも描かれた。そして、この時代、男女をとはず、自意識過剰の惱みや、心理分裂の破綻が、とくに、めだつてあたらしい作家たちの凝視をうばつた。横光利一の、「寢園」にゑがかれる幾人かの女性の風俗にも、當時の有閑的なインテリ階層の心理の分裂や生活意識の動搖がかたられてゐる。

「寢園」の女主人公奈奈江は、みづから愛なき結婚にとびこみ、その結婚の矛盾に敗れる女性として描かれてゐる。

彼女には、梶といふ愛人があつた。梶は、木綿問屋の主人であるばかりでなく、インテリで、しぶい好みの通人である。彼にもまた奈奈江は、ゆきづりの他人ではなかつた。だが奈奈江は、梶にたいするつまらない意地から叔父のすすめる仁羽と結婚し、彼の失望をみかへしてやらうと

かんがへる。すでにこのとき、かれらの生活を遊戯的にかんがへる、こゝろの芽生えがある。とくに奈奈江は、人生を輕蔑して、かるい賭ごとのやうに結婚をかんがへ、實生活をでき心の意地に左右させてしまふのだ。

しかし、日が経つにつれ、愛情の交流のない仁羽との結婚生活がいまはしくなり、まへにもまして梶を慕ふやうになる。梶も、奈奈江とのゆきがかりからさうなつたのだとはいへ、奈奈江を忘れることができない。たまたま、猪狩を催した折、仁羽の寸前へあらはれた猪を撃たうとして、奈奈江はあやまつて夫を撃つ。さいはひ命はとりとめるが、奈奈江は、夫の助かつたことを心から喜ばうとはしない。やがて健康になり、自分にとつてふたたび暗い生活がはじまるにちがひないと考へると、彼女は、順調な経過をたどる良人の肉體がうらめしかつた。一時は、見舞にきた梶のあとを追はうともかんがへるが、病床にゐる仁羽のことを思つて踏みとどまる。

そんな折、株の暴落から梶の會社は破産する。奈奈江は梶の苦境を救はふとして金を用立てるが、まもなく手紙を添へておくり返してくる。これは最初彼女が、梶の氣をひくために仁羽との結婚話をうちあげたとき示されたとおなじ、彼の片意地な冷淡さのあらはれなのである。だが奈

奈江は、自分の好意をうけなかつたことを憤るかはりに、かへつて、彼のもとに走らうと決意する。

夫の全快祝賀の射撃大會を明日にひかへたその前夜、送りかへされた金と手紙とをふところにして彼女は家出する。

これは奈奈江を中心にしてみた「寢園」の荒筋だが、ここどうかへるやうに、彼女の結婚生活が最初から幸福でなかつたことは事實である。

妻の愛情より、獵犬と銃を大切にする夫、戀人にかたむいてゆく妻の動作より、射撃場でおとすクレーの數の方が氣になる、かうした夫と生活をともにすることが、奈奈江にとつて幸福であらうはずはなかつた。梶にたいする依姑地な氣分から仁羽を選んだとはいへ、あきらかに誤まつた結婚だつたのである。彼女は、愛情のない結婚生活の惨めさを感じる。これは、夫と愛兒とを棄てて戀人のもとへ走つてゆく「アンナ・カレニナ」の心情にも通ずる女の悲劇の一つであらう。しかし、彼女のばあひは、はじめから梶と結婚することがゆるされてゐなかつたわけではない。自分の氣持ひとつで、誰とでも結婚のできる自由な立場にゐたのである。してみると、彼女が梶を

選ばずに、仁羽と結婚したことがそもそもの誤りだったのである。しかも、仁羽との結婚を叔父からすゝめられたと打明けたのにたいして、「それも良からうぢやないか」と、素氣なくでられた、といふただそれだけの理由で梶との結婚を思ひとどまつたのである。

この矯慢な彼女の性格の破綻は、病院にかつぎこまれた夫のかたはらで泣き入つてゐるときにさへあらはれてゐる。

「あんなによい良人であつた仁羽が、毎日毎日自分に嫌はれて、そしてたうとう最後に自分に撃たれて死んでいくのだと思ふと、奈奈江は慄然とした氣持であつた。もし仁羽がもつと自分に愛されて死んでいくものだつたら、まだしも自分の罪は軽いであらう。けれども、それがほとんど、一度も自分に愛されずに、あんなに無慘に死んでいくのだと思ふと、奈奈江は耐へられなくなつて泣出す」のであるが、涙が乾かないうちに、「奈奈江の心底から、また梶の姿がうるさく悪魔のやうに浮き上つてくる」のである。

自分からあやまつた結婚をしながら、夫を愛せない自分を、あくまで正常なものと考へてゐる彼女のこの結婚生活にたいする矯慢な態度には、當時の有閑的な生活層の女性にしばしば見うけ

られる、不遜な人間態度の一面がもつともよくあらはれてゐる。これは、この小説に點景人物としてあらはれる藍子といふ女性の、働くといふことを、なにか遊戯のやうにかんがへてゐる考へかたにも共通する生活心理でもあるだらう。この點では、たしかにこの小説に描かれる女性の立像には、富裕な生活に生きる女の倫理觀や生活意識などが、あざやかな輪廓で語られてゐる。それのみではない。彼女は矯慢な性格のほかに、近代的な心理の分裂にとらはれてゐる。生活の眞理を投げやりな好奇心の眼でもてあそぶ射倖心がある。

たとへば、はじめの結婚談を男にかるくあしらはれたといふ理由で、反抗の氣勢をとり、好まぬ結婚に身を投じたのである。その浮薄な反抗と冒險を好むこゝろのなかに、彼女の世紀末的な虚無の深淵がのぞかれる。結婚はつひに、偶然の心理的賭博のごとく彼女にとりあつかはれるのではないか。この傾向は、對象の男性の側にもあつた。舊い觀念の無慘な崩壊にであひ、しかも新しい精神の目標が喪はれたとき、このやうな浮薄な好奇心と、きまぐれな感情の波によつて人生を愚弄するやうな傾向に溺れやすい。いはば、ニヒリズムの享樂である。瑣末な感情的偶然に人生の鍵をにぎらせるのである。

しかし、ここで重要なのは、いかに描かれてゐるかではない。描かれた女性が、いかに行動してゐるかが問題なのである。したがつて奈奈江のばあひも、ひとりの女が男を對象としていかに生きたかが問題になるわけであるが、この點では彼女は、はじめの過失にめざめ、しだいに、自分自身の自然の要求に生きようともかく女性に成長したといへるであらうか。誤まつた結婚に出發したとはいへ、彼女は、あたへられた生活の場に安住もしなければ、また人生をあきらめてもゐない。自分のもとめる生活を、犠牲をはらつても探さうと努力してゐる。梶とのあたらしい生活が、かならずしも彼女を幸福にしてくれるかどうか、それはわからない。わからないけれども、彼女には、それ以外に生きる途はなかつたのだ。誇りと魂とをかたむけて暮せる生きかたが、梶との生活をはなれて考へられなかつたのである。それはもはや道德のあたらしいかき變へをさへ強ひるいきほひであつた。優柔不斷の、心理的な動機をたどりながらも、ともかく、おのれ自身の眞實への途にかどでせざるをえなかつたところに、彼女の歴史的意義がやどるのである。

2.

分裂する二重の精神にゆりうごかされ、はじめは人生を好奇心にまかせたけれども、その過失をたゞさうとしたはて、おのれに忠實な生活と人生とをもとめて奈奈江の新生がはじまるのであるが、おなじ受難の路をよち登つてきた女性に、「眞實一路」の睦子がある。

彼女も、あやまつた結婚によつて、その生涯を流轉の運命にさらさねばならなかつた女性である。

女學校をでたばかりの頃、彼女には親にも知らせない一人の愛人があつた。ところがその愛人は、丹毒に侵されて、突然病死してしまふ。愛人の入院中睦子は、見舞にいつたり親身になつて看病したりするので、二人のあひだは兩方の家庭にも知れるのだが、愛人の死後、睦子は胎内にその胤を宿してゐた。そこで睦子の兩親は、先方の親たちにその子供を認知してくれるやうに頼むのであるが、息子から一言も聞いてゐない話を、伴の子供として認めることはできないといつ

て突つばねてくる。いたしかたなく睦子の親たちは、自分の家で以前から學資を出したり、就職の面倒をみてやつたりして世話をしてきた守川義平といふ同郷の青年に、一さいの事情を語つて睦子を引うけてはくれまいかと頼みこむ。義平は、睦子の家に入入りするやうになつてからといふもの、心ひそかに彼女を戀してゐた。しかし、それはたうてい縁のないものと諦めてゐたところ、おもひがけない依頼なので、彼は即座にひきうける。ひとつは、いままでの御恩返しといふ氣持も働いて。

しかし睦子は、はじめからこの縁談を好んではゐなかつた。先方が胎内の子を認めてくれないなら、いつそ水に飛込んで、胎兒といつしよに愛人のあとを追はうとも考へた。が、ひき止められてそれでもできず、自分だけで子を育ててゆく道は立たず、結局、両親にくどくどと説得されるままに義平のところへ嫁ぐのである。生ける人形の生活がはじまるのであるが、然し義平は、「寢園」の奈奈江の夫のやうな、妻と家庭を特別念頭にもしない男とはちがつて、見も知らない人の子を引受けて、いやな顔一つせず、産婦の面倒やら赤ん坊のおむつの世話まで、熱心に氣をくばつて心を盡すのである。

やがて丹毒で死んだ愛人の子も成長し、つぎの子が睦子の胎内をはなれたころ、突然かの女は家出する。

十年の歲月はながれた。

うへの子（志津子）は、縁談のかかる年ごろになり、つぎの男の子も十になる。二人の子の母であり、自分の最愛の妻である睦子に家を去られてから義平は、男の手一つでいつしんに二人を育てたが、志津子とちがつて男の子は、学校の成績が悪いだけでなく、氣質もひねくれてゐた。

女親の愛情に接しないことから生ずる心の空隙が、情ぶかい姉や父の手厚いいたはりにもかかはらず、義夫を絶えず苦しめるのである。なごやかな食膳へ向つてゐるときでも、「そのなごやかな温もりのなかに、義夫はともすると得體の知れぬ隙間を感じた。ひよいと、繪のないフィルムのやうなものが、一齣、二齣、まぎれ込んでくるのである」と、作者は義夫少年の心理を寫してゐるが、この心の空隙が、いつとなく義夫をくねらせてゆき、あるときは一寸した小言をきいても、風をつよい夜だといふのに家を飛出し、暗い野良なかをさまよひ歩いたり、あるときは、ぼんやりと居間に坐つて外を眺めてゐたりするのである。

吾と来て遊べや親のない雀

少年の日の一茶は、このやうにうつろな心情をうたつてゐるが、義夫は、自分とおなじ年頃の子供のいふ「お母さん」が、かならずどこかにゐて、ひよつこり自分の面前にあらはれてくることを信じてゐた。だから父や姉たちが母は死んだと言つてきかせても、それを本當にしなかつた。志津子は、弟のこの母にたいする強い思慕に動かされて、叔父と相談の上、母に戻つて貰ふべくひそかに睦子のもとを訪ねる。十年まへに家を出ていつた睦子は、場末に小さなカフェーを経営して、年下の愛人と棲んでゐた。荒んだ母の生活や物腰をながめたとき、志津子は、とつさに望みのないことを感じた。叔父から話をもちだしたが、豫想にたがはず母はうけ容れなかつた。

「そりやあの子は、あたしの腹を痛めたには相違ないが、あたしはあの子を生みたたくつて生んだんぢやありませんよ。宗ちやんも知つてゐる通り、あたしは生まないで済むものなら済ませたいと、どんなに思つたかしのに、やれ世間がどうだの、警察がどうだのつて、あの人かむやみにうるさいことをいふから、仕方がなしに身二つになつただけけれど、さういふ因縁

つきの子だから、あたしやあの子にはちつとも愛情がないんだよ。もと／＼あたしつてもものがないこととして育てる約束で生んだのだから、今更になつて母親がどうのこうのいふせきはな
いんだよ」

かうして睦子は、一旦は素氣なく斷つて歸すが、隅田（愛人）との仲が思はしくなくなつてくるにしたがつて、子供にたいする愛着が日ごとにつり、義夫の母である自分が、ますます深く自覺されてくる。

たまたま、愛人のあとを追つて上總の大原にゆき、その海岸で見知らない少年と釣をしてゐる隅田を發見するが、一緒に宿へかへる途中で、迎へにきた志津子と會ひ、はじめて、眼のつぶらな可愛いその少年が義夫であることを知る。志津子たちの避暑にきてゐることを知つた睦子は、隅田をせきたてて、その翌日の汽車で東京に發つた。母と會つてゐながら、母であることも知らない義夫の眼のとどくところにもあることが、かの女には怖ろしく思はれたのである。逃げるやうに東京へ戻つてはきたが、嘘の奥にふかく刻まれたつぶらな少年の眼が、忘れがたく

かの女の網膜に焼きついてゐた。

睦子が子供の愛に傾いてからといふもの、隅田との仲は一そう險悪になつた。そんな折、義平は喘息が嵩じて危険に陥つてゐた。睦子は、この機會をのがしては、義夫の母になれる日が再びあるまいと考へて出かけるが、義平の強硬な拒絶にあつて、會ふこともできずに歸される。

義夫が病院へ入れられたのは、義平の死が知らされて間もなくのことである。睦子は、とるものもとりあへず駆けつけた。親戚のなかには、かの女の附添ふことをとがめる者もあつたが、志津子のはからひで許され、はじめて親らしいたはりで義夫を看護する。やがて義夫も全快し、睦子は、志津子の口添へで一緒に暮せる身になるが、呼び馴れない「母さん」が、義夫にはどうしても出ないのである。

睦子は、なによりもまづ義夫の母であることに努めた。十何年かを別々に暮してゐた親子の距離を、義夫のためばかりでなく、母親としての自分のためにも縮めようと考へる。しかし、睦子の努力にもかかわらず、義夫は、依然として盗みをし、學業も不出來だつたのである。彼女は責任をかんじた。家庭を棄てた女の、當然負はねばならぬ恐ろしい結果を、いまさらのごとく義夫

の上に見た思ひであつた。かくて、家庭の母として、かの女はふたたび出發するのであるが、たまたま、訪ねてきた見知らない男から隅田を訴へるのだと聞かされ、心配のあまり彼をおとづれるべく家を出る。

熱のない光を發明しようとして、いろんな人たちから資金を融通して貰つてゐた隅田は、研究の結果が思はしくないのと資金難から、ぬきさしならない破目に陥つてゐた。かうした状態を見せつけられた睦子は、子の母となるべく決心した昨日までの努力を、いささかの反省もなく抛棄して、愛人に盡さうとかんがへる。

義夫のもとへ戻らない睦子を心配して叔父は出かけるが、愛人のために身を投げださうと決意した彼女には、子のために翻意する餘裕など残つてはゐなかつた。むしろ、さうした愛人との苦しい生活のなかに、おのが全身を埋めようとしてゐるかに見えるのである。

「ほゝゝ。完ちやんは、こんな態になつても、と思つてゐるのだらう。そりやあたしだつて、好きこのんで打たれたり、蹴られたりしてゐるわけぢやありやしないよ。あたしや何とかして、

あの人をものにしたいたいと思つてゐるからさ。あの人は短氣だけれども、根は本當にいい人なんだよ。さうして、いい頭を持つてゐるんだから、どんなことをしても、あの人を世に出さなくつちやならないと思つてゐるんだよ。さう思つてゐるから、あたしはどんなに打たれたつて、蹴られたつて、いつも平氣さ。あの人がさういふ事をする時は、あの人が一番苦しんでゐる時なのよ。あの人の苦しみに比べれば、あたしの苦しみなんか何でもないわ。あたしはあの人のしたい放題にさせてゐるの。それであの人の虫がをさまるんなら、それであの人にいい考へが湧いて来るんなら、打たれるぐらゐお安い御用ぢやないの」

睦子がゐなくなつても、義夫はそんなに不思議には思はなかつた。小母さんは姉さんや四谷の伯父さんと喧嘩をしてでて行つてしまつたので、もう歸つて來ないのだといふことを知つてゐた。歸つて來ないとなると、なにかしら淡い寂しさを感じないではないけれども、ゐてくれなくては困るといふほど、彼は愛着を持つてゐなかつた。姉さんだけよりも、小母さんがゐた方が時にいい事もあるにはあるが——ぐらゐの、功利的なものだけだつたのだ。

「お母さんだなんていつたつて、やつぱり、さうぢやなかつたんだ。」

結局、睦子がゐなくなつて、彼の頭にもつとも、ふかく刻みこまれたことは、これだつた。この小母さんの睦子は、經濟的破綻と、研究の行きづまりに苦しんでゐた隅田に、心をこめて盡してゐたのである。

やがて破局がきた。隅田は睦子のゐない隙を狙つて自殺した。彼女もあとを追つた。

かくて、彼女は、その陥らざるを得なかつた苦境と、當然の没落に身を滅ぼさねばならなかつた。しかし、それは、家庭と家族に不幸を降した母親の破滅のすがたではなくして、おのが悦びをつらぬくことのなかに、女の眞實をもとめた女性の敗慘である。彼女もいくたの迷ひや、ふるさをふりすてることはできずに動搖はする。しかし、そのやうな動搖のたびに、實生活からあらたな反省をうけ、おのが眞實へのつよい意志をたわめなかつた。そのやうにつよい眞實への意志を、ともかく、積極的な行動によつて實驗したところに、彼女の敗慘にをはる生涯の意義がある。

彼女は、愛人の屍のうへに自決するとき、志津子にあてて次のやうに書きのこしてゐた。

「義夫のこと、くれぐれも頼みます。こんなことになつたあたしを、母と呼ばせることは義夫に可哀想です。守川がいつたやうに、母はどこまでも昔死んでしまつたことにしておいて下さい。女が母親になることは何でもありません。そんなことは、どんな女にだつて出来ることです。でも、母親たることは、なかなか出来ることではありません。このことはよく／＼思案して下さい。あなたにひひ残したいことはこれだけです。」

このやうに、彼女は娘にたいし、愛のない結婚から生ずる女の不幸を暗示してゐる。愛する人と結婚のできないといふことは、子供の眞の母親となることもできないとつたへられてゐる。これは、愛兒セリージャのよき母親でありながら、ウロンスキーのもとへ走らずにゐられなかつた、トルストイの「アンナ・カレニナ」の心情をも象徴するものであらう。

トルストイが「アンナ・カレニナ」で描いた女主人公アンナは、「善良で、立派な人間」の假面

の下に、そこ知れぬ虚偽と打算の眼がひかつてゐるといふふうな夫カレニニンに耐へきれず、ウロンスキーの愛をもとめて家出する。そのいつはりの耐へがたさが、アンナにとつてどのやうなものであつたか、つぎのアンナの告白から知られやう。

「われわれの生活は以前のとはほりに進まなくてはならないのであります。」と、彼女はまた、手紙（夫よりの）のなかの文句を想ひ起した。「この生活は以前でさへ随分苦しいものだつた。ことに近頃は恐ろしいものだつた。それだもの、この先はどんなものになることやら？　しかもあの人は、なにもかも知つてゐるのだ。わたしは呼吸することや、愛することを後悔することのできないのを知つてゐるのだ。また、あの人そんなことをして見たところで、嘘とあざむきのほかにほかに一つ生れて來ないことを知つてゐるのだ。でもあのひとには、いつまでもわたしを苦しめることが必要なのだ。わたしはあのひとを知つてゐる。わたしはあのひとが水中の魚のやうに嘘つきを泳ぎまはつて、よろこんでゐるのを知つてゐる。だからわたしは、どんなことがあつても、あのひとに、そんなよろこびを與へはしない。わたしは思ひきつ

て、あのひとがわたしを包みこまうとしてゐるあの虚偽の蜘蛛の巣を破つてやる。どうなつてもいい、なるやうになるがいい。どんなものだつて、虚偽や、欺瞞よりはまりました。」

「だけど、どうして？ おゝ神様！ おゝ神様！ わたしのやうにこんな不幸な女が、いつかこの世にあつたでせうか？」

以上の告白は、彼女が、愛人をもとめて家出した後、ふたたび家庭に歸るやうにといふ夫からの手紙をおもひだして語る言葉である。彼女はなにより、嘘といつはりの生活そのものを嫌つてゐた。それゆゑに、夫の寛大な愛とゆるしにたいしてさへ、いつはりの心をながめ、「わたしはあのひとの善行に對して、あの人が憎らしくてならない。」といひ、「あのひとが、わたしなどはあのひとの爪にも値しないことを知りながら、やはりあのひとを憎まずにはゐられないのです。わたしは、あのひとの寛大なのたいして、あのひとを憎むのですわ。そして、わたしは、もう外には、どうしようもありませんの、たゞ……。」と、狂亂のすがたで彼女の心理は欺瞞にたいする憎惡にかりたてられ、つひには、その憎惡のためにおのれを失ひさうになる。

そして、いつばう、彼女は全身の救ひをもとめて走つたウロンスキイにも満足できなかつた。かれもまた、社會的な欺瞞と形式主義からのがれられぬひとであることを知り、素朴さのないゆがめられたすがたを、アンナはたしかめねばならなかつたのだ。かやうにして、アンナの心理は愛憎のふたつに分裂してゆく。夫カレーニンの態度のいつはりをおもひゑがくと、ウロンスキイへのかぎりなき愛情をあふりたてられる。逆に、ウロンスキイを嫌惡しはじめると、カレーニンの家庭にかへつて忠實な妻になることを刺戟されるのであつた。このやうな彼女のみたされぬ心理の不満と二重の分裂のはて、つひに、ウロンスキイとの愛情をもふりすてて、すべての欺瞞おほき世界から脱出したい慾望にみちびかれてゆくのである。アンナは、欺瞞のなかに愛情をそだてることはできなかつた。なぜ素朴に、ひととひととが、表現と心理のわけへだてなく眞實をかたりあへぬのであらうか、この疑問がアンナの愛の放浪をよぎなくせしめたのである。かくして、作者トルストイは、アンナを彼女をとりまくいつはり多い牢獄から解放させる。すなはち、彼女は、つひに、鐵路のうへにそのいたましい苦悶の生涯を閉ぢるのである。

アンナのたどつたこの人生的な足どりのなかには、隅田の屍にをりかさなつて自決する睦子の、いたましい流轉の過去がたたまれてゐる。ウロンスキイは、アンナのあとを追ひはしなかつた。追はしめる必要もなかつた。けれども、アンナはみづから選んだ人生をみづから處決した。虚偽の世界にたへきれずして、みづから突きすゝんだ世界も、現実的な不幸をいやすものでなかつたとはいへ、そこに幸福の幻影をながめ、みづからの生涯をすゝんで犠牲のルツボに投じたのは、眞實の人生にたいする感動のためであつた。おなじことは、睦子の生涯にもいへるであらう。スタンダールは、「戀愛論」のはじめにいつてゐる。

「眞面目に發展してゆけば、すべてが美の性質をもつやうになるこの戀愛感情」と。

これは愛情の眞實をもとめるひとの、また人生をふかく理解しようとするひとの、つよい反省の言葉であらう。これはたんに、學問や教養の問題ではない。生の意義とよろこびの本能を、人間生活のなかにさぐらうと努力するひとにのみ理解できる言葉である。

おほくのひとびとは、實生活の足どりの道筋で、この言葉のもつ人生の意味を、いかに、のけものとして、こばみつづけてきたといふのであらう。女が歴史のながい過程で、強ひられた盲目

の愛情ゆゑに、男の虚偽ばかりでなく、おのれのいつはりの感情をさへ意識しえずにたへしのんできた。と、いふのは、おのれ自身の誠實な觀察の力さへ女性にめぐまれなかつたからである。しかし、たとひ、それにきづいたとしても、多くの女は、自身の無力をさとつて傳統の塗るかへには手をこまぬきがちであつた。その弱さがいかに多くの犠牲を生んだことであらう。おし殺し、飲みこむことを傳統とした愛情が、なにかの動機でめざまはてに、どう破綻するか、さういふ教訓をアンナや睦子は死によつて象徴したのではないか。

鐵路に生をへたとはいへ、アンナはおのれの心のいつはりは打開しようともがいた。睦子は？ 彼女も、律義な夫との生活を清算したところでそれをした。それが男の律する道徳から異端視されることであつたのみでなく、おのれの確固たる信念の結果ともいはれがたいかも知れぬ。だが、彼女らは、ともかく眞實の生きかたと、悦びの人生にたどりつかうとするもがきに身をゆだねた。ゆだねざるをえなかつた。それは功利的な愛の探究ではなく、愛の眞實をたづねあ
るく巡禮のごときものであつた。

眞實一路の旅なれど
眞實、鈴ふり、思出す

—北原白秋「巡禮」より—

3.

「眞實一路」の睦子や、アンナ・カレニナにしても、男との愛情の眞實に飢ゑたあまりに、母性としての役割をまつたうでできなかった悲劇の女性であるが、中山義秀の「美しき囀」の乃武子も、男との愛情の破綻から母性愛の畸形におちいる女性として描かれてゐる。私生兒を抱いた彼女は、いつぱんの母のごとくさづけられたるものとして子供をながめなかつた。父のない子を産むことは、彼女のばあひには「仕方がない故」であつた。したがつて、生れ出づるもののために、母としての悦びをよろこびとして享受することは、たうてい彼女にはできなかつたのである。

この母として、登場する女性乃武子は、尋常三年で學校をしりぞき、母の店で賣子となつて働

いた。藪睨みではあつたが、かしかつた彼女は、商賣もうまく、賣上をひきあげては母をよろこばせた。だが商賣が思はしくなかつたところから、その後、一家は轉々と住居を替へ、酒の小賣などもはじめてみるが、のぞみはなく、乃武子の腹ちがひの兄が朝鮮で鐵工場を經營してゐるのを眞似て、父は資金をかき集めてやつてみるが、やはり思はしい結果はえられない。こんな情態だつたゆゑ、乃武子は、姉夫婦のもとで女中がはりに働き、二年あまりを夜學にも通はせてもらふが、物どころがつく頃から勉強がしたくなり、姉夫婦にせがんで上京し、衆議院翰長の邸へ女中に住込んで藥劑師になるべく勉強をはじめた。

だがその時分はまだ、女性にその資格があたへられてはゐなかつたので、彼女は方向を轉じて看護婦にならうと考へる。乃武子の母は、他郷で苦勞してゐるのを氣にやんで、故郷へ彼女を連れもどすが、貧しい家には長くゐたまらず、こんどは長兄をたよりに海をわたつて朝鮮にゆく。

このやうな流轉のうちに、彼女は婚期を失し、獨りぐらしで三十の聲をきく身となる。かうして誰からも愛されることもなく姥櫻となつた彼女は、硬骨漢をもつて自任する老醫學生下枝三省と、はじめの戀をとりかはすのである。乃武子のやうな女を狙ふところに、彼の奇抜な一面も

あつたのだが、彼女は、普通の男性が眼をつけるやうな女性ではなかつた。また、男からたやすく騙される女でもなかつた。

彼女の兩眼の鋭さは、娘時代から變りはなかつたが、癖のひどいちぢれ毛を銀杏返しに結つて、藪睨みのまなこを据ゑた風貌は、一見して怖れをいだかせるに充分なすがたであつた。だがそれにもかかはらず、年たけて苦勞を積んでゐた彼女は、結婚を條件としないかぎり、男の誘惑をも突張つてゐたのである。

彼女は、下枝を愛してゐたが、けつして油斷はしなかつた。ところで下枝のはうもまた、結婚の意志など毛頭なかつたのである。これが乃武子の、はじめて知つた戀の、それにむかふ態度だつたのだ。かうした戀愛は、近代に生きる男女の、ひとつのかなしき闘ひの姿でもあるが、しかしここでもまた女はもろい敗れかたに終つてゐる。それは身構へてゐる女の姿勢のなかに、本能的な弱點がひそんでゐたからでもあらう。

「まアあの月」

さう叫んで乃武子が、思ひに堪へかねたやうに立ちどまつたうしろから、下枝の柔道で鍛へら

れた兩腕がからまり、不意の接吻をうける。それにしても女心は不思議なものである。いちど男にゆるしてしまふと、もう他愛がなかつた。そして懷妊するのである。

下枝はまもなく、學業を卒へて歸郷した。彼女は、その留守に博子を産むのだが、十三日目の午ちかくになつて、新調の背廣服に身をかためた下枝三省が、酒氣を帯びてやつてきた。そして乃武子の床脇に坐つていふのである。

「どうだ乃武子。お産の時出血はなかつたか」彼はひそかに、この女が出血多量で死ぬのを期待してゐたのであらう。だがかうして、嬰兒と枕を並べてゐるところを見ると、それも望みはないと思つたのか、さつそく五十圓の金を渡したのである。彼女は藪睨みの氣性にも似あはず、圖太い男の心膽をいまさらのごとく悲しんだ。

「貴男は今後どんな華かな御家庭でも望み通りお出來になりませうが、一度過つた女の身は、もはや取返しはつきません。私はさう思ひあきらめて、たとへ乞食しやうとも、我子の爲、仕合せな境遇をつくつてやるつもりです」さういふ女の言葉に返事もせず、いふだけを聞くと、下枝はさつさと歸つてしまふのである。

このやうな逆境を背負つて、小説「美しき四」の母乃武子と娘の博子の女性像は出發するのである。

山本有三は昭和のはじめに、「嬰兒殺し」のなかで、母が生きるために子を殺す女土方の生きかたを描いてゐるが、乃武子もまた同様に、子を殺して自分も死なうかと考へる。さうすれば、自分が滅びると同時に、下枝の前途もめちやめちやになり、生涯世の中へ顔をだすこともできなくなるにちがひない。と、いくたびか思ひはしたけれど、自分ばかりか、子供の命まで道連れにすることが忍びがたく思はれて、結局、産後のからだがもと通りになるのを待つて、下枝からうけた五十圓を資本にして下宿屋をはじめた。

年老いた母と嬰兒をかかへて生活戦線にとびだした彼女は、藪覗みのおほきな兩眼をいつそう光らせ、性質も、それに應じていよいよ辛辣味を加へた。後日にいたり、南海第一の都會に、看護婦會を設立して女西郷と評されるやうになる彼女は、かうした境遇のなかに、母として女とし

て生き抜いてゆくのである。

いちどは生命保険の外交員と、簡単な夫婦生活をいとなんでもみるが、ほどなく自分から良人を追ひだしてしまふ。もはや、おとなしく人妻の役をつとめてゐられるやうな女ではなくなつたのである。自分の仕事を維持するためには、自分の心を欺き、感情を殺すことも平氣だつた。月収は五六百圓にのぼり、二三丁さきへの外出にも自動車をよび、旅行には一等船室へをさまり、財布には金をいっぱい詰めこんで持つて歩いた。

醫學生下枝三省に情をつくした年増女の愛慾は、一轉して見榮と物慾の典型と化したのである。要するに彼女は、女ひとりが逆境に抗して生きるためには、こうならねばならぬといふことを、ためすかのやうに己れの過去の半生で物語らせてゐるのである。

このつよい母親のもとで育てられる娘の博子は、この母親からこんな子が産れたかと思はれるやうな、優しく初心な性質であつた。

ミスKの美人投票には當選するし、市賓の名士に花束を捧げる令嬢使節にはえらばれるし、母

とはべつな意味で、彼女の存在は名物になるのである。

この博子が最初に得た知慧といへば、なにことも母のいひつけにしたがつて甘へてさへみれば、母はいつも自分を可愛がつてくれるといふことだつた。博子は、母にゆるされなければ、人の愛にも狎れず、人にちかづきもしなかつた。まつたく獨りだちの思慮と分別とを缺いた、蠟人形のやうな人間としてできあがるのである。かういふ彼女のところへ、ある醫大教授から婚の話がもちこまれる、家族七人もある家の長男だが、家族の面倒と、學位をとるまでの研究費さへ出してくれば、養子として先方も承知するからといふのである。捨てられた下枝三省を見返してやうといふ忘れがたい意地や、もちまへの見榮も手傳つて乃武子は、眞輔といふ教授の話の醫大生を博子の夫にさだめてやるのである。

博子は、母のさだめてくれた夫へ忠實にかしづき、朝は良人よりはやく眼ざめ、良人の枕元に新聞と煙草をそろへておくし、彼が起きれば、女中の手を煩はせるまでもなく、一さいの身のまはりへ手落なく心をくばつた。しかし眞輔には、どうもこれが妻の眞情だといふ氣がしなかつた。「妻」の型を眞似たお嬢さんのままごとのやうにしか思へなかつた。彼女は、眞輔を見るといつ

もにこ／＼して愛想がよく、どんな些細なことでも逆らひはしなかつたが、もし彼が、彼女の夫でなかつたなら、男としての眞輔になんの愛着も興味も持ちさうに思はれなかつた。博子は、そんな女だつたのである。

彼は、たまたま寢物語りに、博子にこれまでに戀愛したことがあるかと聞いてみた。

「そんなことありませんでしたわ」

だが假りにもミスKに擧げられたくらゐだから、思ひを寄せた男もあつただらうといふと、「それは少しくらゐあつたかも知れないけれど、御存知のやうにお母さんが嚴格だし、私だつてそんな男達さげすんでゐたの」といふのである。このやうな言葉にあらはれた彼女は、たんに浮薄な戀愛心理にとらはれなかつたといふだけでなく、愛情そのものにたいする無關心や、他力本願的な依頼心を露呈してゐる。それゆゑに、「戀愛など輕蔑しますわ」といつて、母の指圖と感情を通してのみ世間をながめ自分をきめてゆくほかはなかつた。

自分を一個の獨立した人間として、なんの要求ももたないこの従順な女を見て、眞輔はある失

望を感じはじめるのであるが、しかし、その眞輔もまた、一萬圓くらゐは大丈夫と腹算段をしてゐた結納金が、二千圓で事切れとなつたのを憤慨して父が怒鳴りこんでくると、一言半句も言譯のできぬ輕薄才子なのである。そして彼は、結局妊娠した博子をして家を出るのだが、いちど博子をして出た眞輔は、彼女に母をすてて来いとすゝめるが、彼女は母をすててまで夫の許へ行かうとはしなかつた。それぞれその親たちの打算的な投機心によつてむすばれ、はなされてゆくのである。

このやうにして、美しく従順な博子は、母のたどつたとおなじ運命にさらされるのである。いづばう、乃武子をして去つた下枝三省は、東京の中心にある帝都ビルに四室を占めて診療所を開業し、美容手術において、斯界の權威者たる名聲と、數十萬の資産を積んでゐた。乃武子母娘は、娘の父であり、母の昔の戀人であつた下枝をたよつて、いままでの生活地盤をすてて上京する。

ここでこの小説が、結末を告げるのであるが、ここでもまた、女の生活にたいする異常な努力でもかかはらず、あるひは物慾のため、あるひは、無意思のために、愛や家庭や、そして、おの

れ自身の人間性をさへ破壊しざる實例をしめすのである。たとへば、普通には、子にたいする愛情が、そのまま女の悦びとして人生を形づくつてゆくはずであるが、乃武子は、どこまでも女の習性として子の責任を負はうとしてゐる。つまり、妻の役目をもたぬ女にとつて厄介な荷物ではあるが、自分が産んだゆゑに仕方なく責任をも負はうといふのである。このあひだの消息は、下枝三省との戀愛の動機にもうかがへるし、また娘の結婚にたいする功利的な打算からもかんがへられる。いはば、彼女は、物慾と打算から人生や女の幸福といふものを割りださうとしてゐたのである。

また、娘の博子は、「素直で純潔で、涙もろく、言語動作のひどく子供らしい、いつてみれば、いまの世にはめづらしい傀儡のやうな可憐」な女性だが、それゆゑにまた、自分の結婚にたいしても、また自分の人生の選擇についても、なにひとつ自發的にかんがへようとはしなかつたのである。

「母の教へと母の懐の世界以外については何も知らぬ、すべて母の力に頼りきつて、母の命ずるままに動」くことが、彼女の信仰であり、人生だつたのだ。物慾と打算と無知にとざされた野生

的に強烈な性格の母親のもとで、彼女は、思慮もなく、分別もなく、行動もなく、悦びもなく、しかし、満足な氣持で生きる女であつた。だが、満足に思つてゐたこれらのひとつひとつが、結局、彼女の弱點として、やがては破滅の深淵へとみちびく結果ともなつてゐるのである。

おなじことは、乃武子にいひうる。家庭からでた彼女が、對社會的なことでは、藪脱みのまなこと同様にするとく聰明で、「敷島看護婦會あつての自分達の生活だといふことを、そしてその心得によつて萬事自身を處してゆくことを誰よりも明瞭に承知して實行」する女である。だから乃武子は、「會の名をあげてその名譽を維持するためには、自分の心を欺き、感情を殺すことも平氣だつた」のである。だが、この物慾と打算によつて計量された彼女の生涯は、またそれゆゑに破滅に沈まねばならなかつたのである。つまり、眞の愛情ある知性と意思の缺落が、人間としてのかの女を、女としてのかの女を、救ひがたい化石として葬つてしまつたからである。

いはば、彼女には、女を女として正當に理解してくれるひとよりも、經濟的に女を安心させてくれる良人の方が望ましかつたのだ。愛情はなくとも、おもしろい月給袋を實直に手渡してくれる男性が必要だつたのだ。したがつて經濟的な條件をもつてゐない男性は、愛情の對象たりえなかつ

たし、彼女の感情をふくらませてくれなかつたのである。このやうに、人間感情をも彼女は金銭によつて打算してゐる點で、現代に生きる女性の一般的性格の反面を暗示してゐる。彼女のもつてゐる頑固な保守性と、愚鈍な物慾根性とは、思ひだすのに困難な女性像ではないのである。

母乃武子がおのれの人間性を殺してまで打算的にならざるをえなかつたのも、そのはじめに、男の利那的情熱に襲はれ、冷酷にかれから振りすてられたところに起點がある。愛情にめぐまれず、自立への過程を辿ることが、いかに女性の人間性破壊の傾向を生むか。

あるひは、娘彩子の受動的な、他力本願的な、エゴイズムに倒れゆくすがたは、今日の生活意欲に旺盛な女性のあひだにおいて稀有な存在ではあるが、このやうな性格のなかに、過去女性の背負はされた傳統の名残が、もつとも悪質に凝結してゐるのを知らされる。男性の倫理的責任について、女性の自立と人間性の受難について、あるひは、頑迷な因襲が女性判斷力を喪失させることについて、この二人の生活過程から訓へられるところはすくなくない。

戀愛と生活との關係をかんがへるについて、おほくの課題をふくんでゐるのは、徳田秋聲の「假裝人物」に描かれる葉子といふ女性の相貌である。

三人の子供の母として、人妻の役をもつとめてきた葉子は、才分にめぐまれた女特有の奔放な性格から、夫ともわかれ、文學の途に新生面をもとめて生きようとする女性である。

彼女は、はじめて結婚した男とわかれようと決意したときにも、三人の子の母であることなど一向に頓着なく、別の男が、すぐにも面前へあらはれてくるだらうといふやうな、かるい氣分で妻の衣裳を脱ぎすてられる女なのである。

男から男へ滑走的に走つた。あるときは畫家に、あるときは實業家に、醫者に、學生に、また、あるときは、その大半を精神的にも肉體的にもかたむけつくした皺のおほい小説の老大家に、風車のごとく、とめどなく廻り走つた。老大家とは、いふまでもなく秋聲の分身であらうが、それ

はとにかくとして、處女作が出版されることになつたとき、その装幀を引きうけてくれた山路といふ畫家から、その作品に共鳴した手紙をうけると、「立ちどころに吸ひつけ」られてしまひ、「これこそ、自分がかねがね捜してゐた相手だといふ氣がして、我慢性のない娘が好きなら、十分彼を見つけたやうに、それを手にしないと承知できなかつた。自分のやうな女性だつたら、十分彼を怡ませるに違ひないといふ、自身の美貌への幻想が常に彼女の浮氣心を煽りたてて」ゐたのである。

しかし、こんなふうな情熱をかきたてた山路との結婚生活も、二月とたたぬうちに過去の事件の一つとして葬られ、出版を引きうけてくれた男といつの間にか關係がむすばれてゐる。かうして、一方で別の男と關係をつづけながら、原稿を見てもらつてゐる庸三のところへきては、「私先生のところへ来て、家事のお助けしたいと思ふんですけれど、何う」と、ばかりに相手を面喰らはせるのである。

「先生の今迄の御家庭の型や何かは、そつくり其儘少しも崩さずに、先生や子供さんのために、一生懸命働いてみたいんですよ。それで先生の生きておいでになる間、お側にお仕へして、お

亡くなりになつたら、その時は子供さん達の御迷惑にならないやうに、深く身を退きます」ともいふのである。「さあ。何しろ僕は家内が死んで間もないことだし、ゆつくり考へて見ませう。さう輕卒に決めるべきことでもないんですから」老大家は、そんなふうに、その場を濁してはゐたが、結局、かうしたきつかけから、二人はいつとなく離れがたい關係にはいつてしまつた。

庸三の家へ出入りするやうになつてから、畫家や、出版屋との關係は薄らいだかに見えたが、そのときにはすでに、同郷の若い實業家で、以前、歌を教はつたことのある秋本といふ男が交渉をもつてゐた。彼女にいはせると、「バトロンがなくなつては」と、いふのである。もちろん、秋本との關係はふかいものではなかつた。ときたま、上京したときに會つてゐるといふ程度で、妻子や圍ひ者まであることを知つてゐる彼女は、生活費に相當するだけの好意を示せば事足りるのだと考へてゐた。だが、その秋本も、庸三との關係を知つてからは、だんだん遠ざかつていつた。すると今度は、庸三の家へときどき顔をだす若い學生と、急速度に接近し、はては結婚したいと言ひだした。庸三も、それをいいことにすゝめて家をもたせるが、一と月とはつづかなかつた。

かうした不規則な生活を、繰返してゐるうちに、葉子は痔瘻に冒されて病院へはいつたが、結果からみると、それは新しい男と交渉をもつ機會をつくつたやうなものだつた。彼女の手術にあつたR博士が、快方にむかつた彼女と自動車に乗りあはせて出かけるやうになつたのは、間もなくのことである。女流作家といふ外見が、男たちにもなにか魅力となつてゐたのであらう。それをいいことにして、彼女も、男をそばにおいて原稿紙にむかふといつた調子であつた。この奔放な女性を、作者はつぎのやうな言葉で説明してゐる。

「彼女はどんな無理なことをも平氣でやつて行けるやうな、無邪氣といへば無邪氣、甘いといへば甘い、自己陶醉に似たローマンチックな感情の持主で、それからそれへと始終巧妙に自身の生活を塗りかへて行くのに抜け目のない敏感さで、神経が働いてゐるので、どうかすると何かしら絶えず陰謀をたくらんでゐる、油斷も隙もない悪い女のやうに見えたり、刹那々に燃えあがる情熱はありながらも、生活的に女らしい操持に乏しいところから、動もすると娼婦型の浮氣女のやうな感じを與へたりするのであつた」と。

はじめて結婚した男とわかれて、庸三を師として、關係しはじめたときから、彼女の鬱勃とし

た慾望や野心は、彼女をして運命的に狂はせるやうな結果に導いてきたことは事實だが、さうした経過を思慮もなく潜つていくうちに、いつか、それが彼女の習性のやうな固執となつて錆びかたまつていつたのである。だから、彼女は、珍しもの好きの子供が、はじめすばらしい好奇心を惹いた玩具にもちきに飽きがきて、つぎつぎにあたらしいものへと手を延ばしてゆくのおなじに、ろくにはつきりした見定めもつかずに、一旦いいとなると、矢も楯もたまらずに狙ひをつけた異性へと飛びついてゆくのであつた。そして、求めていつた生活が、彼女のおもひたかぶつた慾望に添はないことが苦痛になるか、または、もつと好きさうなものが身近にみつかると、おさへがたい慾望の焔が、さらに彼女を驅りたてて、別の異性へと飛び去らせてゆくのである。

286

したがつて、一つびとつの現實についてみれば、あまりにも、神経質な彼女の氣持にせまきるやうなものが、このせまい地上の生活環境のどこにも見いだされやう筈もないので、いたるところで、彼女の虹のやうな希望はうらぎられて、我まゝゆるゑの嘆きと、かなしみが、美しい彼女の夢を微塵に碎いてしまふのである。しかし、北の海の荒い陰鬱な、うつくしい自然の靈を享けてきた、彼女の濃艶な肉體をながれてゐるものは、いつも新しい情熱の血と生活への絶えざるあ

こがれであつた。だから、とかく妥協しがたいもののやうに見える彼女の戀愛巡禮にも、神経的な打算があつたのである。作者は書いてゐる。

「彼女の産れた北方には、詳しくいへばそれは何も北方に限つたことでもないが、女の貞操ほど容易く物質に換算されるものはなかつた。庸三は二度も行つて見た彼女の故郷の家のはまはり一體に、昔、榮えた船着場の名残りとしての、遊女町らしい情緒の今も漂つてゐるのと思ひ合せて、近代女性の自覺と、文學などから教はつた新しい戀愛のトリックにも敏い彼女が、兎角盲目的な行動に走りがちである一方に、そこにはいつも、貞操を物質以下に安く見つもりがちな、殆んど無智といへば言へるほど曖昧な打算的感情が、恰かも過去の女性かと思はれるほどの廢類のなかに見出されるのを感じるのであつた」

287

もちろん、北方人としてそだち、北方的な潮風に肌をきたへられてきた彼女であつてみれば、その氣質や習慣のなかに北方的遺物が影をひそめてゐることは考へられるが、彼女の場合にあら

はれてゐる打算的な感情は、北方的といふより、むしろ、経済的よりどころの必要の方が、よりおほく切實に彼女を支配してゐたのではあるまいか。これは、新聞記事を取消してもらふために、新聞社をおとづれたとき、主任の間ひに答へる彼女の言葉のなかにもうかがへる。もちろん、そのときは、その言葉が直接公けになる性質上、いくぶん事實を粉飾して語つたとはおもはれるが、——戀愛も戀愛だが、生活や母性愛の悩みもあつて、今までの生活は行き詰りがきたので、打開の途を求めようとしたが、何といつても文學が生命だし、新しい結婚問題がどうなるにしても、矢張り先生（庸三）に頼つて行く以外に途はない——といふ氣持は、初の男から子供を二人まで引取つて育ててゐる境遇から考へても、彼女に物質的援助が必要なのはあきらかである。

と、言つて彼女は、文學以外の面で、庸三を煩はすことは自尊心がゆるさなかつた。したがつて、子供をかかへた身のふりかたは、いきほひ第三者の援助に求めねばならなかつたわけである。ただ、彼女の場合は、結果から言つて、どの場合も、どのばあひも、それがあらかじめ豫定されてゐるかのやうに失敗にはつてゐたのである。もちろん、庸三も言つてゐるやうに、「夢の多すぎる女」にはちがひなかつたが、かならずしも夢だけで動いてゐなかつたことは、庸三が自分の

子供に素氣なくあたるといつて憤つた、あの母親としての心情のなかにも裏書きされてゐる。しかし、かうした境遇にありながらも、それだけは棄てまいと縋りついてきた小説の途が、つひに閉ざされる日があった。葉子の消息が絶えたのは、その直後のことである。

かくて、「假裝人物」に描かれた葉子は、犠牲と負擔をはらつたにもかゝはらず、おのれの望む途にもすゝめず、痛ましい姿を街頭に投げださねばならなかつたのである。おなじ名の有島武郎の「或る女」の葉子も、経済的な據りどころをもとめて男から男へと移つた。おなじ名であることが、不思議なめぐり合はせだといふ意味ではないが、小説に描かれたおなじ名の女たちが、時代と境遇を異にしなから、圖らずも、おなじ運命につまづいていつた姿におもひあたる時、女の生活の歴史につきまとふ重い足枷が暗示ふかく思はれるではないか。この小説の背景になつてゐる時代は、「新興藝術派」や、プロレタリア文學が、やうやく擡頭しはじめた時分のことであるから、昭和はじめ、二三年頃だつたであらう。

そのやうな轉換期的な混亂にまかれた女性の、思想的放浪といふよりは、無思想になることによつて、しかも、なにものか、おのれをみたすものを希求し、さがし歩かねばならぬ姿が、彼女

の流轉する愛情のなかにみいだされるのではあるまいか。

すくなくとも、秋聲に描かれた葉子は、作者のいふ北方的性格や因襲を越えた一般的時代性とのつながりのふかいものではないか。

彼女の文學にたいする祈禱が、おそろしくロマンチックであることと、實生活的なこころづかひのあまりの敏感さ、巧妙さとは、けつきよく、彼女のなかに傳統のむざんな崩壊をさへへるならぬ新しい支柱も芽生えぬことを暗示させてゐる。つまりは、無思想と、さへなき心理の焦躁と不安から、功利的に卑俗のまなこはとがり、痴呆的な愛情は流轉をかさね、そして、それは反對の頭のおくに錆びついた文學への祈禱的なあこがれが、むやみと増長したのである。だから、彼女の犠牲的な生涯には、頽廢と空虚な思想のたはむれしかながめることはできぬかも知れない。しかし、いちめん、彼女の悲惨な流轉は、轉換期の動搖における傳統の崩壊と、それにかはるモラルの秩序がめげえぬ間の、空虚と焦躁の歴史的實相を反映してゐるといへるだらう。このやうな時代、愛情さへ満足にはそだたず、主觀的には眞摯な要求が、つねに好奇心と肉體的生理のきまぐれに支配されてゆく。意識的な向上への希ひが、つねに、無意識のなかで敗北とな

つて結果する。そのやうな傳統のくづれゆく轉形期の渦中で、葉子といふ假裝人物の主人公の生涯は、進展する歴史の、停滯の一時期における輕佻な女性のおちいりゆく必然の過程である。このやうな觀察のもとに、この主人公のすがたを追求してゆくならば、今日の女性のあるものにとつて、けつして馬耳東風ではゐられぬいくたの教訓的な針路が発見できるであらう。

附記 純情について——由來わが國の女性像には、舊時代のモラルに抗議したり、俗習への反抗につかれて

實利的な妥協やあきらめの思想におしながされる例が多いとともに、新しいモラルを純粹な愛情や個人主義のなかにとめて、依怙地な肩をそびやかす女性のあらはれる小説も多い。

いはゆる純情は、尊くうるはしいこころ根のあらはれとされてゐる。しかし、いはゆる純情といふものは、それが、はつきりした思想や意思のまじりけのない追求のすがたであればよいが、多くのばあひ、「純情」といふ美はしい形容にあこがれの祈禱をこめて、それを、空虚な方向なき感傷や、針路をうしなつたゆゑの無意味な足ふみにをはる例も多いのだ。

「假裝人物」の葉子は、文學に憑かれた女性の、幻想的な文學愛に破綻するのであるが、美川きよの「女流作家」といふ作品にあらはれる主人公、藤木葉子といふ女性も、幻想的に文學を祭壇にまつて合掌す

る姿で描かれてゐる。

彼女は、妻子ある流行小説家の愛人であるが、はじめ、その小説家を師として文學を勉強するうち戀愛におち、夫をすてて家出する。そして、小説家の愛のふところに集ごもるのであるが、しだいに、男の功利性やわがまや、自分たちの關係の不純なことにきづき、文學への熱情をたかめることによつて、いろいろな不満をかき消さうとする。男の愛撫のうそ、經濟的な不純を知つて自律のこゝろにめざめゆく。彼女はまづ、たいへんな正義派となり、文學の純粹性にひとみをかゝやかせる。それは、愛情の不純な關係や、説明のつかぬ金錢に眉をひそめることからはじまり、それへの反動として、文學愛をたかめ、それにとりすがらうとする。いはば、彼女は、現實の不合理や矛盾にたへきれず、といつて、それを徹底的に證明したり、解決したりすることもできず、あらゆる憤りを、文學の神秘的な追求にうつめ、あらゆる現實の悪から逃げさらうとしてゐる。

要するに、彼女は現實のむさぐるしさを逃れて住みよい幻想の正義や純情の穴ぐらに閉ぢこもらうとするのだ。

せつかく、ふるいモラルを否定し、男のわがまな功利性と愛情のうそをあばきながら、それをモラルの現實的なたゞかひの地面から跳躍させてしまふのだ。反對に、おひもとめた文學も、そのたゞしい價値

をみきはめもせず、現實の苦痛をいやすための方便となつて、むやみとたかぶる感傷を純粹な尊さの祈りだと思ふやうになる。いはば、文學は彼女にとつて現實の苦痛を和げる麻醉藥となる。

このやうな例は、堀辰雄の「菜穂子」にも共通する。菜穂子といふ女性も、結婚における愛情が不合理なこと、欺瞞の多いことにたへきれず、いろいろと打開の方法をもくろむが、それはきはめて衝動的であり、心理的であり、自意識上の満足にとどまつてしまふ。現實におもひ惱みつゝ、なにかわからぬ純粹なものに郷愁をさそはれてゆく。彼女のあがめたり、信頼したり祈つたりする純粹な自我の掟は、けつきよく、實生活的には應用されないばかりか、その矛盾やジレンマを解決しようとする氣概や抱負にも弱く頽廢的である。

このやうなわけのわからぬ感傷的な「純粹へのおこがれ」は、要するに實生活にたいする無氣力からくるのだ。この無氣力は、「寢園」の奈奈江の地盤とおなじ有関的な心理のうちに宿つたものだ。彼女たちを代表とする女性性、習俗や社會的な欺瞞の心理的な矛盾にはわりあひ敏感にきづくが、きづいたとしても、それを積極的に打開する現實的方法には手をこまねく。さうして、悲劇的表情で、意識的な停滯の足ふみや、反芻をいつまでもつづけるといふ實生活の没落者であることが特質である。

このやうな特質は、日本の性格のわるい一面からと、近代的なデカダンの一面からかたちづくられた。

生活からの逃避を純粹なうつくしさとする習慣も、生活と人生の放棄であり、侮蔑である。純粹とはどこまでも、思想の現實的な打開、あたらしいモラル建設への歩みのなかにほんらいの美しさがやどるのである。そして、前掲のやうな「純情」といふものが、どれだけ傳統的に、女性の暗い現實の麻醉となつて、ながく、打開する心をさへぎつたかわからぬのである。

5。

天真な心と生活をもつた萬葉時代の女性たちをかんがへるとき、それが歴史の發展によつて變らざるをえなかつたとはいへ、今日のおほくの小説や物語りにあらはし傳へられてゐる女の生活する姿は、自然性をゆがめられてゐる點において、また心理と肉體の均衡をうしなつてゐるといふ點において、萬葉時代に通過した女の生活の歴史を、あらたな形態において蘇生することが、いかに困難になつてきてゐるかは想像にかたくない。それは、「寢園」の奈奈江のやうな心理の分裂や、「假裝人物」の葉子の流浪の愛情ともなつた。近代生活のあわたしき、波動の浪たかい環

境にゆられたはてに、心理と行動の統一をうばはれ、人間的な自然をはぎとられゆく女性たちのすがた。これは、あながち女性にかぎらず、男性いつばんをも襲つた過渡期の心理不安の表象でもあつた。だが、女性の近代悲劇はさらに深刻な獨自性をもつてゐた。

このことは、女のひとりびとりが、ことなつた生活條件に生きてゐながらも、全體的には男より不利な立場にゐること、そして、その不利な立場が女性に自覺されてゐるにもかかはらず、生活内容は、依然としてふるい仕來りを踏襲してゐる點などが、女の日常生活をますます社會の片すみへ追ひやるやうな結果ともなつたのだと思はれる。

たとへば、もつとも近代的だといはれる精密機械の組立に従事する女性が、その機械の性能を理解しようとするほど熱心に、はたして、自分の生活や人生をみつめてゐるといへるだらうか。また、自分の生活や人生のつながつてゐる社會生活や、時代の動向が、現實的には女の生活をどのやうに支配してゐるかといふやうな事柄を、自分のたづさはつてゐる仕事と結んで注意ぶかく考へてゐるといへるであらうか。なるほど、一部の女性は考へてゐるかも知れない。しかし、それがごく、少數の人間にかぎられてゐることは、あらそへない事實であらう。

もちろん制度や習慣といふやうなものが、女性の内面的な努力だけでかはりうるものではない。が、すくなくとも、自分を取りまく生活の環境と條件をたゞしく認識することによつて、自身身の生活内容をゆたかに充足させ、外部との摩擦の過程において、自己の人生内容を發展させるべく努力することは不必要ではなからうと思はれる。ことに、女には分娩といふ肉體上の自然的素質があつて、人生内容にも男とことなつた側面がくははつてゐる。愛情の問題や結婚についても、また幸福なばあひも不幸なばあひも、彼女たちは、この自然的素質をとほしてのみ人生や生活を形成しなければならぬ。これは、個人的にも女の生活内容のおもさとして、女性の人生を特殊なものにしてゐる。だから、愛情の對象として男をえらんだばあひも、生活經濟の問題が、ふかくからまつてくるのであり、人生的にもおほくの負擔が課せられるわけである。そして破綻したばあひは、男が精神的な傷痕をはつても、女はそれ以上に、肉體的にもほろびなければならぬのである。したがつて、簡単な理由で男と交るといふことも、女性にあつては、ふかい人生問題として考へられるのも當然であらう。

石坂洋次郎の「若い人」に描かれる江波恵子といふ少女の性格は、この點で興味ある存在といへるだらう。また恵子の母親も、異質的な愛情のもち主として、橋本スミ子と奇異な對照を示してゐる。

「若い人」は、ミツシヨンスクールを背景に、若い先生である間崎と、彼と同期に赴任した女子大出の女教員橋本スミ子が、江波恵子といふ學生をなかにはさんで、若い感情と生活とを露骨な角度から躍動的に照射させた小説である。

男友達のおほい母親から、父親といふものを知らずにそだてられた江波恵子は、母がさうであつたやうに、感覺と理性を、「白濁した血の流れのなかに喪失」しやうい性格の女として、人生にたいしても、特定の立場や信條をもつこともなく、つねに、異常な心理と極端な行動によつて早熟に自己を表現する少女であつた。

ちやうど、間崎が、五年生の作文を受持つたとき、同一の課題で書かれた「雨の降る日」の文章のなかに、マスを無視した達筆な走り書きで、自己と、自己につながる血縁の運命を、はげしい呼吸で語つてゐる少女の心の記録のあるのを發見して、にはかにその書きぬしに興味をよせ

るやうになる。少女とは、いふまでもなく江波恵子であつた。

間崎が江波恵子の名を知つたのは、赴任後まもなくであつた。職員室の話題にのぼる江波は、ひどい我儘者で、よく學用品を忘れる、ぜいたくな所持品をもつてくる、寄宿生であるにもかかはらず遅刻早引がおぼい、教師に理窟をいふ、そのくせ頭は素晴らしくいい、といったふうな、教師の側からは、もつともあつかひにくい生徒とされてゐる、大柄で美貌な少女であつた。彼が、江波の性格に興味をもつやうになつたのは、作文を見てからのことであつたが、江波は、そのときすでに若い教師である間崎に、他の女生徒とはちがつた注視を、心の片すみに感じてゐたのである。しかし、思つたこと、感じたこと、また考へたことを卒直に自分の心情として表現できないこの少女は、間崎にたいしても、つねに、嘘ともほんともつかない危険な所作をふるまつてゐた。彼女は、事實をみとめるまへに、事實以外の事實を信じようとする性格にかたむいてゐた。自分の心に訴へる欲求を、素直に自分のものとして受け容れることのできない女だつたのだ。だから、わづかでも自分といふものを縛りつけるやうな事態に直面すると、おどろくべき速さで身をかはしてしまふのである。少女らしい機轉といへば、いへるのであるが、反面から考へれば、

意識的な圖太さとも思へるほど、理解しがたい態度を時と處に應じて示した。このとらへ難い江波の「無邪氣とも太々しいとも」つかない表情にたいして、作者は、「そのどちらかに決めやうとすれば、かへつてそれが嘘になる紙一重の危険なスタイルを易々と自分のものにしてゐる不思議な少女」だといつて、つぎのやうに性格を指摘してゐる。すなはち、「どんな大人の言葉を語つてもしつくり身についてゐる代り、自分の立場といふものを恐ろしいほどに持たない、従つて彼女の語る言葉、思想は、悪靈のやうに黒い翼をはためかせて、大氣の中を浮遊して死滅する」と。

このやうに作者によつて語られてゐる江波は、言動と行爲が心理的にもまるで統一されてゐないといふ點で、あるときには性格をとらへることさへ困難に思はれるほど、矛盾にみちた態度を示す少女なのであつた。

間崎が彼女に興味をもちはじめたのも、たしかに、このけたはづれな生活態度にあつたことは事實だが、しかし、それは時間の経過にしたがつて別の感情におきかへられてきた。だが彼は、江波とのあひだに個人的な交渉が生じてからといふもの、「疲れた時、寂びしい時、江波の姿が雲のやうに心をかげらすのに氣づいて顔を赤くすることが屢々あつた」が、それを男と女をあひだ

に生じた戀愛感情として、素直に受け取らうとはしなかつた。教師であるといふかたくなな限界が、江波を、いつも子供っぽい學生以上に評價できなかつたのである。したがつて、「君が女學生だなんて可笑しな事に思はれる」などと、のしかかるやうな感情で江波の耳もとに囁いてゐながらも、一ばうでは、彼女にたいする心情を、「戀愛だとは思はない。繪でも文學でも人間でも、頽廢的なものに心を引かれる自分の傾向を、平素から極力警戒する意味で、江波に對する關心も、他の生徒にみられない成熟した一つの性格に對する興味に過ぎない」といふ風に、心の大半に喰ひこんでゐる感情にたいしても、彼は、きはめて傍觀者的な態度しかとれなかつたのである。

これは、卒直に自己の心情を表現できない江波のかたよつた人間態度に共通する一面でもあらう。彼の教師といふ立場にたいする必要以上の固執は、反面からいへば、いつはれる遁辭の合理化かもしれなかつた。すなはち彼の、強ひて教師だと考へるところに、戀愛感情を能動的に生活化することのできない脆さが潜んでゐたわけでもあつた。この間崎の江波にたいする心的態度は、同僚の女教員である橋本先生にたいする感情の交渉のなかにも、明瞭なすがたであらはれてゐる。たとへば彼の橋本先生にたいする興味が、理性的に行動する自分の意志に一致する女として生

じた感情であるにもかかはらず、その感情をたんに、興味の對象として遠くから楽しんでゐる點などがさうである。感情的に生活する江波と、理性的に生活する橋本とが、二つの性格として彼の興味の對象になつてゐるにすぎないのであつた。感情と肉體とが、女らしい習性ではたらいてゐる、そのはたらきを、彼のばあひは、戀愛感情とは別のものとして楽しんでゐるといふことが、彼の女性にたいする接近の特徴的な心理でもあつたわけだ。だから彼は、江波と橋本を、女性として好んではゐても、そのどちらにも積極的に自分の感情を賭けようとはしなかつたのである。つまり、なりゆきにまかせるといつた消極的な生活態度が、彼の行動や意志をいつも不徹底なものにしてゐたのだ。この間の消息を傳へるものに、江波とのつぎのやうな會話がある。

——先生、私は私のことを心配してくれる人があると、その心配は私のためのものでなく、その人自身の娛みのためではないのかしらと疑ぐる癖があつて不可い。例へば、或る人にとつては道徳的な娛みであり、他の人にとつては別な目的を満す娛しみではないかしらと思ふの。そして私は自分をそんな餌食にされたくないと思ふんです——

——そりや僕の場合も、自分の娛みのために君に關心を抱いてゐるといふことは確かだ。然し、その娛しみの性質によつては強ち非難さるべきものではなく、寧ろ賞讃されていいものではないかと思ふ。僕の場合がさうだと云ふんぢやない。一般論としてだね。

——どんな場合がさう？

——君の考へ方でいへば、娛しむだけのものを自分も失つてゐる場合がさうだ……然しそれよりも、娛しむといふことを許したり許されたりする所にはじめて人間の生活が成立つんぢやないかと思ふ。個人だけでは生活がない。第一君がこの世に生れ出でたのも、君自身の意志によるものではないし、君が他人に對してどんな態度に出ようと、行きずりの人々が、ああこの子は美しいとか、一寸鼻が高いとか、その他いろんな感じをうけるのを君自身はどんなにしても防ぐことが出来ない譯だからね。

——フフ……では先生は自分が娛しむだけのものを自分の方からも支拂ふといふ愛し方が出来になりますか。

——出来ませんね、僕は。僕には盗み喰ひして自分を太らすといふ愛し方しか出来ない。

ここでもうかがへるやうに、間崎の知識人らしいこのするさは、二つの意志の結合のなかに生れる結果よりも、むしろ、結果のない過程だけを享樂しようとしてゐるのである。

この點で橋本スミ子は、彼とは反對に、最初に目的なり意圖なりを設定して、そのなかに實踐をあてはめてゆかうとする性格の女であつた。戀愛といふやうな特殊な對人關係にたいしても、「人と人が結びつくのに、弱い暗い面からしてはならない。明るい強い面から入らなければならぬ」といつた具合に、一片の感情をも論理の背景なしには考へえない性質なのである。たとへば間崎が、角ヲ矯メテ牛ヲ殺スといふ風の格言で、彼女を評したとする。と、彼女はそくさに格言と實生活のあひだに横つてゐる不合理な關係や摩擦を楯に反撥するし、感情的にも好めない口吻でいふのである。

——でも私は一體に古い格言など好みませんの。その場限りに都合のいいことを云つてゐるだけで、一貫して我々の生活に責任をもつてくれないと思ひますから……。私は科學的なもの

でなければ信頼する氣になれませんわ。一ダース位の重寶な格言を準備しておいて、それを世渡りのポイントの上に使ひわけして、したり顔に暮してゐる世間のエライ人達を觀てゐると、氣が重くなりますわ。あんな瘡蓋のやうな思想が、社會の表面を被ふてゐる限り我々の人生は何時まで經つても明るくも正しくもならないのです——、あなたはさうお感じになりませんか。

かやうに彼女は、到達された觀點からのみ人生や生活を測定しようとかんがへてゐたのだ。だから、なりゆきにまかせて生活を設計してゐる間崎とは、その生活態度においてまったく立場を別にしてゐた。しかし、人生態度が極端に異つてゐるといふ意味では、橋本よりむしろ、江波の方が間崎とするとよく對立してゐる。橋本と間崎は、物の觀察の仕方とか認識の仕方にくひ違ひはあつたけれども、人間感情のうへでは、粗野な行動に直接する江波よりはるかに共通點があつたわけである。だがそれにもかかはらず、間崎は、江波によりふかく興味をもつてゐたし、また感情的にも江波の方が彼の心情をより多くとらへてゐた。

これは橋本が教養がたかくて、江波が低いといふ單純な理由からではない。男の共通的な情緒

として、肉體に即した、嗜好を思想より低いものだとして輕蔑する形式的な橋本の人間態度が、男性としての間崎の肉體のどこかでつよく反撥してゐたからにちがひない。

間崎にしても、認識のすぐれてゐる點で、思考判斷の冷徹な點で、女としての橋本を尊敬してゐたし、また執着さへもつてゐたのであるが、女の肉體をきりはなして教養なり才能といふものを評價するとなると、彼女の能力がどれだけ彼を驚かすことができたであらう。つまり彼女が、一個の女性であり、そして肉體と感情とが、女特有の習性からでてゐるといふ點で、彼女の能力は一そう双のきしむ果實のごとき密度をもつてゐたのだし、またさうであつたればこそ、男から特別の關心もよせられたわけである。だから肉體に即した嗜好を彼女が否定するかぎり、男の心情は當然彼女をはなれてもゆくし、感情的にも親しめなくなるはずである。

江波にとくに興味をもつた間崎のばあひも、個人的な好惡感とは別として、男一般の共通心理を間崎らしい形で表現したまでのことであらう。江波は、彼の下宿へも惡びれず行つたし、彼もまた、江波の家に厄介になつた。その間の感情の経過にしても、おたがひに戀愛關係の自覺に立つて接してゐたわけではなかつたが、おたがひの若さのなかにある性格を離れた感情の欲求が、お

たがひの感情をたたかひとらうとする點で、二人の生活を樂しませてゐたのかもしれない。享樂的でもあつた。享樂の對象にされたくないといふ江波と、享樂するために關心をもつてゐるといふ間崎が、たがひの立場と性格の垣を自覺しながら、感情の遊戯をつづけてゐたのである。ともに没頭できなかつたといふ點で、それはたしかに近代的心理の遊戯であつた。したがつて、間崎が、最後になつて眞剣に江波と結婚しようと考えたとき、この少女の口から以外な宣告がくだされるのである。

——先生の卑怯者！ 私先生に言つたぢやありませんか。「私先生に願ひします。先生が私について考へて下さることがいつも私を立派にし私を美しくしてくれることでもありますやうにつて……、目先のいたはりや子供扱ひの方便を排して、それが現實にはどんな苦しい負擔を負はせる結果になつても構ひませんから、いつも私を眞人間に鍛へあげてくれる嚴しいほんとの愛に満ちた考へが先生の胸の中に宿つて居りますやうにつて……」それから先生は私をどんな人間にしてくれたでせう？ 授業時間中に狐憑きのやうに手を擧げたり、國語讀本の表紙の意味を尋ねたり、休時間毎に臆面もなく職員室に入りこんだり……、一生懸命にならうとすればするほど、そ

んな馬鹿げた行ひしか出来ない人間にしてくれたのです。そんなにも惨めな人間に——、それが先生の愛だつたのでせうか。先生は私を一番スポイルする方法で私に觸れたのです。先生は弱いんです。狡いんです。卑怯なんです。——間崎先生、私はこんな惨めなことを云はずにお別れしたかつたのです。でも先生があまりしつこくつけまふものだから……。私でも先生を恨んだりなんかしてませんわ。第一私先生のことなんかすぐ忘れてしまふと思ふの。男といふ概念だけを弱く疲れた肺活量でゼイ／＼と呼吸してゐるだけで、個々の人間に對しては一切無分別なの、ママのさういふ生活を私も間もなく受け継ぐことになるんだわ——。間崎先生さやうなら。私これからとても楽しい生活に入るみたいなきがしてゐるの。

かくて間崎は、結論なしでは愛情さへ肯定できない性格の橋本と、默契らしい默契もなくあたらしい關係へはいつてゆくのである。

「若い人」に描かれた、このふたりの女性の性格は、相互に異つてゐるといふ意味では、まったく兩極に立つた性格ともいへるのであるが、しかし、感情の傾斜のなかに、肉體も魂も平氣で投げこんでゆける危険な生活態度の江波が決斷のとぼしい男性をふりはなしてゆくのに反し、思慮

と分別をわきまへた理性的な橋本が、かうした男性の結末に終止符をうつといふ現象は、歴史的に植ゑつけられた傳統と、あたらしく咲きでようとする女性の理知との混亂したすがたを反映したものではなからうか。さぐりがたいやうにみえる、このやうな矛盾した心理と行動の分離は、「寢園」の奈奈江にもあつた。こゝに、近代人間の悲劇がよこたはつてゐたのである。

早熟で生理的な芽生えに放浪するやうな恵子の頹廢のなかにも、めざとい功利心と、おのれの生命をかばふ慧知の發芽があつたのであり、知性の形式主義にとらはれた橋本先生にも、それをくつがへすやうな生理的な人間の命が、脈たかく燃えてゐたのである。はじめから環境的に破綻しかけてゐる異常な恵子の性格は、間崎とともに心理の二重性にたはむれてゐる。こゝに近代感情が素朴さをうしなひ、意思の決定にみはなされながら生きる、放浪のすがたがある。そして、橋本先生には、思想を實生活に滲透させえない、頭でつかちな近代女性像がながめられる。ともになんらかの二重の分裂に、みづからの生命をよこたへてゐることにはりはない。ともに、近代の變化と流動のはげしかつた社會生活の環境がうんだ畸形の性格であり、人間ほんらいの潑刺たる意思と、統一された感動の悦びとにみはなされてゐる。いはば、人間の自然性のゆがめる姿

であり、そのゆがみの悲劇を、表面的には、いかにも遊戯的にふるまつてゐるかのごとき印象をあたへるところに、彼女たちの二重の過失があつたわけである。

しかし、まへにも述べたごとく、彼女たちをも否定的にのみかんがへてはならない。發展する歴史の形を變へる混亂のなかにはさまれて、その心理の二重性や、肉體と心理のくひちがひを必死にたゞかはせつゝあつたのだから。たとひ、彼女たち自身が破綻したとしても、この二重性や素朴さの喪失は、歴史の發展とともにしだいに、たゞしい統一と、自然な意思の形成をはたしをへるやうにみちびかれてゆくにちがひない。そして、彼女たちの意識せぬ悲劇は、發展の過渡期の、その後のたゞしい人間的なあゆみを出發させる渦まきのなかでさけられぬものであつた。それは、まだ、影うすくなつたとしても今日も生きてをり、今日もおほくの反省をあたへすにはゐない近代心理の搖籃のすがたである。

Ⅱ 歴史の發展と女性の愛情

1.

「お前は他家の娘みたいに働けるわけぢやなし、病人は病人らしく食ふ物さへあればオンの字だ」と、母の言葉に押しつけられて、流行の着物も下駄も、働く人のみを買ふものだとかきらめ、油つけのない束髪とつぎの當つた着物で二年間をおくつてきたみさは、やうやく自分のみすばらしさを知る年頃になつてゐた。彼女は十九であつた。「穀つぶし」と、肩あげのとれたばかりの弟からよく毒づかれるほど、病弱の少女であつた彼女は、關節ロイマチスがもとで工場も罷め、天秤棒一本を種に働く父と、自動車工場へ幼年工として働きにでてゐる弟と、母の四人暮らしの家庭のなかで、二年といふ年月を病床におくつてゐたのだが、自分一人のために内輪のもめることを苦にして、金釘流の筆蹟で、履歴書も何枚か書いて送つた。しかし、どの會社や工場でも、いち

どは出てこいといふのだが、體格検査がすんでしまふと振りむいてもくれなかつた。むなししい努力と苦しみがつづいた。

あるとき、からだの調子をみて、何度かたいた職業紹介所の門をくぐつて訊いてみるのだが、所員から示される會社や工場は、どれもこれもがはねられたところの名前ばかりである。「いや、ある事はあるがね。煉瓦を造る會社なんだ。そりやあひどい労働でね、女工といふより女土方だよ。」最後に所員は、豫算にいれてない口吻でその名前をもちだしたのだが、彼女は必死になつてそれを引きとり「どんなに辛くても辛抱します。どうぞ、お世話して下さい」と、相手の苦笑するのにもかまはずに訴へるのである。

築業會社の女工として働くやうになつた彼女は、糊のかたい浴衣に兵古帯をしめ、辨當箱を抱へて女工たちの群にまじつて通ひはじめた。二年ぶりにきく家の者の笑ひ聲も、彼女にははれはれしく響いた。朝ごとあふぐ空も、ひろびろとした感じで眼に映つたし、足どりも軽かつた。働くこと、そのことが、病後の彼女には、金錢とは別に楽しく感じられたのであらう。だがその楽しさは、ながくは續かなかつた。「女土方だ」と言つた所員の言葉が、過激な労働をささへてゐ

る兩腕にひしひしとのしかかつて思ひだされた。月給袋をもらふ日 came。病後の全身が痺れたやうにひだるかつたけれど、——これで、みんなと同じ着物と、光つたハンドバックを買つて——とおもふと、救はれたやうに、彼女は胸を躍らせるのである。だが母に渡すと、早速佛壇にあげられ、空想だけがむごたらしくいつまでも残つた。それでも父は、骨折り賃だといつて、珍らしく白木の日和下駄を買つてくれたのである。

女工部屋の片隅にゐるときでも、「カラ／＼と野暮くさく鳴る」自分の日和下駄の音が、耳底を離れなかつた。おなじ門をくぐつてくる同僚たちの、美しく着飾つたすがたを見るたび、「女土方のくせに」と腹立たしく思ふのだが、やはり、「一度でもいい。あたかも髪をロールにして、流線型の下駄を履いて——」と、羨ましく心で思ふのである。だが二度目の給料日がきても、自分の身のまはりのものは、何一つ殖えはしなかつた。彼女は、悲しく思はないことはなかつたが、それらしい不満を口にしようとも思はなかつた。

「友達ノシマが、時々、暗い顔をして溜息をつくみさに「どうしたのさ。心配事でもあるの？」と訊くと、みさは、しまに縋りついて泣いてしまひたかつた」と、作者は書いて、つぎのやうに

言つてゐる。それは「第一に病氣も誰にも知らさずかうして働いてゐること。第二に、親が人並の服装をきせてくれないこと」それを彼女に話したかつたのであるが「第一は早く言へば身勝手なやうなものだし、第二は裏町生活に馴れた兩親は、總て裏町らしい生活に満足してゐる。それを裏切つて娘が、「表通り式」の眞似をすれば、妙な反感から「いけすかない」で片づけるのも無理のないことだし、結局、私は悲しいと他人に訴へても、どんな理由で悲しいのか説明のできないみさは、「うゝん、なんでもない」さう言つては頭を振るのだつた」と、みさの苦しい立場を作者は描いてゐるが、異性を知るやうになつてから、それはいつそこの切實さで、彼女にせまるのである。

職場で知りあつた若者のところへ遊びにいつたときにも、着飾つたしまが普段着の自分と並んで坐つてゐたことを、みさはいつまでも痛ましい記憶として胸にたゞみこむのであつた。それは、その若者ノシマが、職務怠慢といふあやふやな理由で識首された後のことではあつたが、彼女には、それさへ羨ましく嫉妬された。だが三月目へかかつた頃から、ふたたび最悪の状態がみさの肉體を蝕んできた。缺勤がつづくやうになつた。呪はしい病魔が、だんだんからだの自由を奪

ひはじめた。空業會社をやめようと決心した彼女は、そのからだの堪へられさうな仕事をさがし、是が非でも「穀つぶし」にだけはなるまいと覺悟を新しくするのである。

これは「煉瓦女工」の梗概だが、めぐまれない境遇にはたらく女性のもの悲しい心情が、そこでは惻々と讀者の胸に實感を訴へる。

異性を胸に描いて頬をほてらせる年ごろのみさととつて、「髪をロールにして、流線型の下駄を履いて」といふ希ひは、すこしも誇張のない少女の慾望でもあらう。また、職務怠慢といふあやふやな理由で減首されたにしろ、男と女とが親しく接近してゆく姿を、羨ましさうに嫉妬する姿も、男から聲をかけられる機會のなかつたみさには、一層みじめにおのれ自身の境遇に照らされて思ひだされたにちがひない。

ただ働くこと、そしてそれが、自分の希望としてなにつむくひられないで食住にかはつてゆくこと、悦びとしてではなく、家計を支へるおもひ責任として勤勞が年若い少女の兩腕にくひこんでくること、これが二年の間病床にゐたみさの、蘇生したときに直面する現實だつたのである。今日おほくの女性たちが職場に出てゆく姿には、かつてのやうな、お白粉かせぎや嫁ぐ日の準備

をととのへるための餘裕はみいだしがたく、彼女らのおほくには、一家の生計をさへる共同負擔者としての切迫した責任のおもさがかんじられる。

みさも、天秤棒一本をたよりに働く父と幼年工としての弟をもつてはゐるが、それによつて彼女が、病床にも安閑としてゐられない切迫した生活の氣流が、いつはりのない現實として、この少女のうへに重くるしくのしかゝつてきてゐるのを知らされる。

「悲しいと他人に訴へても、どんな理由で悲しいのか説明のいきない」少女たちの心情は、そのまま、家計を背負つてゐる娘の一人びとりに通する不幸でもあるが、ここには、女の獨立と勞働にたいする悦びは、むしろ、ゆがめられた形で女の生活を約束してゐる。とはいふものの、こゝには女性の勤勞への参加によつて、働くもののみがさづかる觀察力や、批判力のするどさと、的確さがあらはれてゐる。それは、一面に現代女性の感傷の喪失とか、抒情の荒廢とかいはれるかたはらに、うけうりの教訓や空想にたよらぬ素朴で、眞剣な理性の芽生えと現實のうごきにたいするたしかな批判力のもりがありとが暗示されると同様である。

女性の國家生産力への参加と努力が、同時に女性の前進をうながす契機となり、あかるい未來

の健康な形成に今日の女性の急速な自覚がもたらされつゝあることはあらそはれぬ事實であらう。

職場にはたらく女性たちが、家族や家庭をはなれたところから獨立した生活と自覚を擲んでゆくといふ常識にとつて、彼女たちと境遇をひとつにする女性たちの出發は、家庭をささへる力としての生活からたち向はねばならないのである。新しい日と新しい自覚は、巷に合言葉となつてあふれてゐる。しかし、巷の風のなかに立つたこれら少女たちの心情や希ひの現實といふものは、はたして男からの言葉を、そのまま受け容れるほど順調な経路におかれてゐると言へるだらうか。

「もつと物價高につれて昇給させて下さい。親をみなければならない責任上、生活にこまつてゐます。昇給することばかり祈つてゐます」

「夜勤をしても収入をふやしたいと思ひます」

「十年働いてゐても、新しい人と大した變らぬやうでは、あまり情けない」

「入社して二三年の者と六七年の者とが餘り差別がなく安いので、年功がたてば、たつたやうに上げていただきたい」

「日給が安い上に貯蓄といふものが引かれ、とるところが少く生活にこまつてゐますから、もう少し何とかして下さい」

これは工場監督官の報文に載つてゐたといふて岩上順一氏が引用してゐた少女達の聲であるが、このかぼそい叫びのなかにある生活や受難は、みさや、しまたちと軒を並べる家庭の娘にかぎられるのではなく、タイプを打つたり、ペンを走らせたり、算盤をはじいたりしてゐる年若い女性たちが、それぞれに擔つてゐる生活の聲でもあらう。そして、それを漕ぎ抜ける困難のなかに、今日の女性の國家生産力への参加も、現實へのめざめもよりはげしく回轉しつゝあるのである。つまり、歴史發展のエネルギーとしての女性の努力は、より大きく振幅をひろげつゝ、その責務はよりおもしろくのしかつてきたのである。

このやうな働く女性たちの姿が、重要な役割をもつてわが國小説史上に登場してきたのは、いつの頃からであつただらう。私はそれを知らない。知らないけれども、しかし、その遅い姿において、長塚節の「土」のおつき、伊藤左千夫の「隣の娘」のおとよ等の、明治期の農民文學にあらはれた女性のつよい意欲をわすれることはできない。

農民を描き、農村をかたる物語りのなかには、つねに、男と共にはたらき、男にまさる女性の姿が、なんの無理もなく描かれ、そしてそれは讀者の側からも、素直にうけいれられてきたのである。「隣の娘」の一節に、つぎのやうな場面がある。

——おとよさんは絶対に、自分の夫と並ぶを嫌つて省作と並ぶ。何事にも穩かな省作は、かう並んで刈りはじめると負けるは残念な氣になつて、一所懸命に顔を火の様にして刈つてゐる。おとよさんは百姓の仕事はなんでも上手で強い。にこ／＼しながら手も汚さず汗も出さず、綽々として刈つてゐるが、四把と五把との割合をもつてするより多く刈る。省作は齒ぎしり噛んで競ふてみても、おとよさんにかけては殆んど子供だ。おとよさんは微笑で意を通じ、省作のヌガヒを十本二十本づつ刈りすけてゐる。省作もおとよさんの親切には動かされて、眞底から好い人だと

思つた。おとよさんが人妻でなかつたら、その親切を戀の意味に受けたであらうが、生娘にも戀したことのない省作は、未だおとよさんの微妙な素振りに氣づくほど經驗はない——。

はげしい仕事にもめげず、うつくしい心情をもつたおとよさんのやうな、生活意欲と純真なところの女性のすがたは、現代農民文學のなかにも指摘することは困難ではない。

たとへば伊藤永之介の「梟」「鳥」にあらはれる女主人公たちや、和田傳の「沃土」に描かれるお銀などがさうである。

女性が男性にまさつた働きを示すのは、すくなくとも農村にあつては、めづらしい物語りではなかつた。それは、家庭に居残つてつましく家事と子供の世話をしてゐる女といふものが、百姓の生活の歴史には數へられてゐなかつたからである。しかし、都會を描いた小説の中に、女性が男性以上のはたらきと逞しい思考とをもつて登場してきた歴史は、いまだ、新しい記憶の出来事である。といふよりも、やうやく最近にいたつて作家達は、そのやうな女性像の完成にむかつて競ひ立つてゐるかに見えるのであるが、しかし、そこには因襲の名残や缺點に惱みつつある女性の暗い消極面と、うちかたうとするあたらしい積極面との生きた統一の姿として女性にとらへ

られてゐるとは言ひがたい。とはいへ、おのれ自身のために生きようとした女性の姿を通じて、現代女性の心理や生活意識や性格や思考の把握をこゝろざした小説を見ないといふわけではな

ら。たとへば丹羽文雄の「鬪魚」にしても「東京の女性」にしても、榊山潤の「春扇」にしても、間宮茂輔の「柘榴の花」にしても、眞船豊の「緑窓日記」にしても、あげればいくつとなくあるであらう。そしてあとで述べる石川達三の「母系家族」も、そのひとつとして、加へられる作品にちがひない。

附記 奮闘史的な女性と抒情の喪失——古來、女性の男をしのぐ活動に世間の眼をみはらせ、歴史の改造にあづかつた例は多い。しかし、わが國の小説にあらはれた例は、いや外國にも、それはまれなのではあるまいか。そのいみで、第十四回芥川賞をうけた芝木好子の「青果の市」にあらはれる主人公八重子は、推薦委員が口をそろへてけなげな庶民的女性の奮闘史物語だといつたほど、女性の男をしのぐ生活力の根つよさと、はたらくものみに宿るけなげなげみ心のみなざりが描かれてゐる。

主人公の女性八重は、いちど没落した青果問屋を再興しようとして、氣の荒い若衆に客をうばはれまい

と氣が狂つたやうに相手の胸に手をかけて啖呵をきつたり、騒々しい賣場で油断なく有利にセリ落す。はたから「少々キ印だよ」と笑はれるほど働いた。しかし、統制経済は、唇をかみしめて、結婚をあきらめ、女らしさをふりすてて、けなげに再興をはかつた仲買人の位置を容赦なく洗ひ流してゆく。周囲のものが、統制の轉回から、職場をかへるか、大陸へ雄飛しようとするやうななかで、彼女は、ともかく、「これからどうなるだらう」といふ不安にさそはれながらも、叩かれても叩かれても起きあがらうとする、勝氣な氣性と粘りを胸によび起して、緊張するといふ筋である。

このあら筋から、うかがへるやうに、彼女は、いはゆる奮闘史美談の主であり、家業の擔ひてとして、あるひは、生産の場面でも女性が、その全能力をふるふためには、「女らしさ」は自然に喪はれてゆくこと、いかに「女らしさ」とは、男だけを満足させる裝飾であつたかを知らせる。

今日の職業に進出した女性が、そして、すべての今日の活動する女性たちにとつて、女らしき感傷や香りたかき優雅な姿態はかへつて活動のさまたげであることを暗示する。男なみにはたらき、あるひは、奮闘的な生活の開拓にすゝむ女性が、今はおほいのであるが、彼女たちが、いかに過去からのひきづりの眼でなげかれ、わらはれやうとも、彼女たちは未來へと延びる新しい女性の先驅であり、新しい女性倫理の革新の擔ひ手であることはまちがひないのである。

このやうな、はたらく女性の女らしさのうしなはれゆく姿を、よく「抒情の喪失」などと非難し、さかのぼつた王朝時代の女性の感傷のうるはしさや、過去女性の優雅な精神をなつかしむのであるが、こんちの國家發展のむかふところ、女性をいたづらに過去の青蓮派の抒情にたはむれさせて置く餘裕はないのである。といふより、さういふ過去の抒情の喪失にかはつて、理智と感情のあかるく、たくましい昂揚が、あたらしい抒情と活動的な美を創造せしめてゆくのである。生活の實踐からはなれ、男の袖にすぎるための弱き心の表現としての、抒情や涙もろさは過去のものである。

しかし、いちめんには、この抒情や感傷の喪失が、女性を日和見主義や功利的にみちびいて、なんら人間のゆたかさをもかんじさせないといふ非難も、一應は事實である。もちろん、これは女性に限つたことではなく、青年もまたその憂ひに沈みつゝある。だが、それはどこまでも發展の側面の泥沼である。

この泥沼から追ひだすことは、もちろん必要であるが、この悪質な退化の面のみ眺めて、新しい女性の堅實な知性と感情のたはむれなきけなげさにも、新しい世代の成長をみなければならぬ。この新性格の歴史的な變化を、全體的にながめぬと、往々、否定にとらはれ、女性の生産力増強への参加をも否定する矛盾におちいるだけである。

2。

「母系家族」に描かれる幾人かの女性のうち、最上葵と鮫島まさ代とは、その性格や行動の點で、とくにみのがせない側面をもつた女性であるが、葵の姉として登場する恒美も、まつたく別な立場に立つてゐる女として、興味ある對照を示してゐる。

「母系家族」は、高村晞三といふ若い獨身の辯護士の經營する薰風寮を中心に、そこに住む子をかへた女たちの生活の生態を描いてゐるのだが、葵もまた、彼の秘書として働く女性である。

彼女はなにごとでも手際よくさばける娘であつた。薰風寮の仕事一さいを引きうけて、午前中は事務、午後は學校から歸つてきた子供たちの相手、夕方母親たちが勤めから歸つてくると、子供を順次に引きわたし、また事務の仕事をした。タイプも打つし、算盤もはじくし、幼兒のミルクの濃度から寮内の設備衛生、兒童の晝食の献立まで指圖し、そのあひだには高村晞三の秘書もつとめるといふ、多藝であり多才の娘であつた。彼女は、忙しいことには馴れてゐた。雜務を片

端から處理してゆくのが愉快であつた。どうかすると、歌をうたひながらそれも聲樂家のやうに聲を張りあげて歌ひながら、ときには笛さへも吹きふき仕事をしてゐた。

しかし、仕事はけつして楽しいことばかりではなかつた。あるときは置きざりにされた子供の面倒を、あるときは歸りの遅い母親にかはつて添寝を、またあるときは、病氣になつた子供の看護を、働きにでてゐる母親にかはつてしなければならぬのである。それでも彼女は、それをうるさいとも思はなければ、またたんなる事務として處理するといふやうな、冷淡な態度にも出たことはなかつた。ここに住む子を抱へた二十六家族の女たちは、それぞれの形で、不幸な人生を經驗してきた女性たちばかりである。看護婦となつてゐるあひだに醫師の子を宿した女。婚約を取消されたときにはすでにその男の胤を宿してゐた女。妻子を置いたまま女とゆくへをくらました男を呪ひながら子を育ててゐる女。身分がちがふといつて、生木をさくやうに男と引きはなされた女。夫に死別して子を抱へる女。かうした父をもたない子の母親たちが、ここでは懸命な姿で生きつづけてゐるのである。そして、彼女たちは、一樣に、再婚の日をそれとなくおもひ描いてゐた。

しかし、ときたま見合ひに出てゆく女はあつたけれど、子を連れてゐることが、どの女のばあひにも、相手の希望をもぎとつた。かうして見合ひから歸つた女はおなじことを口にした。

「やつぱり、子供があつては駄目ですわね。もう見合ひなんかしませんわ。これでもう三度。もう懲りたわ」重い吐息をつきながらいふのである。どんなに努力しても、どんなに希望しても、子供があつては駄目なのだ。かうした結論が、何度か見合ひを楽しんだ女たちの胸裡には、消しがたく刻まれてゐたのであらう。

女には子供があつてはいけない。男には子供があつても女の方が我慢する。世間では、それがあたりまへのことだと信じられてゐる。不合理な話ではあるけれど、かういふ考へはなにも新しい発見ではなかつた。それは男性がこの社會にもつてゐる既得權益なのであり、彼等が、封建時代のながい努力によつて、それだけの権利を獲得し、彼女らはながい忍従の生活で、この大きな権利を失つてしまつたのだ。

ある女は子供を置いて結婚に走つた。「行李の中には女の子の着物と人形と繪本とが入れてあり、その上にハトロン紙の包みをのせてあつた。開いて見ると紙幣が二枚あつて、その下に子供

と一緒にうつしたかの女の寫眞が一枚、盛装して、美しい顔を向けて」手紙と添へられてゐる。泣きながら逃げて行つた女の心盡しであらうか。寫眞を手にして墓は考へる。かうした例がはじめてでないことを知つてゐるかの女に、作者はつぎのやうに言はせてゐる。

「親戚の人か何かで、子供を引きとつてくれる人があれば、何も棄てては行かないでせうし、本人を探し出して見ても、結局、親も子も餘計に不幸になるだけぢやないでせうか。あの人で見れば、かうしか出来なかつたと思ひますわ。——今野さんは子供の着物や人形なんか置いて行きましたけれど、その中に二人で撮つた寫眞が入れてありましたの。ちやんと名前も書いて。……それが、今度めぐり遭つたときに親子の證據になるだらうといふ氣持ちぢやないでせうか。あの人やり方は我儘でせうけれど、そのやり方を憎む前に、子供を連れた母親といふ境遇を、もつと何とかして上げなくてはいけなかつたのだと思ひますわ。今野さんのやうな人は、今後も、きつと幾人か出てくると思ふんです」

不幸な女たちにまじつて働いてゐた彼女は、女であるといふ存在と自覺のなかで、けつして他人事ではないと感じてゐた。これは、つぎのやうに作者にかゝられてゐる高村晞三の感懐が、墓の

解きがたい疑惑を言ひあててゐるやうにおもはれる。

「今野つね子さんの事件は、さつきあなたが言つたやうに、彼女一人の問題ではなくて、子を連れた母親全體の問題だ。今後、鮫島まさ代も出て行くかも知れない。西久保とよも出て行くかも知れない。出て行く理由があるんだ。その理由は、子供を離れなくては自分の仕合せが掴めないといふ考へからだ。僕の母の時代には、子供を離れて母の幸福はないと思つてゐた。幸福の性質が違ふんだ。結婚生活にはいつて幸福を掴みたい。そこで再婚のためには、子供から離れなくなる。——それなのです。今のやうな荒々しい時代には、經濟上の變動がはげしいし、道德觀念は變化して來たし、結婚生活といふものが、昔のやうに平和には行かない。日本古來の家族制度が日々に崩壊して行きつつある。この状態はほとんど不可抗的な大きな流れになつて進行してゐる。そしてかういふ時代には、男も不幸だが、女は一層不幸です。家庭には安住できなくなる女が多い。女も働かなくては生きて行けない。その場合に子供のある女はどうすればいいんだ。……嵐を凌いで生きて行くためには、手足まとひなものは棄てなくてはならな

い。現代ほど子供を連れた多くの女がさまよつてゐた時代はなかつたらう。寮の人たちは大部分それです。かういふ見方はかなり極端だが、この傾向がこれから一層ひどくなることは考へられる。必要なのは、母子保護法を強化すること、徹底的な方法で育兒院を完全な、大きな國家的な組織のものにして、子供を連れた母親を子供から解放してやること。大事なことは子を連れた母親に自由を與へることだ。そして一旦解放された母親たちが、うまく自分の幸福を見つけ出すと、また子供のところへ歸つてくるだらう。それでいいのだ。そこまで來なくてほんとうではないと思ふんだ」

しかし、高村が強調すればするにしたがつて、結婚にたいする不安とおそろしさが思はれてくる。彼女は、結婚によつて生ずる女の不幸をかんがへた。薫風寮に生活する女たちを顧みるたびに、切實なふかさでそれは思ひだされるのである。

私はいやだ。私は獨りで生きてゆくのだ。結婚しなくとも、女の幸福はなくはない。仕事だ。社會的にも有意義な仕事を見つけて、そのなかに全身を打ちこんで行けば、立派に生き甲斐はあ

るはずだ。男にたよらうとする、そのことが女を不幸にしてゐるのだ。頼らなければいい。たよらなくてもすむだけの勉強をして、謹嚴な生活をしてゆけばいいのだ。さう思ふ心の下から、それがどんなに重大な覺悟であるかが感じられ、うかんでくる高村の幻影を追ひはらふために依怙地になつてゐる自分の姿を、びつくりして見返したりするのである。生きぬくための意思のつよさが愛の流露をこぼむのである。これといった形で愛情を表明したことはなかつたけれども、それだけにまた彼女は、高村からはなれたときの自分を想像することは不安でもあつた。

しかし、離れねばならぬ事態がふりかかつてきた。それは肉親といつてただ一人の彼女の姉が、ある會社の重役にふみ躪られたのを訴訟しようとして高村に頼んだところ、その重役こそ高村の兄であることがわかつたからである。

姉の恒美は、なにごとにも従順な女であつた。誰にでも負け、どんな事態にも負けてゆきながら、負けたなかに自分から小さな仕合せを見つけてゆく、つましくあはれた女であつた。電氣軌道會社の雨宮章爾といふ常務の祕書として働いてゐた恒美は、たまたま會社の園遊會のとき、雨宮のボートに乗せられ、不意の求婚を迫られるのである。

「僕には子供が一人あるし、こんな事を君に云ふのは失禮かも知れんが、もし君の方で厭でなかつたら會社をやめて、うちへ來てもらひたいと前から思つてゐたんだがね」

ただ一言の愛情の経過もなしに、突然雨宮は求婚の意志表示をしたのである。

「でも、あんまり突然で——」

「さう、いま君の返事をきかうといつても無理だらうけれど、一つ考へてみてもらへないかな。今日でも夕方からうちへ寄つてもらふと都合がいいね」

さう云ひ出すともう彼は、恒美の思惑などてんで振りかへりもせず、ぐんぐん自分の思ふままに振舞ふ男なのである。そして結婚するといふ約束は、雨宮の方で勝手にきめ、恒美は雨宮の胤を懐妊するのである。そのあひだ恒美は、なんの抵抗もせず、雨宮の意思のうごくままに引きまはされ、ひそかに來るべき幸福を胸に描いて持つてゐた。しかし、雨宮が恒美に求婚し、そして、恒美は彼の胤を宿して何ヶ月かして、やうやく彼女の決心がさだまつた頃には、彼のところへは

別な結婚話もちこまれてゐた。そして雨宮は、それに承諾をあたへてゐたのである。

かうした事情から恒美は、會社に勤めることもできなくなつて、アパートに引き籠つて、早晚生れる子供の準備を妹にも知らさずにするのであるが、とき折訪ねてきた葵がそれを知つて憤る。そして破約した雨宮に抗議を申込むのであるが、彼は、「戀愛は成立したが、結婚は成立しなかつた。これは世間にさらにある事なんですよ」と言つて、うけつけぬばかりか、むしろ、女の弱點を女自身が自覺しなかつたことを女の不幸の原因であるかのやうに言ふのである。訴訟を起さうとして、葵が高村に頼んだのは、かうした姉の破約を法律の力で制裁できるものならと考へたからであつた。だがそれは無駄であつた。といふのは、民法の原則として、結婚すべしといふ判決は、いかなる場合にもあり得なかつたからである。そしてまた、その相手が高村の兄であつたことが、葵にとつては二重の苦しみにもなつた。姉のために飽くまで雨宮と争ふとすれば、間接には高村と争ふ結果になる。高村が兄にそむいてまで、自分ら姉妹に味方するとは考へられない。

こんな事情から葵は、高村の許を辭したのであるが、姉の恒美は、葵のかうした處置を心から喜びはしなかつた。自分だけ諦めれば一さいが圓滿にをさまるのである。と、迷惑のひろがることを却つて怖れてゐた。だから妹が雨宮に談じこむといつたときには、顔色さへ變へて引止めたのである。このつつしみぶかく足許だけを見つめて生きようとする恒美に比べて、おなじ小説に登場する鮫島まさ代は、その性格からしてまつたく別な立場をとつてゐる女である。

3.

「獨身の青年のなかに理想の人なんかゐやしない」といつて、わざわざ妻子のある男を戀愛の相手に選んで、子供ができてからも自分を誤つたと考へずに、相談にいつた辯護士（高村）に求婚するほど、積極的に行動のできる女である。彼女は、男を知るためには、酒を飲む社會を知らなくては駄目だと思つて酒をのむ稽古をしたといふ。そして酒場へも料理屋へも待合へも行つてみたといふ。「それで私のつきあつた二十人のうち、十六人までは私に求婚して來たんです。私は

みんなことわつてしまつたんです。そのために、ある青年は私の眼のまへで毒藥の包みを見せて、結婚してくれなければ死ぬと言つて脅かしたりしたんです。だけど、そんな人たちと結婚するなんて、馬鹿々々しくつて考へられなかつたんです。私がこの人なら結婚してもいいな、と思つた人が五人有りましたけれど、調べてみると、みんな家庭をもつた人なんです。いくら探したつて獨身の青年のなかに理想の人なんか居やしない。みんな輕薄で、ちつとも落ちつきがなくて、口先ばかり達者で、それだから私は、もう仕方がない、自分の生涯を託するに足る人なら、家庭のある人だつてかまふもんか、といふ氣になつたんです。勿論こんな考へは無茶ですわ。無茶は知つてゐますけれど、獨身の青年なんて、凡そくだらない存在なんですから、已むを得ないと思ふんです。かやうに、觀察された現代女性の立場と、功利的ならざるをえぬ事情のなかで、彼女は芽ばえた愛情の獨自な理性にもとづいて、妻子のある男の子を生む。しかし、その處置について高村のところへ相談にゆくと、もう彼女は、高村の落着いた物腰や冷靜な素振りが氣にいつてしまひ、はては結婚してくれとまで言ひだすのであつた。

子を抱へて働くことのできない女の一人として薰風寮へはいることをすゝめた高村は、自分の

好意が結果からみれば迷惑をうける勘定になつたので、内心にが／＼しく思つてゐたのだが、相手の女は、そんなことに一向頓着なく、ますます執拗につきまといつてきた。まさ代には、つましく子の母として暮すことなどはたうていできなかつたのであらう。したがつて高村の勸告など、むしろ、自分を避けようとする男の遁辭くらゐにしか思へなかつた。彼女は、女としての生きかたを素直にすすめる高村にたいして、つぎのやうな意見をのべてゐる。

「私のやうな女には、再婚以外に何の幸福があるでせう。子供を育てるために一生を捧げるといふことは知つてゐます。でも、それだけでは満足できませんの。それは當りまへぢやありませんか。子供に一生を捧げるといふのは、男にとつては都合のいい言ひ分ですわ。女は子供さへ養つてゐれば、無事だからさう言ふんでせう。子供の父親は知らん顔をしてゐるのに、母親だけは一生を捧げるなんて、そんな身勝手なことつて有るでせうか。私は意地にも再婚してやらうと思つたんです。再婚といふだけでなく、今度こそ本當にいい結婚をしなくては、私といふ女の生涯が意味ないと思ふんです。私は間違つてゐないと思ふんです。私はひねくれたり、

ひがんだり、自暴自棄になつたり、身もち崩したり、そんな愚かしいことは決してしませんわ。それは女の敗北ですからね。私は立派に結婚して、良い生活を築くんです。それよりほかに私の本富の生きかたつてないやうに思ひますから……」

しかし、このやうに積極的な行動と、はげしい意思で生活の地盤を築かうとしてゐるにもかゝらず、まさ代は何一つ仕合せらしい仕合といふものを探りあててゐないのである。結婚にたいしても独自の意見をもつてゐるし、生活にたいしても一定の計量を忘れはしないのに、結果としてあらはれてくるものは、意味のない破綻ばかりである。このことについて作者は、それが彼女の行き過ぎた性格からだとして、つぎのやうに高村に言はせてゐる。

「僕は最初からさう思つたんだが、あなたの考へ方、すること、すべて極端だ。行き過ぎてゐるんです。それは正しいと信ずるからやりとほすのでせうが、世の中には、正しいことでも控へ目にしなくてはならぬ事が澤山ある。それをあなたは知らないんだ。獨身の青年が愚劣だからと言つて妻子のある男に結婚を求めたり、男性の生活を知らうとして一緒に酒をのみあるい

たり、それは女としての行き過ぎですよ。だからあなたの偉さや立派さを充分承知してゐても、結婚したいとは思はなくなる。男つてさういふものだ。女に對して多少の愚かさを求めるんです。だから女はその賢さを控へ目に出さなくてはならない。あなたは男のやうに縦横無盡に自分の考へを實現しやうとするから、世間の男たちは、あなたを避けて通る。あなたは人前に出て恥かしいと思つた事がありますか。大抵の女は無意識な羞恥を感じてゐるものだが、あなたはちつとも恥かしがらない。だからおとなしくなれないんですね。恥かしがらないといふのは自信があるからでせうが、あなたの持つてゐる自信なんて、獨りよがりな自惚れにすぎないぢやないですか。ほんの少し頭がよくて、ほんの少し他人より勉強したといふ、ただそれだけの事ぢやないですか。そのうぬ惚れを棄てるんだ。あなたは心驕れる女ですよ。その驕りがあるから大ていの男はあなたを敬遠してしまふんです。それがわかつたら、あなたは今よりすつと良い人になるだらうと思ひますね」

このやうに作者は、まさ代をとほして、まさ代にちかい型の女の生活態度を批評してゐるが、

ここで思ひゑがかれるのは、雨宮章爾の子を産みながら死んでゆく恒美といふ女性の性格である。彼女は、けつして行きすぎた女ではなかつた。いやむしろ、控へ目であることが彼女のばあひは缺點であり、敗北の契機をみちびいたと思はれるほど、一さいが保守的であつた。彼女は鮫島まさ代のやうに、進んで男性を研究したり、理想の人を探しあるいたりする、さういふ冒險心をまゐるでもたかつた。あるひは、戀愛をする能力さへもなかつたかも知れない。命をかけて愛することの危険にまづ恐怖して、戀愛をさへ敬遠してしまふ。さういふ臆病な女であつた。したがつて、まさ代と反對の立場を信條として生きる女性といふことができるが、しかし、行きすぎない恒美も、結局、世の多くの不幸な女がひきすつたとおなじ、重い足枷に足をすくはれねばならなかつたのは、いつたいどうしたことか。

もつとも、以上にかゝげた高村の、まさ代の批評は、今日の女性の破綻を指摘してゐるとともに、いまださめざる男性の因襲的な女性觀をも曝露してゐる。「女に對して多少の愚かさを求めるんです。」とか、「女はその賢さを控へ目に出さなくてはならない。」とか、すべてふるい女の驕けをこのみ、女性をたんなる生活の慰安としてながめる男がいまだに壓倒的に存在することをも

のがたつてゐる。とともに、高村の、そしてそれに代辯せしめた作者が女性の新しい慧知の方向に同意しえぬことを明瞭にしたものだ。つまり、女が男のやうに縦横無盡に自分の考へを實現しようとするれば、現代のおほかたの男性の愛情はえられないとさとするところに、作者の因襲をまもる和解の表情がかくせないのである。

望みすくない故にうつくしいといはれてきた女の美德といふものは、言つて見れば、女の敗れてゆく姿におくる男の感傷ではなかつたか。行きすぎない彼女は、はじめて知つた男にはすてられ、すてられたことを憤りもせず、死の床でその男の名を口走りながら生を終へてゐるのだが、行きすぎたまさ代も、行きすぎない恒美も、女として滅びてゐる事實が意味ふかく女の弱點をも語つてゐるのは、なぜであらうか。男と女との關係を考へるとき、男はいくら叩きつけられても、肉體的にほろびるといふ例はあり得ないが、女の場合には、肉體も生命も、一切のものが深いつなかりで敗れるのだ。女にとつては、戀愛の破綻が直接に生命に觸れてくるのである。氣持で生きることが望んでゐても、肉體が先にほろびてゆく。死んでゆく。恒美のばあひはそれではあるまいか。

きのふからけふに生き、明日にあこがれ、未來を夢みながら、よりよき實踐の意思をたくましく、歴史の發展に加はることが人間の理想であるならば、これまでの女性たちのおほくは、娘から妻、妻から母といふ生理的な展開のなかでのみ、生命の價値をせばめつゝあつたのではあるまいか。したがつて、愛情の展開も、よりおほく人間的に擴充されず、本能的な開花を中心につましくおこなはれてきたのであらう。

戀愛においても、母性愛においても、それは根源的には生理的なものの淨化の果に發展するものであつても、その豊富な展開と表現は、生理と肉體の限界を越えて、人間精神の多彩な開花をあふり、よりよき國家、社會の建設のエネルギーに變化しゆくはずである。「クレオパトラの鼻の高さが世界史をかき變へた。」といふふうの言葉も、卑俗には女性の容貌の魅力を誇大視した形容ではあるが、これをよりひろくうけとれば、戀愛情熱の豊饒多彩な發展が、歴史の發展にかくかくはることの原理がおもひうかべられるであらう。そして、事實、女性の愛情は、ながい

歴史のあひだに男の個人的生命の昂揚を左右し、それは擴大されて歴史的な人間の歩みにもすくなからぬ功罪をもたらしたのである。しかし、その愛情の拍車は、あたへるものと、うけるものといふ過程をたどり、女性はいつまでも従順につましく捧げるのみで、たがひの共同愛による合唱の聲とはなりがたかつたのである。

因襲の歴史は、いよいよ愛情の展開を生理的な面にひきずることにをはり、無意識のうちに、その作用の自然な素材さをうしなはせるやうな結果さへみちびいた。ほんらい、うるほい多くあるべき母性愛すら、女性の歴史にあらはれるひとつひとつの舞臺面では、さまざまな桎梏となり、女の生長の自然をさまたげるものとなり、そして、全體に生物的なものに限定されがちであつた。それゆゑに、女性は愛情を生命としてゐるものとみなされながら、その愛情の歴史は、いよいよ自分本位のかたちで、主觀的にせばまり、つひに、おのれの身邊の瑣事にのみ心をうばはれるやうな傾斜を表現するにいたつたのであらう。「母系家族」の恒美のやうな女性の生涯をかんがへるとき、そのやうな事情が切實な實感でよみがへつてくるであらう。

しかし、それならば、鮫島まさ代の生活態度にあらはれてゐる行きすぎとは、なにを意味する

のであらう。女らしさのないことが原因だと言はれてはゐるけれども、男がもつとも好い條件で女をえらぶと同様、女もまた、戀愛や結婚にたいしても理想をもつし、選擇もしたいのが當然であらう。たとへ、男を研究するために、待合へいつたり、酒場や料理屋へいつたのがよくないとしても、「獨身の青年のなかに理想の人なんかゐるやしない。」と、女をして考へさせるのは、かならずしも女の我儘な獨斷だとばかりも言へない状態に、男自身の感情や思考が立たされてゐるからではあるまいか。

「いくら探したつて獨身の青年のなかに理想の人なんか居やしない。みんな輕薄で、ちつとも落ちつきがなくて、口先ばかり達者で……」と、まさ代に批評されるやうな、生活の激流にたゞよはされながら、なんらの自信をも培へず、日和見主義の方向にだれこんでゐる青年を對象としたとき、戀愛や結婚をあこがれる女の意思も、おのづから用心ぶかい計算に没頭しなければならぬのは當然である。

したがつて、男の側からばかり一方的にそれを非難するのは女にとつて迷惑であり、また行きすぎといふ理由から敬遠するのも、男の共同愛への衰頹と因襲へのあまへを表明したにすぎない

とも思はれる。

「母系家族」の作者は、「愛情を計算することは、一番利巧なやうで一番愚かな生きかたであつたかも知れない。最後には愛情を信するよりほかに生き方はないのだ。あらゆる計算のはてに、ただ残るものは、男の心を信じ自分の愛情を信する、それだけしか無い」と言つてゐるが、男の心と自分の愛情とを信じた結果として、實際に残されてゐるのは鮫島まさ代であり、最上恒美であり、薫風寮の子を抱へた女たちであり、女一般であるのはどうしたことだらう。彼女たちは、一様に幸福をもとめて狂奔した女性たちなのである。若い魂と肉體を捧げて、男を信じ、自分の愛情を信じようとした女たちばかりである。それなのに、社會生活のなかで衝突する女の生活の矛盾は、女自身の意志とはかゝはりなく、女性の生活を不幸にみちびいたり、脱落させる結果ともなつて、日々の歴史に、女の涙の生活がかぎりなく綴られてゐる。

要するに作者は、女の不運な生活の道ゆきが、愛情を信じうるか否かにかかつてゐることを繰返しのべてゐるのだが、女の脱落してゆくすがたといふものは、むしろ、相手を信じて倚りかか

らうとする、女の脆さに原因があつたのではあるまいか。女が社會的にも獨立できなかつたといふ古いしきたりが、ひたすらなる愛情のみに没頭する弱い心の持主として、女をいつの間にか獨りだちのできないものにし、また女自身も不知不識のあひだにそれを信じて生きるやうに馴らされてきたのではあるまいか。家庭生活においても、女が正常な、健全な發達をしなかつた理由のなかには、家庭の中に置き忘れられた妻が、涙の生活のなかでますます萎縮してゆき、母性としてのゆたかな愛や、妻としての信じきつた夫への信頼があるにもかかはらず、潑刺とした人間的自然性さへ失つた女のすがただけがとり残されてゐるありさまである。ここでは、戀愛と結婚の統一などといふことは思ひもよらぬ事柄である。それならば、男の心を信じ、自分の愛情を信じることによつて、女自身が救はれないことも考へられるだらうし、また女の幸福が、愛情に没頭することのなかだけにあるのでないことも肯けるであらう。

ところで作者は、行き過ぎない女として葵といふ女性を登場させてゐるのだが、この作者の理想とする女性が、はたして男の心を信じ、自分の愛情を信じきつて行動してゐるかといへば、さうではないのである。彼女にしても、臆病な推測と、要心ぶかい計算をおこたつてはゐないので

ある。それは、高村との交渉の経過をかんがへれば充分であらう。つまり、彼女は聰明であるがゆゑに、女の生活に起りやすい危険を自覺してゐたのだし、またそれゆゑに、男の愛情にも單純によりかかつてゆけなかつたのである。「自分でいい仕事を見つけて」といふ心理には、女の不運な歴史や見聞が、もつとも生々しく刻みこまれてゐたにちがひない。だから彼女は、愛情にたいしても、一面では消極的であつたし、性格に不似合なほど控へ目でもあつたのであらう。このやうなふるい因襲的な彼女の姿態は、たゞ生活の技術であり、計算の合理化から生まれたのである。同時にこのやうな抑制は、女一人が「社會」に立向つてよりよく現實的に生きぬかうとするとき、それが眞剣であればあるに従つて、ますます技術的にならざるをえないのが當然であらう。なぜならば、自分自身の力以外になにを信じ、なんに縋つて女性たちは、外部からの危険や障害をはねのけて生きられるといふのであらう。荒々しい波浪を、かばそい腕で漕ぎぬけてゆくためには、あるときは愛情にたいしても計算はおこたらず、あるときには、幸福といふことについてもうたがひ深い推測もしなければならぬのが自然である。ことに、生活的危機や道德の混亂に揺りうごかされてゐる男性を對象として、それはいつそう活潑にされてゆくのが自然である。

そして、そのやうな愛情にたいする計量や技術と、自己擴充とのふかいかゝはりの發展が、女性の因襲からの脱走と、新しい慧知の成長をあふりたててゐるのである。つまり、今日の女性は、男性の無力と動搖によつて、狭い檻からひろい歴史發展の舞臺におどりようとしてゐるともいへるであらう。

小説の上では、高村辯護士の兩腕のなかへちやんとをさめられてはゐるけれども、現實はこんなふうになまをあまり處理してくれぬかどうかは疑問である。したがつて、葵のやうな女性たちの直面する生活は、現實的にはもつときびしく、苛酷でもあるだらう。しかし、彼女のばあひなら、高村をはなれても充分に生きぬきうるであらう。獨立することもできるにちがひない。たとへ、現在のやうな激しい社會生活のなかでも、逞しい意志と生活力とが、彼女たちに新しい活路をあたへるにちがひない。また新しい女性の自覺のはげしさは、前進する意思の犠牲と苦惱のかずかずを、けつして、はかなく敗北の轍に埋もれさせてしまふことはないであらう。犠牲は、たくましい生活推進力の榮養となり、技術的慧知となり、苦惱の悲劇は、新しい生活轉換の歴史的前進の記録とならねばならない。

このやうな、つよい自覺と聰明な目ざめに立ちかへつた女性像として、今日の小説にゑがかれてゐる女性たちは、男性に負けない能力と教養をもち、あるばあひには、能力ある男性をもリードしてゆく女の姿であつた。

なるほどふるき昔語りには、大阪城の淀君や、シーザにたいするクレオパトラ、巴御前、板額といつた、男まさりの女性はあることはあつたが、物語りとして残されるほどに、それは例外であつたのだ。けれども今日では、帝都の中心地ビル街に吞吐される女性の群のうちにもとめるまでもなく、地方都市は、もちろんのこと、片田舎の役場、産組事務所のなかにまで、男性に伍して、堂々とタイプも打てば事務もさばき、命令も發すれば指揮もするといふ女性をみいだすことは困難でなくなつてきてゐる。

4.

このやうな、すぐれた男の能力にも比肩しうる女性の幾人かを思ひうかべるとき、「東京の女

性」に描かれる節子が、あざやかな輪廓で髣髴する。作者の説明にしたがへば、彼女は、「若い社員が多い興産にタイピストとしてはたらし、五年のあひだ血なまぐさい事件にかかはることもなく、少女時代の潔癖を土にもつけずに、二十三をむかへた」觸覺の新鮮な女性である。

「瞳が大きくて、だまつてゐてもその瞳に見つめられると、なにか熱い言葉をささやかれたやうに強い印象」をひとにあたへる彼女は、巷ではたらく多くの女たちとおなじ、職業婦人であつた。重役である伯父の口添へで入社した節子は、部長とか課長とかいふ位置の人間から食指をうごかされるやうなことはなかつたが、偶然自動車の賣込みからまつて部長と親しくなり、はては求愛されるが、はじめての經驗にも似合はず、冒險に心をはづませるほど彼女は、若い心で相手の氣持をうけることができなかった。家計をささへながら職場にはたらく女性に錆のごとく附着してゆく、あの世間臭い心の固執が、青春の身にふりかかつてきた男との交渉をも、楽しませなかつたのであらう。もつとも、相手は四十に手のとどく妻子のある男ではあつたが、妻と別れるといひだされても、彼女は興味がもてなかつたのである。また六十に近いある重役からも、おなじ誘惑の手がのびてゐた。三千圓出すからといふのである。なにを基準にした金額かは知るよしも

なかつたが、とにかく節子の周囲には、いろいろな男の好餌が示されてきた。

おなじ会社に勤めるセールスマンの木幡と知りあつたのは、およそこの頃からであつたらう。「彼は、セールスマンといふもつとも自由な職業をもち、帝都三千人の仲間のうちでも、第一級の手腕の持主だといはれてゐる、色の白い、がっちりした輪廓の顔立ちをした、獨身の青年であつた。立派な身だしなみをして伊太利物の自動車などを乗りまはしてゐる彼は、それでゐて、たゞの一度もなまめかしい噂もたてられずに身持してきた男であるが、この男と親しくなつたとき、はじめて節子は胸のときめくのを覺えた。」と、作者は書いてゐるが、彼女のセールスマンにならうとした動機も、いはば、彼と近づいたことが主な原因でもあつた。もちろん一つには、少しでも収入の多い仕事にたづさはつて、經濟的負擔を軽くしようと考えてゐたことも事實ではあつたが、セールスマンといふ仕事は、なによりもまづよき指導者がなければできないといふ性質上、どうしても好意ある相談相手が必要だつたからである。

「ダットサンには女のセールスマンは幾人かゐる。しかし興産でははじめてだからな。どんな

ものか知ら。節子さんが若しなれば、案外僕らの強敵になるのぢやないかな。怖いな」

木幡は、節子の申出を冗談まじりにきいてゐるふうだつた。

「車は買ふが、ついでに節子さんまで買ひたいといふ不心得者が出てこないとも限らないからね」

そんな風にもいつたが、結局、彼女の懇望をいれてやることになり、ここに彼女の、男に伍しての荒々しいせり合ひの仕事がはじめられる。

セールスマンとして必要な知識は、木幡がいろいろに指導してくれた。顧客の歡心を買ふための姿態や口上や機微についても、決意してかからねばならないやうな事柄まで、彼女は木幡からきかされた。困難と危険と、同時にスリルをもつた仕事であることが、しだいに節子にはのみこめてきた。三ヶ月の豫習をへて、はじめてセールスマンとしての仕事をはじめたとき、想像以上に金になるその仕事のえらさが、女である彼女にはひしひしとこたへてきた。いやらしい男のばあひも、虫のすかない老人の場合も、區別なく女の媚態を示さなければ客は満足しなかつた。

そして、客の満足を買ふためには、彼女も、ある程度は女のもつてゐるすべてを、武器として利用しなければならなかつたのである。これは彼女の、豫想を超えた困難な所作でもあつた。しかし、セールスマンとして出發したかぎりには、男の能力に負けない努力と勇氣とが必要である。だが女には、男の弱點につけている以外になにがあるだらう。彼女は、タイピスト時代にちかづいてきた重役やその他の男たちをおもひうかべ、接近する機会をそれとなくさがした。そしてある場合には、自分の肌をふる男の手や誘惑にも、好意と親切を考慮してちかづいていかうと努力もした。抱への運轉手たちのおつまつてゐる溜り場へ顔をだすやうになつたのも、木幡の指導があつたからばかりでなく、彼女自身が自發的にその必要をかんじたからである。セールスマンたちは、この抱への運轉手を買収することによつて、車の賣込みを計畫してゐたのである。そしてそれは七分どほり成功してゐた。

女であることが、男との接近を容易にはしたけれども、いちめんでは、女の内容をまもるための心勞が、男に理解できないほど深刻に骨身をいためつけてきた。ある運轉手は、賣込みを主人に承諾させるかはりに、結婚してくれともいふし、ある運轉手は、周旋してやるといふ口實で求愛してくるといつた、隙のない凝視が節子をとらまいてゐた。だが、どの男も、眞剣な氣持で彼女を對象にえらんでゐたわけではなかつた。連中にとつては、君塚節子といふ美しい若い女を、おもひきつて擲擧してみたかつたのだ。そしてそのために、節子の魂にどのやうな傷ができやうと、そんなことははじめから計算に入れてゐなかつた。彼等は、堪能するだけ笑つてしまふと、あとは、路傍の石のやうに節子の存在など無視してしまふのである。

「節子は何か張りあふ氣持で一杯だつた」——と書いて、作者はつぎのやうに彼女の心理を寫してゐる。「二十三の今日まで、これほど思ひきつた侮辱に會つたことはなかつた。自分が落着いてこの凌辱に辛抱してゐるのが、不思議なくらゐだつた。自分が一人だつたならば、部屋中をころげ廻つて口惜し泣きに泣いたに違ひない。——でも、あたしは腹をたてることは出来ないのだわ。セールスマンである以上は、自分が立腹するなどもつてのほかである。どのやうに踏んだり蹴つたりされやうとも、相手が客である以上は、機嫌をとらねばならないのだ。見榮とか、意地とか、うぬぼれなどは、初めから捨ててかからねばならない仕事なのだ。」と、こんなふうにかの女は決意して、自分にあつまつてくるいたづらの注視を忍んだのである。

タイピスト時代に、ある重役に手を握られたといつて、赤くなるまで水でこすつたことのある節子は、セールスマンに轉向して半歳もたつたころには、男の體温をとくべつ怖ろしいものと思はなくなり、女であることをかへつて意識して商談に利用してゆけるやうな、ふてぶてしい感覺の女になつてゐた。二號になるなら三千圓の金を提供するといつた男も、かはつた節子の物腰や態度に目をみはつた。

「以前の君なら、かうして手でもかけやうものなら、まるで毛虫でもついたやうにびくびくしたものだ、大した成長だ」

さういふ言葉をきいても、彼女は特別興奮もしなかつた。しかし、彼女がセールスマンとして達者な腕になつてゆくことは、木幡にとつては、何ともたとへやうのない厭な氣持であつた。彼は考へる。——この氣持は、いつたいどうしたことだらう。セールスマンとして客を口説くこつは、誰でもない自分が、痒いところへ手が届くやうに教へた筈ではないか。虚實交々な口説きの手のなかには、第三者の眉をひそめさせるやうな奥の手さへあつたはずである。しかも、節子が女性であることを、女の魅力をふりかざすことを、眞面目に勧めたのも自分ではないか。それな

らば、老人に馴れ馴れしくちかづいていかうと、誰にとり入らうと、彼女はただ自分が教へたとほりを忠實に勤めてゐるにすぎないではないか。ああして男に肩を抱かれることも、頬と頬がふれあふほどの馴れ馴れしさも、口説きの一手として、節子に十分いひふくめておいたことではないか。それなのに、このやうに不快な嫌悪や動搖をおぼえるのは、いつたいなにが原因なのであらう。嫉妬してゐるのではあるまいか。さうはかんがへたが、しかし木幡は、自分がうらぎられたやうな氣がして、節子の動靜を落着いた氣分で靜觀してゐることはできなかつた。

男の心理にますますふかく喰ひいつてゆくこのやうな嫌悪を、節子は知らなかつた。いや假りに知つてゐたところで、この場合どうすることもできなかつたにちがひない。自分のえらんだ職業に忠實であらうとすることは、同時に生活に忠實であらうとすることである。生活に誠實であらうとするためには、不正な手段をえらばないかぎり、あらゆる方法でなしとげるやうつとめねばならない。もしも、職業にたいする熱意のために戀人をうしなはねばならなかつたとしても、生活をすてることはできない。事實、節子はすこしでも収入を多くしたかつたのである。放蕩癖のある父と母をかかへた家庭を維持するには、タイピストとしての俸給では、どうにもならな

つた。だから、危険や困難が加はつてくることは知らないわけではなかつたが、セールスマンといふ、比較的ぼろい収入のある職業をえらんだのである。木幡も、かの女のさうした個人的な事情をよく知つてゐた。にもかかはらず、女性特有の羞恥や情操のうすれてゆくすがたを見ると、それが職業のためとはいへ、不愉快な氣持にさせられた。節子の妹に木幡の心がかたむいていつたのは、要するにかうした事情からである。こゝに新しい成長をたどる女性の強ひられた悲劇がある。

妹の水代は、節子にくらべて單純ではあつたが、素直なかしこさをもつた娘である。かつて節子に求婚したことのある部長にいひ寄られても、躍起にもならずにすり抜け、かへつて相手の氣持の裏をかくやうな仕草をたのしんでゐるかの口ぶりをする娘である。

「いまどきのあたし達みたいな女は、そんなに間抜けぢやないわ。一森さんにどんな野心があるのか、姉さんに教へられないでも十分に察してゐるわ。でも、そんな野心をうやむやのうちに抑へてみせるのが、あたし達の手柄ぢやない？ 最後までたうとう相手が何もいひ出せな

つたといふやうに仕向けることが、あたし達の手柄だわ。ドレスや靴や帽子は、いくらあつてもかまはないわ。作つてやらうといふんだもの。遠慮なしに頂戴してただけよ。言外に交換條件があらうとなからうと、そんな方面には、あたしいたつて鈍感よ。鈍感ぶつてゐるのよ。姉さんはすぐ良心とか潔癖とか持ち出してくるんだけど、相手に思ひ知らせるには、却つてさうする方が氣が利いてるでせう。むしろ積極的な方法だわ」

かうした會話からもうかがへるやうに、彼女と節子とは、功利的な思考感情に出發しながらも、女としての生きかたのなかに、たがひに背馳するやうな相異が形づくられてゐる。この相異を作者は、結婚を目的とする職業婦人と、職業と討死する覺悟の職業婦人といふふうについてゐるが、もちろん、それは外形のものであつて、それが兩者のほんとうの相異であるとはかんがへられない。それは、新しい職業的知性と倫理にめざめた婦人と、いつか女性の無力をかんじつゝ、生活の打算にのみ敏感な女性とのちがひでもある。積極的に生活を開拓しようとする意思と、舊來のままの位置と習俗をより功利的に生かさうとする防禦的な構へとの相異でもある。が、とにかく

水代が姉にくらべて、のびのびとした性格の女であつたことは事實であらう。木幡の心が節子からはなれて水代にうつていつたのも、一つには、この明るい感情と巧緻な女の受動性が、このましく思はれたからにちがひない。かくして、木幡と水代とは結婚する。

5.

二人の結婚の承諾はあたへたが、節子は、すこしも目出度い話のやうではなかつた。彼女の心は聲にならない悲鳴をあげて、底知れない奈落に墜落していつた。落ちていく運命が、はつきりとわかつた。それはどこにもとりつく島のない破滅の實感であつた。

「あなたの行動を見てゐると、生活第一、もともとあんたつて人は、戀とか愛とかいつてゐられない人間に生れつゝてゐたのだといふことが、段々僕にはわかつてきたのです」

あるとき木幡は、そんなふう感慨を洩らしたことがあつたが、それをきいたとき、節子は、職業をもつ女のある悲しい結果をおもはないわけにはいかなかつた。「そんな理窟はない。そんな

な馬鹿々々しい理窟はない。戀とか愛を感じないやうに生きてきた人間なんて、どこの世界へいつたつてある筈はない。神さまは愛したり生きたりする人間として自分たちをおつくりになつたのではないかと、相手のことばを跳ねかへすやうに心のなかで反撥するものをかんするのであつた。作者は、木幡との對話のあとで、つぎのやうに節子の自己判断を描いてゐる。

「節子の頭の中を、タイピスト時代の自分が掠めて通つた。あの頃の生活と、現在の、自分でも次第に潤ひがなくなつてゐると自覺してゐた。自分に残つてゐる潤ひといへば、商賣に使用するだけの毒々しい、強調された女の潤ひだけが残つてゐるやうに思はれて、暫らくの間の自分の變化を呆然と眺める落莫たる氣持になつた。」

節子にたいする木幡の感懐も、おそらくそれに似たものであつたにちがひない。これは「東京の女性」にゑがかれる節子の素描であるが、ここにかんがへられることは、職業と結婚に關するさまざまな課題である。職業をもつた女性は、職業に生きるために男の愛情を離れてゆかなければ

ばならなかつたといふのは、もちろん職業の性質にもよるし、女自身の個性的な傾向にも関係のあることではあるが、現実の問題として、今日の女性にたいする男の無理解と因襲的女性像へのまちがつた思慕がおほきな原因をもつてゐる。

たとへば「東京の女性」における木幡のばあひがさうである。彼は、節子がセールスマンになりたいといつて懇望したとき、虚實交々の口説きの手まで教へて、かの女の客にちかづいてゆくことを勧めてゐながら、年寄や男の誰彼と區別なく媚態を示すかの女の態度を見ると、快くはおもはないのである。彼は「嫉妬だらうか」といつて自問してゐるが、自分が愛情を感じてゐる女性が、セールスマンとして立派な成績をあげるやうになつたことを喜ばうとしないで、かへつて、線のふとくなつてゆく節子に失望をいだくやうになる。このことは、水代とかはす會話のうちに明瞭にあらはれてゐる。

「節子さんは男勝りだよ。だからあんな女と結婚すると、たいいの男は不幸になる。同時に、節子さんも惨めになるだけだ。だがそんなこと、君の姉さんは考へてゐないだらう。自分の平

常の振舞ひが男のひとにどんな風に映つてゐるか、そのことに氣づいたなら、節子さん、ゐても立つてもゐられなくなるだらう」

「仕方がないのよ。一家の責任を負はされてゐるんだもの。遊びたくつても、あれぢやろくろく遊べやしないのよ。女らしい潤ひがだんだんなくなつていくといふやうなことを、姉さんはよくいつてゐるわ。あたしどうせ職業と討死する人間だつて……」

「さうなんだ。節子さんには、結婚なんて生やさしい感情は、凡そ似合はないんだ」

かうした木幡の女性にたいする好悪感のなかには、男性に共通する利己的な感情がはつきりあらはれてゐる。女は、やさしく、美しく、従順であるべきもの、といふ古來からの道德律にたいする無意識の信仰が、もつとも近代風なセールスマンといふ職業に生きてゐる男の生活信条として、ゆるぎなきまでに固執されてゐることは、かんがへさせられる事柄だと思はれる。

男たちの荒い生活の呼吸のなかにまじつて働く女性のきめの荒さは、男が理解するよりもまへに、女性自身がはたらく明け暮れの中で自覺してゐる事柄である。ふるくから日本女性の美しさ

は、家庭におけるよき妻、よき母として良人の背後に身をひそめ、子供の守りとして、家庭の垣の中に年老ひていくのを美德とした。しかし、社會情勢の激化につれて、女性たちは過去のしきたりを静かに守つて生きるといふことがゆるされなくなつてきてゐる。銃後を守る力として、夫や子を戦線へ送りだしてゐる一家の經營の擔ひ手として、おもい責任とつよい自覺をもたされ、エプロンやモンベ姿となつて甲斐々々しく國と家とを護る立場に立たされてゐる。したがつて、女性自身の自覺のなかにも、過去の世界で男がもつたたいはゆる女の美しさやゆかしさは、はげしくうつり變る生活の日々において、別のものに變つてゆきつつあることをきづいてはゐるのである。別のものとは、いふまでもなく、明日の日本をきづくための護りや生産にたいする自覺を指してゐるのだが、そこにはより社會的な規模で、新しい生活能力の發揮されることが望まれてをり、したがつて、いふところの女性的な羞恥や臆病さは、すでに女性自身の手で清算されるべきところにまで一さいの事情が迫つてきてゐる。

今日の女性の象徴は、街頭に立つ果敢な職業婦人のはたらきと、エプロン姿の人妻や、母親た

ちの健氣な意志であるともいひうる。このことをかんがへるとき、「東京の女性」にゑがかれる節子は、今日いはれる自覺した女性のひとりであり、「職業に討死する覺悟」の決斷にとんだ心情のつよさにみなぎつてゐる。彼女は、自分で述懐してゐることく、「潤ひといへば、商賣に使用するだけの毒々しい、強調された女の潤ひ」だけだといつて、寂漠とした感じをいだいてゐるが、このやうに彼女を悲しませてゐるものは、「女らしい」潤ひだけをもつてゐる男の要求が、職業婦人の内面に培はれてゆくきめの荒さを嫌つてゐる事實を知つてゐたからであらう。木幡の水代にうつつゆく心理は、今日の男性に共通する心理といふだけでなく、社會と家庭を支配するものとしての立場から、その便宜と利害から、女といふものを見て、そこにもとめるものを基本としてつくりあげてきた封建社會からの男の習俗的な心理傾向でもあつたのである。これは今日でも、男の觀念に根づくこのこつてゐる陋習でもあらうか。しかし、こんにちのごとく、男性に劣らない能力と生活力をもつた、いや能力ある男性をもリードしてゆく女性たちの信賴の對象として、協力者として、健全な生活をうちたてようとする男の女性にたいする理解が、たんに、女らしい習性の側面だけに注がれてゐるといふのは、どうしたことであらう。それが男たちの過去の感傷

でないならば、はたらく女性の自覺のなかに積みあげられてゆく、するどい知性のひらめきや、
聰明な生活への目ざめをゆたかな理解でうけとるべきがほんとうではあるまいか。今日の國家に
おける強力な生産への要望といひ、あらたなる歴史の轉回のとどろきといひ、すべて男性の過去
の無理解を一掃しさるものであり、女性のたくましい進展の未來を祝福するものである。

Ⅲ 現代女性の發展と歴史への愛

1.

支那事變後、大東亞戰の捷利をかさねる銃後女性の國家的自覺と、その活動分野の擴大とをあ
はせかんがへるならば、事變以前の小説にあらはれる女性は、比較にならぬ無自覺のなかによこ
たはり、責任のおもさも、まだ個人的な範圍にとどまつてゐたといへやう。しかし、現實の女
性が、小説のなかに形象化されるには一定の年月を要するのであり、大東亞戰のかちどきにおど
る歡喜と、國家愛の奮起は、今後の小説をまつて展開されるであらう。そして、前に述べた昭和
期の代表作品にあらはれる女性は、まだ明治、大正からうけついで發展の系譜をより躍進的に展
開してゐるにすぎず、今日の女性の胸に一樣にのしかゝる國家的責任と、その使命へのあたらし
い發展はあらはれてゐるとはいへない。しかし、その發展を豫定する成長の過程にあること、な

らびに、いかなる苦難の試練にもたへて伸びゆく歴史的理性の成長と、行動力の逞ましさとを劃期的に表現されてゐる。

たとへば、愛情の巡禮にさまよひ出るかのごとき、「假裝人物」の葉子は、無思想時代のデカダンの代表ではあるが、輕薄な自負心のたはむれから生涯の途をあやまる「寢園」の奈奈江と同様、いはゆる轉形期の空虚のなかに翻弄された犠牲的存在である。彼女たちの敗北が、いかにも自墮落な女性のすがたとしてうつしだされてゐるのは、いはゆる生産への參與なくして、實生活を他力にすぎるか、そんなことには無頓着でゐられる境遇にあるからである。彼女たちも、またあはれむべき時代の犠牲的存在であるが、それは、現實の不合理や矛盾にたいするたゞかひでなく、むしろおし流されるうけ身のすがたであり、生活の意義を侮辱して復讐された例である。このやうに實生活を遊離して時代觀念のながれにわが身をいけにへにした女性のかたはらに、「眞實一路」の睦子のやうに、實生活からつねに、あらたなる意思と反省をうけとり、眞實へのこゝろをたわめぬ積極性をつちかひゆく婦人の成長もあつたのである。

生活における婦人の依頼心は、さかのぼつた原始時代から芽生えた。その依頼心のぬきがたさ

は、みられるとほり、昭和の今日にまでうれふべき心理的放浪の系譜となつてつたへられたのだ。星移り、月かはつて幾世代を越えても、つねに傳統的な依頼心は、さまざまな姿態となつて消えさることはなかつた。文學のために家をでた、「假裝人物」の葉子が、男から男への放浪にこゝろの不安を攪き消さうとしたのも、結局、彼女のなかに巢喰ふてゐた依頼心のさせるわざであつた。男から男へと渡鳥のやうに飛びあるいた彼女は、文學に憑かれるといふかたちで、理想を幻想のなかにおひこんでしまつた。理想は、實踐からはなれた。それゆゑに、かの女は男をえらび、愛することでは習俗をやぶり、みづからのおもふまゝを自由に追求しゆけるかにみえる。だが、彼女には、その自由そのものが、無自覺に環境におし流されるためによぎなくされた放埒さにすぎなかつた。と、いふのは、彼女がみづからをみづからで、さゝへようとする意思にみはなされてゐたからである。

「寢園」の奈奈江も、心理的な自由をおもふまゝに發展させるかにみえながら、その自由が彼女をほろぼし、彼女がほんとうにもとめる方向からそむかれる結果をみちびいてゆくのである。

この奈奈江や、葉子たちを代表とする女性が、ふるい因襲をやぶつてあたらしい針路におのれ

のみちをきりひらいたやうにみえながら、じつさいは、彼女たちのなかに脈々と原始時代からうけつたへられた實生活をあなどる習性や、それを他に依頼することろのために、みづから環境にやぶれさるものとして表現しなければならなかつたのである。ことに奈奈江は、人間生活を、かるはすみな自負心のたはむれにまかせるといふ不遜な心理ゆゑにめざす方向をあやまり、みづからの意思をたえず分裂するものとしてうけとらなければならなかつた。眞の自主性をかちえようとする努力のみちから、よちのぼらず、他力本願的な自由のたはむれが、いかなる犠牲となつてむくひられるかを特徴的にしめす類例である。「若い人」にうつしだされた女性像も、意思の分裂、愛情の不統一といふ點で、奈奈江の時代環境に生れた近代心理の畸形的な流動のそれである。

奈奈江や葉子にくらべて、「眞實一路」の睦子は、實生活を、眞剣にみづからのちからできりひらきゆく努力のなかで、徐々にゆるぐことのない信念をかためてゆく。しかし、「美しい囀」の乃武子は、實生活への努力のなかで、ひたすら餓鬼道におちた功利主義だけを、まなびとつた。そこには、女性の生活的獨立の困難が暗示されてゐるとともに、ながく人間性のゆたかな伸長をさ

へぎられた女性が、他にすがる道をうしなつたとき、いかなる人間的破綻におちいるかを明瞭にするものだ。こゝには、いはゆる活動する女性のつとめて自省しなければならぬ人間的な破滅の最悪の象徴があるとはいへぬか。名利の餓鬼道におちて、女性らしからぬ残忍な心理の究極をしめす典型として、シエクスピアのマクベス夫人がある。乃武子は、そのちいさな雛形のひとつであらうが、ともに、女らしからぬ残忍さとあまりの功利性にとらはれて、みづからの人間性を破滅させるばかりか、その娘博子の性格を破滅せしめ、その幸福をもぎとる結果となる。

マクベス夫人は、みづからの野望のために、ものをも犠牲にする女性である。彼女は夫マクベスがためらふのをはげまし、主君ダンカンを亡きものにして王位を奪はしめようとする。マクベスは、夫人の野望にあふられた殺逆の罪が發覺することをおそれて被害妄想的な亂心におちいる。夫人もまた、夢遊病者となつて狂ふといふのが、シエクスピアにゑがかれた強烈な野望に驅られる女性の典型、マクベス夫人の悲劇である。たうてい比較にならぬ功利心の激烈な象徴の悲劇であるが、「美しい囀」の乃武子も、その物慾性以外に盲目的な性格ゆゑに、娘博子の運命を破滅せしめる點は類似である。

女性が経済的に独立するといふことは、その觀念や意識の自律性をもつちかひゆく基礎ではあるが、しかし、それがけつして公式的に單純な展開をしめすものでなく、むしろ、そのための努力が、人間性の破壊や、自他の運命の障碍となつた例をおほくもつのである。乃武子はそのひとりである。彼女は、社會的獨立の地盤と職業をもつことにより、かへつて、みづから破壊させざるをえないひとりである。自立への積極性が、ゆたかな人格の發展をもたらさないかうした敗北は、くりかへすごとく、女性のひとりだちがいかに困難であるか、また、過去の女らしさの依頼心が、はげしくゆすぶられたとき、いかなる犠牲をまぢうけねばならぬかを暗示してゐる。しかし、乃武子によつて象徴される悲劇は、いはば發展しゆく現實の片側におけるマイナスの面である。このやうな自立するこゝろの悲劇にくらべて、「東京の女性」の節子や、「母系家族」の葵は、職業をもつことにより、ながくとざされた女性の、人間的成長の可能性をきりひらき、はたらくことによつてさづけられる慧知のたゞしい成長の軌道をもちえた女性である。そこには、まだ、ながく植ゑつけられた男の偏見と無理解のための悩みがある。しかし、それは、すでに男の偏見の矛盾をあざけり、無理解が葬られねばならぬ運命にあるものとして描かれてゐる。

大正時代から擴大された女性の職業への進出が、昭和の時代へとさらに躍進し、その社會的使命感はよりおもしろくははり、自立への希望も、可能の視野にあらはれたのである。したがつて、職業婦人を主人公とする小説もかす多くうみだされ、作家も職業をもつ女性のかたちづくりゆく新しい性格と、行動を主題とする方向にさそはれたのである。ある作家は、女性の自立的な歩みを悲劇として、あるひはそれが發展しゆく意義をわきまへず、過去の「女らしさ」のうしなはれゆくのをなげくふうを描きだしたかも知れない。しかし、ある作家の思想のふるさや、感傷のいかんにかゝはらず、その眼が、發展しゆくものと、消滅しざるものとの對立し、交流する現實をたゞしくみとほすことができるならば、職業婦人の成長のすがたを、發展の未來を約束するものとして描きださずにはゐないであらう。たとひ現實的には、女性の成長へのみちがいばらのみちであらうと、それが女性の熱をおびた努力によつてきりひらかれることが可能であること、いかなる習俗や、傳統も、もはや、それを防ぎとめるちからをもたぬといふ、いはば、女性發展力の、前進の必然性を描きだすであらう。「東京の女性」の節子や、「母系家族」の葵は、むしろ作者の女性觀にさからふかのやうに、未來への發展の良質な面が結晶されてゐるともいへる。

婦人が生産に参加することによつて、いかにするとい生活の知恵をつちかはれるかは、「煉瓦女工」の少女がものがたるところである。そして、今日のはたらく女性のおほくが、けつして、みづからの獨立といふ立場からでなく、むしろ、家の經濟の安定のためにすゝんで職場にあらはれざるをえない環境にあること、そのことが、いかに彼女たちをながい束縛からときはなつ機縁となりうるかをもの語つてゐる。もはや、婦人の生活や人格の自立が、女性みづからの成長のための、よぎない反抗としてではなく、國家、社會や、家庭への協力、献身といふかたちで、發展の軌道がつくられつゝあるのを知らねばならぬ。彼女の國民的愛情が、彼女の人格的成熟へのみちとなり、家族への共同の愛と、その實踐が、彼女を新しい人間的形成にみちびきつゝあるのだ。この事情は、いふまでもなく、事變の發展、大東亞建設の使命のくははるとともに、さらにひろく、さらに、きはだつて女性の發展的可能性を鼓舞したのである。

かつての時代、みづからを男の習俗からときはなち、おのれの運命をおのれ獨自の意思できりひらきつゝ、人格的な自律性をたゝかひとらうとしたとき、先驅的な女性たちは、ひたすら自愛のために、男性に對立することをよぎなくしたために、個人主義のせまい愛情におちいる危機さへむかへねばならなかつた。明治のすゑから、大正にかけての時代、婦人の獨立への意思は、たとひ、それがさげがたい必然の歴史的理性であつたとはいへ、個人主義の芽生えによつて解放されなければならなかつたために、ゆたかな女性の人間的成長と背馳する傾向をもたらしたのである。それが、やむをえない犠牲や、ゆきすぎではあつたが、そして、また、將來の女性を發展へとせきたてる意思の基底とはなつたが、その直接の結果は、男からの解放や、環境からの獨立が、女性みづからの愛情をエゴイズムのなかにとじこめ、その人間的な發展のひろがりや個人主義のわだちに突きおとさねばならなかつた。かやうにして、自己以外のなものをもかんがへることなく、たゞ功利的自我の貪慾な意思によつてみづからを限定したあかつきは、みづからの個性のゆたかさ、うるはしさをそだてはぐくむ機會からへだたるばかりであつた。いはば、明治大正における自由戀愛や、戀愛至上主義的思潮は、生活的基礎をもたなかつた悲哀をなめただけで

なく、生活からの遊離のために、愛情の全人間的な擴充からみはなされねばならなかつた。自由と解放への意思が、いちめんの積極性ととも、それを抹消するやうな否定的な傾向をもともなつたのは、すべて以上の理由によつてである。だが、歴史は發展する。歴史は永遠の進化を止めない。國家生産力の劃期的な擴充が必死にもとめられたとき、すなはち、事變の展開、大東亞建設への、日本の躍進にともなつて、女性の人間的成長への可能性も、有史以來の規模のおほきさでうちひらかれたのである。

かつて、個人主義の悲哀となつてむくひられねばならなかつた婦人の解放が、國家生産力の異常な發展に獻身するといふ過程でおこなはれ、家族や、社會への協力の良識のなかで、愛情のただしい人間的自覺がうながされつゝあるのである。なにより、總力戰體制の發展は、女性をまじへての、國民のすべての共同愛とその誕生をせきたてるものであつた。それは、國家愛の至上主義ともなれば、前線への感謝のこゝろともなつて、協力の感情がよびかへされることにも表現された。あるひは、父を、夫を、子供を前線にさゝげた女性が、その母性愛や夫婦愛を、たんにみづからの功利的なせまさにおいてふかめるだけでなく、國家や國民全體にひろがる愛情の擴充と

統一のなかで、より豊富な開花をかんじえたのである。歐米諸國においても、婦人の職業への進出が、餘技的な見地から脱却して、みづからの社會的使命として積極的に参加し、その實踐のなかで、職業そのものの愛着をふかめ、ながくうもれてゐた能力を伸ばし、人格のたかい向上へのみちもひらかれる機運をもつたのは、第一次大戰を境としてであるといはれる。かやうにして戰爭は、ことに、それが總力戰的體制の緊迫をくはへるとともに、婦人をつつてのもの靜かな、しかし束縛のきづなとなり、自己發展をとざした雰圍氣から解放しつゝ、その全能力の發揚の機會をめぐむのである。

したがつて、現代の女性は、總力戰的體制への獻身のなかで、その社會的地位をひきあげ、かつての、女らしさの弱さや依頼心をふりすてて、男子をしのご能力の發輝へとたちむかつてゐるのである。愛情の展開は、個人から國家へとひろがり、そして、そのたゞしい擴充は、つきに世界史の發展と自己の努力とのふかいかゝりをも、つよく意識せざるをえない境地にみちびきつある。いはば、日本の大東亞建設が、世界史の發展を使命とする民族の倫理的責任と良心のたかひであるごとく、女性もまた、夫や、子供や、家庭への愛情の個人的せまさから、國家、社

會を、そして、それにつらなる世界史の發展にみづからのちからをつくす愛情の擴充、國民的協同愛を自覺しなければならぬ時代をむかへたのである。

かくして、銃後をまもる妻の愛、生産力への獻身のそこに、あるひは、生産總力の増強を充實する母性愛のなかに、女性みづからのながい苦惱の世界は、ひとことに生氣ある夜明けの舞臺と交代しつゝあるのだ。

もはや、みづからが、みづからの運命を支配する自律のころを形成するだけではたりなくなつた。みづからはふかく、うけつきゆく歴史の發展にかゝりをもつといふ自覺のもとに、あらゆる愛情や、努力や、いとなみを、全人間的な愛情の自發的な獻身によつてつらぬかねばならぬのである。國家への愛、母性の愛のゆたかな燃焼も、けつしてみづからを無心にして、刹那的に溺れゆくことにをはるのではない。それは、たゞしい自覺と、つよい自發的な知性をとほして、さらにちからづけられ、より擴充されてゆかねばならぬのである。

明治、大正、昭和の小説にあらはれた三代女性の愛情と、モラルの展開は、ひとすぢに發展的な方向をきづきあげたとはいへない。そこには、おもはぬ障害や、ゆきすぎの破滅もあつた。し

かし、各時代に展開されたおほくの女性たちの、前進的なすがたばかりでなく、その否定的な方向のなかにさへ、現代女性の自己革新をみちびく教訓のかすかすはひめられてゐる。また、みづからのころの内側や底ふかく、ふるい過失や、破綻した女性の歴史的 성격の殘滓は、しだいに影を消しさりつゝあるにしても、まだ現代女性いつぱんの、むねふかく巢喰ふてゐることはないなまれない。と、いふのは、いかなる革新の轉回も、歴史的には、無からの創造ではないからである。

なるほど轉形期の人間は、みづからの歴史を創造し、舊代と對立する方向に歩みゆく。しかし、創造的にみえるかれらも、けつして自由放埒に空想的な企畫をすゝめうるのではない。それは、かれらにうけつがれた傳統をひきつぎ改造するかたちで、あらたなる歴史の形成がうながされるのである。それゆゑに、いかなる轉形期や、革新期においても、ふるいものへの憤怒と、あたらしい前進への歡喜に餓える精神のなかにさへ、みづからがすてきらぬ過去の惡質は生きのこつてゐることを知らねばならぬ。それを征服しきることは、ひとへに個人の自覺的な努力によるのである。このやうに、自己革新の完璧なみのりは、それが四圍の環境から強ひられるかたちでなく、

みづからの歴史的自覚の發意によつて、まつたき結果をもたらすのである。いふまでもなく、今日の女性は、日本歴史のはじまりからの性格、感情の漸進的な進化の結實をひきつぎ、擴充しつのであるが、過去の善惡のいづれをも、たとひ、それは衰弱と興隆のかたちでひきつがれやうとも、ともに、うけわたされた事實は、うたがふ餘地もないのである。それゆゑに、明治大正をふりかへり、事變まへの女性の歴史的な性格と、その革新へのたゞかひのすがたは、今日の女性の自己革新の課題にふかくかゝはるのである。それは、一定の歴史的な發展途上のすがたとしてうけとられるとともに、みづからのうちに、いまだねづよく巢喰ふ性格のながれとして、暗示ぶかき反省のよすがとして、かへりみられなければならぬのである。その意味で、三代女性の文學的反映のなかには豫定され、約束された女性の前進を、より充實するための課題が、かぎりなき豊富さでよこたはつてゐる。女性の歴史的躍進のみちは、これをたゞしく消化し、克服しつゝ、つぎの時代への繼承をよりたゞしくはたす責任の自覺につらなる。原始時代から、世代をたやさぬ土壌として尊ばれた女性は、けふから未來にかけて、そのうけ身な形容を跳ねとばすものとして、積極的に歴史を發展せしめる基礎的な生命力となつて、無限に擴充されなければならぬ。

あとがき

(小説の女性と現實の女性について)

まへがきで、私は、文學が現實の反映であるならば、小説にあらはれる女性をたどつて、女性思想史を綴ることも可能だと書いた。しかし、これが可能だといふことは、むろん容易だといふことでなく、その可能性は、じつに複雑な困難をはらむといふことをつたへたい。

小説はなるほど、たとひ素材が架空なものであつても、作者の眼にうつつた現實の女性像を媒介として創造されてゐるわけである。だから、どんな小説も現實のなんらかの反映であることにまちがひないとしても、どの部分の反映であるか、一般的なものか、部分的なものか、その時代の特殊性を描きだしてゐるか、それとも、作者の生きた時代の女性の特質でなく、それ以前の、あるひは、ふるい歴史のなかの女性の型であるか、さういふことを、丹念に指摘するのは容易ならぬことである。専門批評家のあひだにさへ、その觀察の相異はたえず論争となりうるし、また、

批評専門のひとにさへ、困難なのだから、一般の讀者諸君が、それを正確に感得することはむづかしく必要もないかも知れぬ。そして、事實、私自身も、この書に扱つた小説のなかの、女性の觀察について、誤謬を犯してゐるかも知れない。しかし、大體は、誤謬を犯す困難な解釋にまでいたらないでをはつた部分が多いのである。

それは私が卑怯で、無力だつたからではない。いつばんの讀者に、必要の範圍を越えなかつたにすぎない。ことに、ある小説の主人公の女性が、どれだけ現實に迫つたものであるか、現實のどの層に生きたひとか、作者はどんな意圖でかいたか、その意圖はどこまで達してゐるか、等々の問題には詳しくふれなかつた。たいていの筋書に、右のやうな觀察について、必要な程度に大きくはへたが、これを詳細に分析註解することは、批評論になるので止めた。

趣味や娯樂の程度で、小説をよんでゐれば、さうでないが、少しく詮議を深めると、小説のよみかた、解釋の方法は、現實のそれと同様にふかい文學的認識と、社會、科學、歴史、等々の知識を必要とする。どれだけ、ある小説が現實性をもつかを知るには、歴史の實體そのものを知らねばならぬ。だから、例へば、明治時代の小説をよむに、明治の歴史の總體にかんする知識、そ

のうへに、その歴史の發展する構造のなかに生れる思想の實體にもあきらかでないならば、そして、なにより重要なことは、作者がある女性をどのやうに、つまり、新しい時代の象徴としてか、時代から敗北しざるものとして描いたかをみわけることだ。そのことは、作者が、とらへた女性を歴史の發展のプロセスでとらへてゐるか、固定したものとしてとらへてゐるかといふことにもかゝはる。つまり、ある作家は、一般に女性とは、こんなものだといふ風にかく。また他の作家は、この女性は、この時代の影響をうけた特質ある個性をもつといふやうにかいてゐる。しかし、たゞしくは、作者の思想や意圖のいかんにかゝはらず、その時代の特徴ある思想の影響や刺戟によつて、作者はいろいろな人物をかたちづくるのだ。そして、その作者の生きた時代にみいだすことのまれな女性だつて創造する。それゆゑ、たとへば、明治の小説の女性が、全部明治時代の特徴をおびた、現存した女性であつたかどうかはきびしい批判を要する。そのやうに、小説にあらはれた女性をとらへて現實の歴史をえがくことは困難である。

だが、私は、なるべく、有名な小説で、そのうまれた當時の社會現實を、たゞしく映しだした小説をえらんだ。たいてい、文學の傑作は、その誕生の時代の現實の特質を射ぬき、あるひは、